隻腕の狼、大正に忍ぶ。

橡樹一

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦乱渦巻く日ノ本。戦場で大忍びに拾われた１人の少年は、狼と呼ばれる熟練の忍びとなった。

主の命を受け自らの命ごと不死断ちを成した狼は、気がつけば見知らぬ森で目を覚ます。

混乱する狼だったが、未だ死なずが存在すると知り、主の命を果たすために行動していくことになる。

隻狼と鬼滅の刃のクロスオーバーとなります。

気ままに書いていく予定となっていますので、楽しんでいただれれば幸いです。

ｐｉｘｉｖにも投稿しています。

目次

不死断ち、そして ―― 1
鬼殺隊本部 ―― 14
当主との語らい ―― 27
水柱、越津今座衛門の見解 ―― 41
狭霧山の育手 ―― 53
鍛錬の日々 ―― 66
最終選別への挑戦 ―― 80
合格者の通過儀礼 ―― 92
継子決定と長就任 ―― 106
刀鍛冶の里狂騒曲 ―― 119
職人の性 ―― 131
大正コソコソ噂話集、壱 ―― 144
大正コソコソ噂話集、弐 ―― 160
岩柱 ―― 173
狭霧山の若い芽たち ―― 188
慶事の騒ぎ ―― 201
藤襲山に潜む影 ―― 214
山狩りと手鬼 ―― 230
炎柱と狼衆 ―― 246

不死断ち、そして

ススキが一面に広がる野原の中で、1人の男が自分の首に刀を当てていた。刀身を赤黒い瘴気がうっすらと覆っている、すがすがしいまでの妖刀だ。

不死切り。名の通り、通常の手段では殺せないものたちを殺すための刀だ。

「最後の不死を、成敗致す」

ふと、男は地面に横たわる今生の主を見た。竜胤と呼ばれる呪われた運命の下生まれた少年は、目覚めるころにはただの人間になっているはずだ。

この戦乱渦巻く日ノ本で、男が心の底から喜ぶことができる数少ないものが主との出会いだった。元服もしない年齢ながら、その聡明さと優しさに心を打たれ忠義を捧げた。忍びの掟を破る事を選ぶほどに。

男にとってもはや摩耗した最初の記憶。戦場漁りをして糊口を凌いでいた日常で、とある戦場跡で義父に拾われ、狼という名を与えられ、忍びの技を叩き込まれた。

狼は策略により主を奪われ、取り戻すために立ちふさがる全てを斬った。雑兵、名のある将、城を守る忍び、この国の主さえも。

そして主の願いを叶えるために、この葦名の地を駆けた。そして多くの信じがたいも

のを見、出会う障害をまた斬った。策略の元である義父さえも。

竜胤の御子と交わした契りにより、何度でも蘇る体ですべての強敵を打ち倒してきた。代償として幾度も死に、そのたびに這い上がるようにして勝利を掴み取ったのだ。

「人として、生きてくだされ」

その集大成が今、成される。その身を切れば、主が、御子様が望んだ不死断ちは成される。たとえ自分がいなくなっても、エマ殿が主の面倒を見てくれるだろうという確信が狼にはあった。余計なお世話かもしれないが、彼女に良き縁があるようにと狼は祈る。

頭の中の整理も終え。いよいよ首にかけられた刃に力が籠められる。刃筋を立て、忍びとして鍛えた腕で一息に刀が引き抜かれた。

わずかな痛みと共に、狼の視界がくるりと回る。彼の目に最後に映ったのは、桜のように散る自分の体だった。さて、この身にしては、ずいぶんと豪華な死に際だと他人事のように考えながら、熟練の忍びの意識はゆっくりと闇に沈んでいった。

ふと目を開けると、何故か狼は夜の森らしき場所で仰向けに倒れていた。

狼の脳を疑問が埋め尽くす。おかしい。不死をも殺せる不死切りで首を落として、何故まだ生きているのかと。彼の視界には木々と星空が広がっている。ある程度心は落

ち着くが、謎を解く手掛かりにはなりそうにない。
ひとまず仰向けに倒れていた体を起こし、無言で装備を確認する。今更惜しむ命でもないが、こうして自分が生きている以上不死断ちが成っていない可能性があるのだ。主の命を果たせぬまま死ぬわけにはいかないと、忍びは考える。
ひとまず体を見渡すと、装束から持ち物から、首を落とす直前のままだった。
「どういう……ことだ……」
抜き放ち結果として地面に転がったはずの不死切りすら、当然のように背に収まっている。万が一を考え鯉口を切り僅かに刀身を見るが、赤黒い瘴気は変わらず刀身を覆ったままだ。不死切りの力が失せたことが原因ではないらしい。
「まさか」
狼は愛刀の楔丸を抜き、刀身に顔を写した。不死を断って消えるはずの白い痣が、はっきりと顔に浮き出ている。
まさか御子様の竜胤を消しきれなかったのだろうか。中途半端に力が失せたせいで、こんなよくわからないところで生き返ったのかもしれない。
「ぎゃあああぁぁぁぁぁ！」
ひとまず、葦名に帰り御子様を探さなければならない。そう考えた狼がひとまず森を抜けようとした矢先、悲鳴が聞こえてきた。同時に、こちらへと足音が向かってくる。

情報を得るには丁度良いだろう。木々の間を必死に逃げる男の腕を強引に掴んで止めると、男は恐怖に染まった顔で狼を見た。だが逃げていた相手ではないとわかると、僅かに表情が緩む。

「お、脅かすなよ！　鬼に追いつかれたかと思ったじゃないか！」

「鬼……」

男の発言に思わず狼の眉間に皺が寄るが、脳内で言葉を咀嚼し理解したとほぼ同時に男が走ってきた方向へと飛び出した。

「おい、行くな！　死ぬぞ！」

背後から聞こえる男の声を、狼は無視した。速く逃げたいだろうに、見ず知らずの相手へ逃げるよう叫ぶのだから、男はよほどの善人なのだろう。無事に逃げられればいいがと考えつつも、狼は足を止めない。

鬼と聞いて狼は、真っ先に赤鬼を思い出した。怪しげな施術により半分異形と化した彼らは、放っておけば被害を振りまく。同時に葦名への手がかりになるかもしれないのだから、見逃す理由はないだろう。

丁度いい木に目をつけ、狼は忍び義手から鈎縄を飛ばして一気に宙を舞った。そうしているうちに、思い出さないよう無意識に考えていたもう1つの鬼が狼の脳裏に浮かびあがる。

怨嗟の鬼。狼にとって恩ある仏師が、戦場の怨嗟をその身に溜め込み変じた化生だ。確かに狼自身の手により止められたはずの存在が、もし生きていてまた怨嗟の炎を振りまいているのだとしたら。今度こそ、止めねばならない。それが今の狼にできる恩返しだろう。

などと考えていると、森の中に僅かに開けた空間が見える。そして、そこで殺し合う3つの影。

1つは黒い制服に身を包み、刀を握っている男だ。独特な呼吸音と、刀を振るうたびにうっすらと謎の水飛沫が見える。

もう2つは、なんと素手で黒服の剣士と渡り合う男たちだった。鋭い爪で剣士を引き裂こうと襲いかかり、尖った牙を見せて笑う姿は獣のようだ。なによりも、剣士の抵抗でついた刀傷が瞬く間に塞がっていく。

「死なずか」

殺すべき目標を見据え、狼は忍び義手の鈎縄を使いより高く宙を舞う。狙うは、今まさに体勢を崩した剣士を殺そうとしている死なずだ。慣れ親しんだ感覚と共に、狼は死なずの背に勢いよく着地した。

鬼殺隊の隊士は、死を覚悟していた。夜ごとに人が消える森に調査に入ったまではい

つもの任務と変わらなかったのだが、人が食える森という話を聞きつけたのか普通は群れないはずの鬼が2匹も潜んでいたのだ。

1対1ならば並の鬼程度どうとでもなる隊士でも、相手が複数となると勝手がまるで違う。救いは鬼同士の連携が全く取れていない点だったが、それでも再生にかまけて同士討ちすら厭わずに襲いかかる。

隊士が修めていたのが対応に長けた水の呼吸でなければ、すでに死んでいただろう。酷なようではあるが、彼の腕では死までの時間を引き延ばしただけだが。

襲われていた男を助け、何とか引き延ばされていた修羅場もそう長くは続かない。鬼の体力はほとんど無限であるのだが、それに対峙する隊士は鍛え上げているとはいえただの人間だ。体力も精神力も容易に減少し、それらは戦闘中に回復などしない。

「しまっ」

集中力の途切れから、隊士の足が木の根を踏み僅かに体勢が崩れた。その隙を逃さず、近かった鬼が爪を振りかざして隊士へと襲いかかる。狙いは頭。隊服を裂けない下級の鬼だが、人間の頭程度ならばたやすく粉砕する腕力を持っている。

眼前に迫る死を見て、隊士は不思議と冷静だった。崩れた体勢では満足に型も振るえず、迫る腕を弾いてもう1本の腕で殺される。

婚約者を鬼に殺された自分には何も成せず、ならばせめて最後まであがく。そう隊士

が心を決めて不完全な型を繰り出そうとしたその時、突然鬼めがけて影が落下した。いくら鬼が超人的身体能力を持とうとも、それを活かせなければ何の意味も無い。無様に顔面から倒れ込んだ鬼の上には、見慣れない男が立っていた。和服と洋服を掛け合わせたような衣装に身を包んだ襟巻きの男は、鬼を踏みつけたまま背負っていた大太刀を抜く。

その刀身に、隊士は嫌悪感を隠せなかった。おぞましい赤黒い瘴気が渦巻くそれは、人間が使ってよいものではないだろう。その刀身を、男は一息で鬼へと突き刺した。

「逃げろ！　鬼はこの刀で首を」

「ぎ、あぁぁ……」

とっさに叫んだ隊士の言葉を遮り、突き刺された鬼が苦しげな呻き声をあげる。縋るように弱々しく地面を掻き、それを最後に沈黙した。

「……え？」

疑問を漏らしたのは、隊士だったのか、それとも鬼だったのか。日輪刀で首を切らなければ死なないはずの鬼が、異様な刀を突き刺されただけで絶命した。本来塵のように消滅するはずの体も、欠損無く残っている。

「ひっ、ひいいいいいっ!?」

未知とは恐怖だ。ありえない死を目撃した鬼が木々の間を縫い逃走を図るが、鬼を殺

した男が左腕を振るうと情けない声と共に墜落した。隊士の鍛えられた目には、左腕から直接何かを投げつけたように見えた。

墜落した鬼へ、男は躊躇無く飛びかかる。隊士は、その光景を唖然と見ていることしかできなかった。

夜の森で狩りをしていたはずの鬼は、混乱の極地にあった。いつもと変わらない夜、いつものように不用心な人間を襲い、自分の狩り場に紛れ込んできた邪魔者が横から獲物を奪おうとしてきた。争っているうちに鬼狩りが現れ獲物には逃げられたが、鬼狩り1人を食えばいいだろうと不作法な邪魔者が考え無しに鬼狩りと戦うところを見ていた。

このまま鬼狩りも邪魔者も消耗したところを横から奪う予定を狂わせたのは、空から降ってきた人間だった。

忌々しい日輪刀からはほど遠い妖刀で、首を切られなければ死なないはずの鬼を一突きの下葬った謎の男。木々を跳んで逃げようとするも、足に何かを当てて逃亡を封じられた。

「……参る」

眼前の男が構えたのは、日輪刀でも妖刀でもない、ただの刀だ。拍子抜けすると同時

に、鬼は腹の底から怒りがわく。
「なにが参るだ、死ね！」
下手な刃物を凌ぐ爪を振りかざし、鬼は男めがけて襲いかかる。だがその連撃を、男は刀一本で弾き返した。
「腕は立つようだが、いつまで持つかな!?」
しかし、爪は両手にあり鬼殺隊士はまだ遠い。不気味な太刀を抜く暇さえ与えないほどの連撃を繰り返せば、自らの剛力も相まってすぐにでも殺せるだろうと鬼は判断した。連撃という選択肢が、最悪の手段だったとは思いもせずに。
鬼は強力を活かした連撃を男に叩き込むが、その全てが刀に弾き返される。ただ力で押し返されているのではなく、柔らかく受け流されている。そのためどうしても腕に体が引っ張られる形になり、体幹がずれ始めた。
攻めているのは自分なのに、何故か自分が不利になり始めている。その事実を否定しようと鬼は攻撃を激しくするが、焦りと怒りのためにむしろ単調な攻撃となってしまう。見ればもう鬼殺隊士がもうすぐそこまで来ている。
「いい加減、死ねや！」
鬼が放った渾身の一撃を、男は弾くでも避けるでもなくただ見ていた。ついに殺したと確信した鬼を、今までで最大の衝撃が襲う。

力を込めて伸ばされた腕が、男に踏み躙られたのだ。まるで一撃が来ることをわかっていたかのように男は前へと踏み出し、手の甲を足の裏に当てて地面へと踏みつぶした。強く踏み込んだことに加えて今までの攻防で体幹が崩れていた鬼は、地面へと叩きつけられた腕の動きに反応ができない。大きく体勢を崩した鬼に向かって、男が持つ刀が突き出された。切っ先が鬼の眼球を貫き、脳をかきまわす。

無論、この程度で疑似的な不死を持つ鬼が死ぬことは無い。しかし、不死であろうとも体の構造は変わらないのだ。目が無ければ物は見えず、耳が無ければ聞こえず、手足が無ければ動けない。そして体を動かす脳が破壊されれば、修復されるまでは満足に行動すらできなくなるのだ。

脳が再生するまでわずか数秒だが、男にとっては十分すぎる時間だった。刀が引き抜かれると同時に背中の大太刀が音もなく抜かれ、一振りで鬼の首が宙を舞った。納刀と共に倒れ伏した鬼が動き出すことは、もう、無い。

美しいまでのとどめを、鬼殺隊士は声もなく見とれていた。

死なずを2人とも切ったが、鬼と呼ばれるほどのものではないと狼は感じていた。腕力はあったが獅子猿ほどのものではなく、速度は孤影衆のほうが早いだろう。身のこなしも寄鷹衆には及ばず、総合的に見ればせいぜいが赤目の鬼と同程度。かの怨嗟の果て

に変じた鬼とは比べることすら馬鹿らしい。
ひとまず、今現在のところ体と道具に大きな変化が出ていないことがわかったことは収穫だろう。原理はどうであれ、今だ死なずが活動している以上御子様の命令は生きているのだ。
どのようにして葦名に戻る手掛かりを探そうと考える狼へ、背後から声をかけられた。
「ちょ、待ってくれ！」
振り返ると、死なずと対峙していた黒服の男が慌てた様子で狼の様子を窺っていた。
「助けてくれたこと、礼を言わせてくれ。
それと……失礼だけど、あなたは何者なんだ？　日の光でも日輪刀でもない、得体のしれない刀で鬼を殺すなんて聞いたこともない」
「……明かせぬ」
忍びである以上、自らの素性を明かすことなどあってはならない。かつて葦名の地では、初対面の相手からほとんど一目で忍びと見抜かれてはいたが、あれは相手が見抜いたのだから仕方がないだろう。
「すまない。命の恩人に言うことじゃないのはわかっているんだけど、鬼殺の新しい手段となりえるあなたとこのまま別れるわけにはいかないんだ。礼もしたいし、数日だけ

でも時間を割いてはくれないか？

相応の礼はしたいし、このまま別れてもたぶん数日後には俺の組織から使者が行くと思う。無理強いはしないだろうけど、二度手間になるより俺の礼を受けながら待ってくれないか？」

男の言い分に、狼は少し悩んだ。数日とはいえ時間は惜しいが、この地から葦名までどれほどかかるかわからない。数日程度ならば情報を集め、礼として葦名までの路銀を受け取ったほうが効率的かもしれない。

「……いいだろう。しかし、あまりに長くなるようならばこちらの判断で出立させてもらう。それで構わぬというのならば、その話受けよう」

狼の返事に、男は安心したように笑みを浮かべた。

「ありがとう。俺がとった宿がそう遠くない場所にある。案内するよ」

嬉しそうに歩き出す男の背を追いながら、狼は呑気にもどの程度まで待つかを考えていた。気が付かなければならなかった。男の服が、戦国にしては小ぎれいに過ぎたという事実に。身に着けている道具が、明らかに洗練されすぎているという違和感に。異常事態が言い訳にならない失態を犯していた狼は、街に出るや否や非常に大きな衝撃を受けることになる。

美しい日本庭園を持つ屋敷で、一人の男が烏から文を受け取っていた。内容を一読した男は、手を叩いて使用人を呼ぶ。

「すまないけれど、近いうちに人を呼ぶことになるかもしれない。準備をしてくれるかい？」

一礼して去っていく使用人を見送ると、男は穏やかな雰囲気のまま静かに笑みを浮かべ、机から一冊の手記を取り出す。

「これは、この本を手渡す人が本当に来たのかもしれないね」

優しい目つきで男は古びた本を開き、すでに暗記している内容を改めて読んでいく。

本の表紙には〝葦名伝九朗記〟の題が達筆な毛筆で書かれていた。

鬼殺隊本部

鬼と呼ばれる死なずを切った狼は、是非礼がしたいと言う男――川原と名乗った――の後ろについて町に向かった。そこで目にした光景に、思わず言葉を失う。

「どういう……ことだ……」

狼の眼前には、見慣れた葦名の地とは比べものにならないほどに発展した町並みが広がっていたのだ。それも発展しているだけではなく、そこかしこに戦国ではあり得ない道具の数々が目に入る。

「どうしました?」

狼を心配そうに見る川原は、特に疑問に思っていない様子だ。

「今は、何年だ」

絞り出すような狼の問いに、川原は訝しみながら口を開いた。

「大正になって何年だったかな。

えっと、顔色が悪いけど、大丈夫ですか?」

今の狼に、川原の問いかけに応える余裕など無くなっている。狼の記憶では、最後に聞いた元号は文禄だ。文脈から大正が元号の一種であることに見当はつくが、それはつ

まり元号が変わるほどの間狼は主を放置していたということに他ならないのだ。
「さすがに鬼2体を切ったことは精神的に負担だったみたいですね。宿も近いのでもう少し頑張ってください」
狼が静かに混乱する様子を、川原は鬼との戦闘から出た疲労が原因だと考えたようだ。僅かに足を急がせながら、狼を先導する。
「藤の家があれば本部との連絡も楽なのですが、どうもこの辺りには見当たりませんで。ああ、申し訳ない。そのあたりの話は、宿についてからにします。ここで話しても困られるでしょう」
いつのまにか、川原は狼に敬語で接するようになっていた。最初こそ助けた礼のつもりかと考えていた狼も、こう話しかけられ続ければそのことに疑問の1つも沸く。
「お主、なにゆえ敬語など使う」
「命の恩人相手に、礼を失しては鬼殺の隊士として恥ですから。あなたの腕前に感服したという理由もありますがね。
おお、宿が見えました。宿の主人には私が話をつけますので、少々お待ちになってください」
そう言い残し、川原は宿の中へと消えていく。
狼は川原の言葉を聞き、どうにもむずがゆい思いをしていた。元々仕える者として義

理の父たる大忍びから徹底的な教育を施されてきたのだ。今更他人から敬われるなど、どうにもすわりが悪い。とはいえ、相手が悪意を持たず純粋な敬意から敬語を使っていることは狼にもわかる。ひとまず好きにさせるかと考えたところで、宿の戸が開き川原が顔を出した。

「同じ部屋ならばということでなんとかなりました。ささ、案内します」

そして川原の先導の元、狼は宿の寝室にまでたどり着いた。にこやかに狼を招き入れた川原だったが、部屋に入った途端表情を引き締める。

「まずはこの度の助太刀、まことに感謝しております。貴方様がいなければ、この身は悪鬼の腹に収まりあの者どもの力を増す結果となっていたことでしょう」

「待て。まずは、その悪鬼とやらについて聞かせてもらおう」

狼の要求に頷いた川原から聞かされたのは、狼をしてにわかには信じがたい話だった。夜の闇に紛れて人を襲う鬼。人間をたやすく引きちぎる怪力に加え、人を喰えば喰うほど強くなり、異能に目覚める者すらいるという。夜の闇の中ではほぼ不死身といっていい再生能力を持ち、しかし日の光を浴びれば瞬く間に肉体が崩れ去る。

その鬼に対抗するために組織された、政府非公認組織である鬼殺隊。部外者ゆえに自己の判断で詳しいことを話すわけにはいかないとは川原の弁だが、日の光以外で唯一鬼を殺すことができる日輪刀を携えて今日も人知れず鬼を切る。

この話だけを聞いたのならば、狂人の妄言として片付けられてもおかしくはないだろう。しかし、狼には先ほどの戦闘という実例があり、さらには葦名の地で戦った多くの化生という経験もある。

ひとまずは信じようと考えたところで、宿の窓にはめ込まれた木戸が軽く叩かれた。

「おそらく私の仲間です。少々失礼しますね」

一言断り川原が木戸を開くと、黒頭巾で頭部を隠した人間がひょっこりと顔を出した。川原と二言三言話し合うと、頭巾頭は一礼して去っていく。

「さきほど貴方が殺した鬼の死骸を回収するよう頼みました。実物があれば、信用も得られやすいでしょう」

川原の言うことには一理ある。特に、本来ほぼ不死身である鬼を特殊な刀で刺し殺したなどという、鬼を深く知るものならばより強く否定するであろう情報を、鬼殺隊本部へと報告するのだ。証拠はいくらあっても困ることはない。

「さて、と。私はこのまま報告書を書きますが、貴方はどうしますか？　お疲れでしょうし、何か起きればすぐ起こしますので」

「では、言葉に甘え休ませてもらおう」

もちろん、言葉通り無防備に寝るつもりなど狼には毛頭無い。ふすまを閉め川原から視界を切ると、壁を背にし、片膝を立てて刀を握る。最速の動きで刀を抜けることを確

認し、僅かな音でも目を覚ますよう気を張ったまま、狼の意識はゆっくりとまどろみに沈んでいった。

どれほど眠っただろうか。隣の部屋で動く気配を感じ取り、狼は静かに目を開いた。木戸がゆっくりと開かれる音と共に、鳥の羽音が響く。木戸の隙間から見るに、未だ日は昇っておらず夜の闇が広がっている。そんな中飛ぶ鳥など梟くらいのものだが、彼の鳥は羽音を立てない。かつて狼が対峙した敵の中には、犬を自在に操った槍足の正長という忍びが存在した。鳥を操る忍びが居ても、おかしくはあるまい。音を立てずふすまににじり寄り、僅かに隙間を開いて様子を窺った。

川原が、開いた木戸を見ながら何かと話している。狼を起こさないよう声を潜めてはいるものの、卓越した忍びである狼にとって隣の部屋の話声を聞き取るなどたやすいことだ。

「悪いな、夜中に文を運ばせてしまって。ああ、返事はしないでくれ。隣の部屋で恩人がまだ寝ているんだ。あとで何か埋め合わせをするから、食べたいものでも考えていてくれ。

じゃあ、よろしく頼むぞ」

結果として、狼の警戒は杞憂に終わった。川原は部屋に侵入、いや、親しげに話しか

けているところを見ると、川原が招き入れたのだろう。烏に手紙を預けており、ひと撫でされた烏は満足げに翼を広げると開いた木戸から夜の空へと飛び出していった。

あまりにも聞き分けがいい烏の様子に、狼は内心舌を巻いていた。彼の義父である大忍びは、その名に相応しく梟を伝令役として使っていた。だが長年飼われていた梟ですら、今見た烏ほど人間のような動きはしなかったのだから。

狼がふすまを開くと、川原が狼へと目を向けた。

「おや、起こしてしまいましたか」

「今の、烏は」

申し訳なさそうな川原に対し、狼は率直に疑問をぶつける。

「我々鬼殺隊は、烏を使って連絡を取り合っているのです。私が報告書を書き終わる頃合いを見て、受け取りに来てくれたんですよ」

こともなげに伝える川原の声や表情に、嘘は無い。こうも気軽に明かす様子を見るに、鬼殺隊に僅かにでもかかわったものにとっては周知の事実なのだろう。いかに鬼が優れた身体能力を持とうとも、所詮は2本の足で地に立つ存在なのだ。月明かりの元、天高く飛ぶ烏に手を出す方法は限られてくるため、隠す必要はないのだろう。

「速くとも、返事が来るのは明日以降となるでしょう。それまでゆっくりと体を癒やしてください」

川原の一礼を合図として、この夜は互いに休むことになった。狼はすでにある程度疲労が取れたため、義手の手入れを行い始める。
結局狼が再び休憩に入るころには、夜明けまで1時間を切っていた。

目覚めた川原とその身じろぎの音で目覚めた狼が共に朝食をとっていると、1羽の烏が開け放った窓にとまった。独特な形状の飾り紐を首に巻いた、どこか気品のある大柄な烏だ。また伝令かと最低限の意識しか向けていない狼とは対照的に、川原は両目を溢さんばかりに見開いている。
「どうした」
「ま、まさか……」
狼の声に反応できないほど、川原は狼狽している。
「こんにちは、名も知らぬお人よ」
突然、知らない声が室内に響いた。咄嗟に狼は警戒態勢をとるが、周囲には敵どころか人の気配すらない。
「失礼、驚かせてしまいましたね。吾輩はそこのものが所属する鬼殺隊、そのまとめ役である産屋敷直属の使いの者です」
「烏が……」

話の内容よりも先に、狼は烏が人の言葉を話しているという事実に驚いていた。その様子を見た烏は、不思議そうに首をかしげる。

「おや、川原から聞いてはいなかったようですね。吾輩をはじめとした鬼殺隊の烏たち、鎹烏と呼ばれているものたちは、訓練により人間の言葉を話せるようにしているのです。迅速な連絡のためにもね」

こともなげに言っているが、それを成すためにどれほどの訓練が必要なのか、狼には想像もつかない。

とはいえ、今その苦労を想像しても仕方がない。居住まいを正し、狼は烏へと向き直った。

「産屋敷の使いと言っていたが、何の用だろうか」

「我が主は隊士を救ったあなたに直接礼が言いたいとのことです。それと、ひょっとするとあなたに渡すべきものを預かっているのかもしれないと」

「渡すべきもの、とは」

狼に心当たりはない。そもそも、会ったこともない相手が何故狼に渡すものを預かっているというのか。

そんなごく当然の疑問は、烏が放った次の言葉で吹き飛んでしまう。

「葦名の地について……その表情からして、あなたが我が主の待ち人で間違いなさそう

ですな」

その名を聞き、狼は忍びにあるまじき動揺を表に出してしまった。その様子を見た烏が満足そうに目を細めるが、狼にそれを気にする余裕はない。

「詳しい話は主が直接会って話されるとのことです。こちらに使いの隠……我々の組織の裏方を務めるものたちをよこしますので、屋敷に来てはもらえませんか？」

形式として選択肢の提示はされているが、今の狼にとってその選択肢はあってないようなものだ。

「……伺おう」

「それはなにより。吾輩も主に良き返答を持ち帰ることができますな」

重々しい狼の答えにも、烏は気にした様子がない。組織の長直属というだけあり、烏でありながらかなりの胆力を持っているようだ。

「さて、詳しい報告のため川原も共に来るようにとのことです。一刻もしないうちに迎えの隠が来るでしょう。お待ちしておりますよ」

突然名を呼ばれた川原の動揺を面白そうに眺め、烏は笑うように1鳴きして飛び去った。

どうにか挙動不審となっていた川原を落ち着かせ、朝食の残りを腹に収めたところで宿の主人がやってきた。

「お客様、藤の使いと名乗るお方が訪ねていらっしゃっておりますが、いかがいたしましょう?」
「ああ、私の知り合いで間違いない。少し早いが、これで失礼させてもらおう」
簡素なやり取りと共に宿を出た狼と川原は、入り口で待っていた男に町はずれの林まで案内される。茂みの中には昨晩部屋を訪れた男が黒頭巾を被って待機していた。
「さて。申し訳ないのですが、ここからは目と耳を隠していただきたい」
待機していた男と同じ黒頭巾を被りながら、藤の使いと名乗っていた男は目隠しと耳栓を狼へ差し出した。
「何故だ」
「これからお連れする産屋敷邸は、鬼殺隊の本部でもあります。万が一にも場所が判明しないよう、いかなる人物にも同じ処置をさせていただいているのです。ご理解ください。
装着を確認でき次第、私たちが背負ってお送りいたします」
常人であれば、突然五感のうち2つを塞げと言われれば拒否感を抱くだろう。五感を研ぎ澄ませる忍びである狼は、より強い嫌悪感を抱く。しかし、同行者の川原がおとなしく処置を受けており、現在葦名の地に関する唯一の手がかりを失うわけにはいかないという理由から、狼は渋々自らの手で目隠しと耳栓を装着する。

外界を感知する手段を失った狼と川原を、隠たちはあっさりと背負い中々の速度で走り出した。

どれほど移動しただろうか。途中数度背負う人間を変えながらも移動は続き、体感で数時間ほど背負われた後に狼は地面へと下ろされた。

「おつかれさまでした。産屋敷邸に到着いたしました」

狼の目隠しが外されると、目の前には立派な日本家屋が建っていた。その外見に、狼はどこか既視感を覚える。僅かな思考の後、狼は答えに辿り着いた。

似ているのだ。かつて狼の主が暮らしていた、平田屋敷の本邸に。

似ていると言っても正面の門構えだけではあるのだが、漂う雰囲気がどこか彼の屋敷を思わせるのだ。

「お館様がお待ちです。こちらへどうぞ」

戸惑う狼を、どこか急かすように男たちが先導する。共に連れてこられた川原は報告のためか、先に屋敷の中へと連れていかれてしまっているようだ。思考を中断し、狼は男たちの先導に従い館の庭へと足を向けた。

平田屋敷ほど防衛を意識していないのか、庭へは漆喰の塀1枚を挟んですぐ到着した。時期もあってか満開に咲き誇る藤の花を潜り抜けると、広い枯山水の庭が広がって

いる。その庭に面した縁側に、1人の男性が座っていた。背後には、2人の護衛らしき影が控えている。

「わざわざ出向いてもらって申し訳ないね。本来であればこちらから礼を言いに行かなければならないところなのだけれども、私の体が弱いばかりに失礼な形をとってしまった。許していただけるかな？」

深い慈しみを感じさせる、落ち着いた声の持ち主だった。短く切りそろえられた髪は黒々とした艶を放っており、これほどの手入れに気を使えるという男の立場を伺わせる。両目は深い思慮を湛え、優し気な笑みと共に眦は緩やかな線を描いていた。

狼にとって、それらの全てが些事だった。一歩、また一歩と縁側に座る男にまるで引き寄せられるように狼が近づく。案内役たちが止めようと手を伸ばすが、縁側の男が手を挙げてそれを制する。

「……御子様」

絞り出すような狼の声。そう、服装も年齢もまるで違うというのに、狼は絶対の忠義をささげた主と非常によく似た気配を目の前の男から感じ取ったのだ。

「やはり、君は狼だったんだね。竜胤の御子である九朗殿に忠義を捧げた、熟練の忍びであると聞いているよ。

私は産屋敷耀哉。君に渡すものがあるんだ」

柔らかな笑みを絶やさず、耀哉は隣に置いてあった桐の箱を開いた。収められていた本の表紙に書かれた文字を見た狼は、両目を見開く。

「その文字は、九朗様の」

狼の声を聴き、耀哉は背後の1人に箱ごと本を手渡した。

「この本は後でお渡ししよう。いろいろと話さなければならないことがあるんだ。まずはそうだね、ここがどこなのかというところから話そうか」

凍えるような警戒心をむき出しにする狼と、太陽のような笑みを浮かべる耀哉。静かな日本庭園の中、向かい合う2人は対極的な雰囲気を纏っていた。

当主との語らい

警戒心を隠そうともしない狼と、耀哉の護衛との間で緊張感が高まっていく。何か決定的なきっかけがあれば、この場で剣戟が結ばれてもおかしくはないだろう。

にもかかわらず、その空気に挟まれているはずの耀哉は穏やかな笑みを崩さない。

「お前たち、そう警戒するものではないよ。彼、狼にとって私は未知の相手だ。その相手が自分の大切なものに関係する物を持っているのだから、彼の警戒は当然のものだろう？」

主の言葉に、僅かとは言え殺気立ってすらいた2人の護衛が僅かに目を伏せ構えを解いた。

「さて、落ち着いたところでもう一つお願いがあるんだ。申し訳ないのだけれど、庭の入り口まで下がっていてくれないかな？」

「なっ!?」

護衛たちはあっけにとられ、次いで矢継ぎ早に反論をまくし立て始めた。

「お館様、護衛を命じられた身として、それは受け入れがたい命令です。万が一お館様の身に傷1つでもつけば、我らは他の柱たちはもとより、お館様のご家族に申し訳が立ち

ませぬ」
「さよう。そちらの者の得体も知れぬうちにお館様単身で話し合わせるわけにはいきませぬ。どうか、ご再考を」
深く頭を下げる護衛の様子を見て、狼は当然の反応だろうなと考えていた。もしも九郎が似たことを言い出した場合、狼も全力で止めるだろうということは容易に想像ができたからだ。
だが、必死の反論にも耀哉は笑みを崩さない。
「大丈夫だよ、ふたりとも。この人はむやみと人を傷つける性格ではないよ。
それに、別の部屋に移ってくれというわけではないよ。見える範囲なのだから、何かがあれば柱である君たちが間に合わないなどという事はないと私は信じている。違うかな？」
そう問われれば、実力を見込まれて選出された護衛として否とは言えない。不服そうな表情のまま、２人の護衛は腰を上げた。そのまま庭の入り口にまで下がると、なにがあれば即座に動けるよう警戒心を隠さずに狼を注視している。
「ふふっ、少し意地悪な物言いをしてしまったかな。
さて、あれほど離れれば声も途切れ途切れにしか聞こえないだろう。待たせてしまってすまなかったね、狼殿」

両目を輝かせながら、どこか嬉しそうに語る耀哉の態度に狼は違和感を抱いた。
「何故、そこまで好意を向ける。互いに初対面のはず」
「先ほど炎柱……ああ、あの赤い髪をした男だよ。彼に渡した本を読んでいたからね。幼いころ、君の活躍には胸を躍らせていたものだ。
その本人と会えるということで、少しはしゃいでしまっていたみたいだ」
にこにこと笑う耀哉に、狼は毒気を削がれる。しかし、この程度で絆されていては忍びなど務まらない。心を律し、改めて耀哉へと視線を投げかけた。
「先ほどの話の続きをしてもらおう。ここはどこなのか、と」
「無駄を嫌うところも、本の通りだね。
信じられないだろうけど、今は君が竜胤の御子を守り戦った時代から三百年以上経過した、君から見れば未来の世界ということになる」
狼は、眼前の男の正気を疑った。守り鈴により過去の世界を追体験したことはあったが、あれはせいぜいが数年単位の移動であることに加え実際に狼が体験した出来事を追ったに過ぎない。
「信じられないという顔をしているけれども、事実だよ。と言っても突然信じられるような話ではないだろう。でも、昨日私の剣士（こども）を助けてくれてから今まで、戦国の世ではありえないものを見てきただろう？」

たしかに、狼は街に入ってから数々の信じられないものを見た。間違いなく戦国では作ることができないものばかりであり、いくら葦名が山深い僻地だったからといっても、ここまで技術格差があるとは考えにくい。しかし、そうなると主のいない自分はいったいどうすればよいのか。

「表情からして、納得はしてもらえたようだね。そして、現状に戸惑っている。弱っているところを追いうちするようで心苦しくはあるんだけど、もうひとつ伝えたいことがあるんだ」

耀哉の声に、狼は思考を中断した。今後どのように動くか考えるにしても、情報は必ず必要だ。そして、耀哉の口から信じられない言葉が語られた。

「私は、君の主である九朗の子孫なんだよ。厳密には、彼の子孫が私の先祖と結婚してね。おそらく、先ほど君が私を主と勘違いしたのは、血のつながりもあってのことだと思う」

一切体を動かすことができなくなるほどの衝撃が、狼を襲った。咄嗟に何かを言おうと口を動かすが、言葉が出てこない。

「急に言われても困るだろうけれど、伝えないままの方が不義理だと思ってね。

２人とも、もうこちらに来ても大丈夫だよ。槇寿郎、例の本を彼に渡してくれないか」

主の声に、２人の護衛は元居た場所へと腰を落ち着けた。赤髪の青年……槇寿郎は、

定位置に戻る前に狼へと桐の箱を差し出している。
「さて、読んでみてくれないか？　恐らく最後の頁に書かれている言葉が、君の知りたいものはずだ」
耀哉の言葉に従い頁をめくった狼は、そこに書かれた文字にゆっくりと目を通した。なかなかの厚さを持つ本の最後にしては、非常に簡素といえる一文を。
――以上が、戦乱に呑まれようとした葦名の国で起きた事柄の一部始終である。この大和の小国での出来事を記録にしてどうするのかと問うものもいるだろう。だが、我が生涯の忍びが成した事柄を、誰に知られることもなく葬ることは私にはできなかった。
人として目覚めたとき、すでに我が忍びの姿は無く、彼から託されたという薬師が傍に寄り添ってくれているだけであった。今も手を尽くしてはいるが、恐らく見つかることは無いのだろう。我が血と共に生きると誓っておきながらという気持ちがないわけではないが、これも私を助けるためにあの忍びが選んだ道なのだ。無下にすれば、それこそ我が忍びを裏切ることになってしまう。
そろそろ筆を休めることとしよう。明日は我が写し身とも呼べる、変若の御子を薬師殿がお連れくださるとのことだ。この国から出るにしろ残るにしろ、わが身に宿った竜胤により定めを歪められた彼女を放ってはおけない。機会があれば、この後の話も書にしたためようと考えている。

最後に、わが生涯の忍びに謝辞を描いて終わるとしよう。

――狼よ。我が書と共に、生きてくれ。人々の記憶の中で。

「さて、この本を我が一族が継承していたというだけでも、君のかつての主と血が繋がっているということをある程度証明できるだろう。だが、それでもまだ信用は難しいと思う。

そこでだ、我が一族に口伝で伝わる言葉があるんだ。我々からすればなぜこのようなことを口伝でと思わないでもなかったけれど、少しは証明になるかもしれない。聞いてくれるかな？」

「……聞かせて、いただきます」

狼の目の動きから読み終わったと判断し、耀哉は最後の一言を伝えた。

「願わくば、もう一度だけでいいからお主の草笛の音が聞きたい……だ、そうだよ」

「御子……様……！」

恐らく九朗と狼にしかわからない言葉を聞き、ついに狼は確信を持った。眼前の人間は、狼が命を賭して仕えた九朗の子孫であると。そして自らの行動を書に記し、口伝を残すほど主に思われていたという事実を知り、狼はただ深く頭を下げた。あまりの雰囲気の変化に、護衛の２人からどよめきの声が上がったが、狼は気にしない。

「さて、どうやら私が君の主の血を引くものだと信じてもらえたようだね。その書は差

し上げるから、ゆっくりと読むといいよ。
狼、君の実力を見込んでお願いがあるんだ」
「伺いましょう」
先ほどまでの警戒心はどこへやら、狼は非常に素直に返事を返した。
「我々は日々鬼を狩っているけれど、相手が相手だからね。少しでも強く有能な人材を常に欲している。
狼よ、君の主の威光を借りるようで心苦しいのだけれども、鬼殺隊の下その力を振るってはくれないか？」
「お館様⁉」
思わずといった様子で槇寿郎がこれを荒げるが、耀哉に静かにするよう指示を出され渋々と口を噤む。
本来であれば、例え静かにするよう言われたとしても全力で反対の声を上げただろう。そうしなかったのは、狼の態度があまりにも変わっていたからだ。彼から見れば、警戒心を隠そうともしていなかった男とはまるで別人のように感じている。
「謹んでお受けしたいところではありますが、この身はただ1人の主に仕えるよう鍛えられました。組織に入り、和を乱さぬよう動く自信はありませぬ」
狼の口上に、水柱はほうと感心の声を漏らした。自らの欠点を、主になるかもしれな

い者の前で宣言できる者は少ない。水の荒々しい一面を性格へと落とし込んだような彼は、その素直な部分が気に入ったようだ。
「ならば、どの程度鬼狩りとして動けるか見てからでも遅くはないのではありませんかな？
ひとまず育手の元である程度鍛え、その間に組織内での動き方を教えてゆけばよいでしょう。
幸い、水の育手ならば幾人か伝手がございます」
「おい水の、何を言い出す！」
「炎の、こうなってはお館様が頑固であるのは知っているであろう？　どうやら彼の元主はお館様の遠縁であるようだし、無体はすまいよ」
「しかし……」
現状2対1となってしまい、槇寿郎は言葉に詰まる。
「無理に納得してくれなくてもいいんだよ、槇寿郎。全員が無条件で私に従う組織など、不自然極まりないものになってしまう。君のように自分の視点から注意や意見を言ってくれる人間が柱であること、私はうれしく思う」
「では……」
「でも、私は狼の力がどうしても欲しいんだよ。ここは見逃してはくれないかい？」

「……お館様がここまでおっしゃられるのならば、是非もありませぬ」
「ありがとう、槇寿郎」
　ひとまずといった形ではあるが、槇寿郎が意見を曲げることでこの場は収まった。当然ながら未だ納得はしていないようだが、この件を蒸し返すようなことをする男ではないと鬼殺隊の2人は知っている。
「狼、今日はこの屋敷で川原と共に体を休めてくれ。明日になったらこの越津が育手のところにまで案内するよ。我々鬼殺隊については、道中に説明してもらうといいだろう。
　ふたりとも、それでいいかな?」
「御意」
「謹んでお受けいたします、お館様」
「それではこの話はこれでおしまいだ。狼、庭の入り口に君を案内した隠が待っているから、彼に部屋まで案内してもらって休むといい」
「お心遣い、感謝いたします」
「槇寿郎と越津は少し残ってくれ。話したいことがあるんだ」
「御意」
「御意」

狼は改めて新たな主に一礼し、庭の入り口に戻る。耀哉の言った通り、案内役の男が1人狼へ一礼した。

「こちらへ。すでにお部屋の用意は整っております」

正面玄関から屋敷へ入ると、廊下には主張こそ強くないもののしっかりと調度品が飾られている。歩きなれた様子の男は数度廊下を曲がり、襖の前で足を止めた。

「こちらとなります。どうぞごゆるりと。お食事の時間になりましたら、お声がけさせていただきます」

一礼して去る男を見送り、狼は案内された部屋へと入った。1人がくつろぐには十分な広さの小部屋には、軽食と布団が用意されている。

ひとまず腰を落ち着けた狼は、桐の箱から九朗の手記を取り出す。表紙を愛おしげに撫で、忍びは主が残した手記を丁寧に読み始めた。

狼が去った庭に、1人の隊士が呼び出されていた。耀哉だけでなく2人の柱も加えた三人から視線を向けられ、川原は顔から血の気が引いている。しかも柱のうち片方は、自らが修める水の呼吸の頂点なのだ。これで緊張しない方がおかしいと言える。

「そう怯えることはないよ、川原。私たちはただ君に話を聞きたいだけなんだ」

「は、はいっ！」

何を聞かれるのかと戦々恐々とする川原に、耀哉の穏やかな声が僅かな安らぎを与える。現状から見れば、焼け石に水だが。
「聞きたいことはほかでもない、君が助けられた男についてなんだ。君から見て、彼はどのような人だと感じたかな？」
「彼、ですか」
予想外の質問だったのか川原はあっけにとられ、真剣に悩みだす。
「とても……そう、とても強い人でした。鬼の攻撃を簡単に弾き返し、体勢を崩した鬼を異様な刀で突き殺しました。私では太刀打ちできないでしょう」
「そうか。性格はどうだったかな？　人に害をなすように感じただろうか」
「いえ、共に行動した間は僅かでしたが、悪意を持つようには見えませんでした」
報告を聞いた耀哉は考え込むように目をつぶり、僅かな間沈黙すると目を開き笑みを浮かべた。
「ありがとう川原。聞きたかったことは以上だ。下がっていいよ」
「はい、失礼いたします」
ぎこちない礼をし、逃げるように庭を去る川原の姿が見えなくなると越津が口を開いた。
「報告にもあったが、どうやら相手の隙を突いて一撃で仕留める戦法を使用するようで

あるな。偶然ではあるが、水の呼吸との相性は悪くないようですな」
「それもだが、俺としては異様な刀とやらが気になるな。鬼の首を切らずに殺すなど、聞いたことがない」
「そうだね。鬼の骸をここへ」
　耀哉の声に従い、控えていた隠がおっかなびっくりといった様子で2体の鬼の死体を運んできた。万が一を考え、死骸と耀哉の間には柱がいつでも守れるよう控えている。
「むう……体が崩れていないにもかかわらず、活動する様子がない。まるで人間の死体ではないか」
「だが、鬼の死体で間違いはないようだな。見ろ」
　刀身も見せずに鬼の小指が切り落とされ、槇寿郎は指を日に当てる。陽光に晒されたとたん、指は塵も残さず崩れ去った。
「間違いないか。しかし、そうなるといかなる手段で鬼の息の根を止めたというのか」
　越津と槇寿郎は顔を突き合わせて考え込むが、耀哉が手を鳴らしたことで思考が中断される。
「それは彼が鬼殺隊に入隊してからでも聞く機会があるだろう。鬼の死骸は研究に回せるし、解析待ちとなりそうだね」
「まあ、ここで悩んでも結論が出ない話ではありますな」

「たしかに、ここで悩んでも仕方のないことではありますな。それでは、私はこれで失礼つかまつる」
「失礼いたします、お館様」
　これ以上は後日の研究待ちとの結論を出し、２人の柱は耀哉に一礼し共に狼の見張りもかねて与えられた部屋へと足を向ける。
　ふと、耀哉が疑問を口にした。
「そういえば、越津は狼を誰に任せるつもりなんだい？　水の呼吸は使い手が多いから、その分育手は多いだろう？」
「はい。話に聞く限りと彼の纏う剣気から、生半可な育手ではいけませんからな。弟子が最終選別を突破していない点が気にはなりますが、元水柱の鱗滝の元へ送ろうと考えております」
　別段隠すことでもない。越津は足を止め、あっさりと考えを伝えた。
「そうかい。たしかに彼が現役のころは、技の冴えは比類なきものだったと父上から聞いている。確かな人選だと思うよ」
「ありがとうございます。さっそく文をしたためようと思いますので、これにて」
「ああ、呼び止めて悪かったね。ふたりとも護衛ご苦労だった。ゆっくりと休んでおくれ」

耀哉の声に、２人の柱は今度こそ庭を後にする。耀哉も隠を呼び鬼の死骸を保管所へと運ばせ、自身も仕事に戻るため屋敷内へと消えた。

水柱、越津今座衛門の見解

鬼殺隊本部、産屋敷邸での話し合いがあった翌日。とある林の中で、狼と柱の2人は隠の背中から降ろされた。

「到着いたしました。このままっすぐ歩けばすぐに街が見えます。

我々はここで失礼いたします」

「うむ、ご苦労だった」

頭を下げる隠たちに、3人を代表して槇寿郎が礼を言う。どこか嬉しそうに去って行く黒づくめの後ろ姿を見ながら、越津が口を開いた。

「さて炎の、この後どうするかね？　当方はお館様の提案と鱗滝の用事までの時間合わせに、街を案内しながら狭霧山まで向かうつもりであるが」

「残念だが、今晩から任務が入っていてな。屋敷で体調を整える予定だ。

すまないが、ここで失礼させてもらおう」

「そうか、それなら無理も言えんか。炎柱に言うことではないかもしれんが、気をつけるようにの」

「そちらもな。

……はっきり言うが、俺は未だその男を信用しておらん。狭霧山までの道中ならば数日かかるだろう。その間に、しっかりと見極めておけ。任務が無ければ俺もついていったがな」

最後は小声で越津に警告を残し、槇寿郎は一足先に街へと向かっていった。その会話内容が、狼の忍びとして発達した聴覚によって余さず聞きとられているとは気づかずに。

去っていく槇寿郎の背を見ながら、狼は彼が持つ剣士としての力量について考えていた。外套に隠され腰に佩かれた刀は、通常の打ち刀よりも厚く長い。にもかかわらず、槇寿郎の歩みは確かな安定感があり、刀の重みで体が傾くということもない。

護衛として耀哉の背後に控えていた際の身のこなしからも推測するに、あの葦名弦一郎にも匹敵する実力者とみて間違いないだろう、と狼はあたりをつけた。

「ああ、そう責めるような眼をせんでやってくれ。あやつはちと生真面目に過ぎるのでな。お館様に万が一でもないよう、得体のしれぬお主をいまだ警戒しておるのよ」

狼の鋭い視線に気がついた越津が、苦笑いを浮かべた。彼からすれば、不快な思いをされた腹いせにいかにして彼の剣士を打倒するのかと悩んでいるように見えたのだろう。

「いえ、気にしておりませぬ。主人に仕える者として、警戒するのは当然のことかと」

狼からすれば、当然の警戒心を向けられただけなのだ。警戒を根に持っているわけではなく、戦いに身を置いていた癖で相手の力量を測っていただけのことなのだから。

「ならばよいのであるがな。それでは出発……の前にだ。思えば互いにきちんと名乗り合っていなかったな。

先に名乗らせてもらうが、当方は越津今座衛門と申す。鬼殺隊水柱を務める身ではあるが、口惜しいことに柱の中では胸を張れるほどの強さではない。

他の隊士の前では士気にかかわる手前相応の態度を心掛けてはいるが、共に同じ主を仰ぎ大義を奉ずる同士だ。気軽に話しかけてくれてよいぞ」

豪快に笑う越津は視線で次はそちらの番だと促すが、狼は眉を顰め黙り込んでしまった。

今まで彼は主を陰ながら守るという立場にいた。自然親睦を深めるために名乗り合うどころか、主以外とはまともな会話すら珍しいという職場環境だ。

だが最後に駆け抜けた亡国寸前の葦名での交流は、狼の中に残されていた人間性を僅かに取り戻す手助けとなっていた。脳内で語るべき内容をゆっくりと吟味し、慎重に口を開いた。

「名は、狼だ。姓は無いが、養父の姓は薄井であった。かつては産屋敷家の遠縁にあたる人物に仕えていたが、故あって主と離れ、主の元へ戻ろうとする途中で鬼を殺し今に至

る」

昨晩の間に耀哉と秘密裏に話し合って決めた設定を、狼はそのまま越津へと伝えた。設定とはいえ嘘は言っていないし、必要最低限の情報は含まれている。今の狼はあまりにも不審な点が多すぎるため、たとえ柱であっても身の上をすべて明かすことは避けるよう結論が出たのだ。

狼としても賛成であり、たとえ信用を勝ち取ったとしても本当の事情を話すべきではないとも考えていた。忍びとしての気質に加え、話したところでどうにもならないからだ。

「養父とはな……いや、口に出したくないであろうことをよくぞ話してくれた。そして、そのようなことを問いただす形となってしまい大変申し訳ないことをした。詫びてすむものではないが、詫びさせていただけるとありがたい」

狼の話を聞いた越津は、深く頭を下げた。鬼殺隊における柱の立場から考えれば、出自不明の男の過去を聞くことは義務といっても良いだろう。いくら鬼殺隊の長である産屋敷家当主が直々に引き入れたとしても、あくまでも個人の信用しかない現状ではもっと厳しく問いただされてもおかしくはない。

にもかかわらず、越津はそのような尋問をしなかった。あくまでも自主性に基づいた話し合いを行い、嘘かもしれない話に頭を下げたのだ。

「すでに昔の話。謝罪は受け取りますが、気にする必要はありませぬ」
耀哉に加え、眼前の男を信用に足る人物であると狼は判断した。同時に越津の性格は致命的な隙を生みかねないとも。
そんな狼の内心を知るはずもなく、越津は嬉しそうに笑みを浮かべた。
「そう言って貰えるのならばありがたい。ひとまずは街の案内を。山中の出というので、こちらの歩き方には明るくないと聞いておる。この身とてそこまで街慣れをしているというわけではないが、ある程度不自由しない程度の慣れはある。
その大太刀は……この竹刀袋に入れなされ。すぐに抜けなくなりはするが、廃刀令が布告されたこのご時世。ある程度人目をごまかさねばならんのでな」
越津の差し出した竹刀袋に、狼は不死切りを渋々しまう。楔丸と忍義手を外套下に隠し、ひとまず街に入っても問題ない外見となった。
「さて、遅くはなったが向かうとしようか。昼飯前に、甘味処から案内するとしますかな。行きつけの店がこの辺りにあるのでな。おはぎがなかなかどうして絶品なのだ」
先導する越津の後を、狼は静かについて行く。内心好物であるおはぎを楽しみにしていたが、僅かに緩んだ表情の差は出会ったばかりの越津にはわからないものだった。
狼を先導しながら、越津は内心舌を巻いていた。ある程度ごまかしたとはいえ、本来

狼の格好は彼自身の風貌も相まってかなり目立つはずなのだ。最悪の場合、狼を担いで逃走することも視野に入れていた越津の予想は、良い意味で裏切られた。

街ゆく人は、そのほとんどが狼に目を向けることすらしていないのだ。希に勘の良い者が不思議そうに視線を向けるものの、人影などで遮られれば再び注視することはない。彼の纏う気配が、あまりにも希薄なのだ。柱である越津であっても、彼が本気で潜めば発見は難しいだろうと考えるほどに。

「どうだ狼殿、なかなかの味だろう?」

隣に座り、おはぎの感想に頷いて同意する姿からは考えられない異常性。越津は、なぜあそこまでしてお館様が彼を引き入れようとしたのかをわずかながら感じ取った。

産屋敷邸の庭で行った観察と町中での体幹を見るに、ここのところ問題視され始めている質の低い隊士では、彼とまともに打ち合うこともできないだろう。呼吸音から全集中の呼吸を修めていないことはわかるものの、独特の音からして普通の呼吸でもない。

いきなり深い事情を聞いて機嫌を損ねられても困るため、越津はひとまずその疑問を心にしまった。

「さて、そろそろ出立とするか。文を出している以上、不必要に遅れては先方に失礼に当たる故な。到着は明日であるとはいえ、余裕を持つに越したことはない」

互いに茶を飲んで一服した後、越津と狼はいよいよ街を後にした。向かうは育手の鱗

滝の自宅兼修行場、狭霧山だ。

今回わざわざ現役の水柱である越津が狼の案内を買って出た理由は2つある。1つは、道中における狼の観察だ。今のところ大きな問題を起こすことなく、また礼儀正しい姿勢を崩さないため人格面についての懸念は払拭されている。もう1つは、狼の実力の確認である。

隊士の報告を信じるのならば、狼は2対1とはいえ中堅の隊士を捕食する鬼を、全集中の呼吸を使わずして正面から打倒したというのだ。鬼の異様な骸をどのようにして残したのかという疑問もあるが、まずは実力を測ることが先決といえるだろう。

本来であれば狭霧山で手合わせを申し込む予定だったのだが、運がいいのか悪いのか、街を外れたあぜ道で鬼と遭遇した。気配からして、そう多くの人間を喰っていないどこにでもいるような鬼だが、今はその丁度良さがありがたい。

「狼殿。話には聞いているのだが、この目で貴殿の実力を見ておきたいのだ。いざとなれば助太刀する故、そこの鬼を切ってはもらえぬか？」

不快な思いをさせるかもしれないという越津の不安は、狼が無言で刀を構えたことで払拭された。狼の動きを見逃さないよう、越津が全集中の呼吸を使い集中力を上げる。水柱の眼前で、狼と鬼が激突した。

戦闘を依頼された狼は、越津の狙いを正確に読んでいた。得体のしれない相手の実力を知っておけば、いざという時の対策も練りやすくなる。ならば、この機をもって相手の手の内を探ろうとすることは至極当然だ。

狼からすれば実力を隠す必要もないため、いつものように全力で挑もうと楔丸を抜いた。

「なんだぁ？　見たところただの刀で俺を殺そうってのかぁ？」

鬼がせせら笑うが、狼は一切の反応を返さない。ただ鬼の動きを観察し、行動の出を読む。

「だんまりかよつまらねーなぁ。ちっとは喋れよ最後なんだからよぉ。おまえも後ろの男も、俺の晩飯になるんだからよ！」

鬼の力がもたらす万能性に酔いしれているのか、何の工夫もなく鬼は狼へ襲い掛かった。剛腕を振るい目の前の男を叩き潰そうとするが、その一撃は当然のように楔丸に弾かれる。

「なっ、ふざけんなこの男が！」

頭に血が上った鬼は、以前狼が切った鬼と同じように手を振り回し乱撃を繰り返す。だが、両者の間には大きな差があった。

どうしようもなく、弱いのだ。以前狼が切った鬼よりも、腕力も速度も、体の硬度す

ら劣る。現状ですでに相手の底が見えたと判断した狼は、手早くかたをつけるために忍義手を起動した。

左腕の二の腕に当たる部分が駆動し、斧の刃が姿を見せる。手筈が整ったことを確認した狼は、大ぶりの一撃を弾くと反撃に転じた。

楔丸を巧みに操る狼の剣閃は、戦いなれていない鬼にとって見えているにもかかわらず防ぐことができない魔光だ。いくら死なないといっても痛みが消えるわけではなく、痛みに身を強張らせればより行動が鈍り避けられなくなる。

「て、てめえ！　いい加ぎゃっ⁉」

怒りのままに動かした口が、楔丸の一閃で横に裂かれた。返す刃で喉を潰され、蹲った鬼を見た狼が左腕の忍義手を大きく振り上げた。動きに連動し、義手内部に収まっていた斧が外部へと展開する。

義手忍具、仕込み斧。かつて落ち谷の飛び猿と呼ばれた忍びが愛用した忍具であり、その重さによって相手を叩き壊すことを神髄とする。蹲り視界を塞いだ鬼にこの一撃をどうにかする手段などあるはずもなく、叩き込まれた斧は肩甲骨を叩き割り肺すらもひき潰した。

「ごっば……」

苦しみから逃れるため暴れる鬼は、背に刺さった斧が引き抜かれたために腕を振り回

しなんとか狼との距離を取った。あまりの痛みに涙を流しながら、鬼は下手人を捕らえようと周囲を見渡す。涙で滲んだ視界に映った狼は、背負った大太刀を構え今にも引き抜こうとしていた。

本能的に生命の危機を感じ取り、鬼は背を向けて逃げ出そうとした。狼からつけられた傷は未だ癒えきっていないものの、足は無傷なのだ。今無理をしてでも離れなければ死ぬと、鬼の生存本能が全力で警鐘を鳴らしていた。

しかし、鬼が振り返るよりも早く、狼はその刃を抜き放った。悍ましい瘴気が刀身を覆いつくし、まるで刃そのものが伸びたかのような軌跡を空中に描き出す。

奥義・不死斬り。抵抗する間もなくその刃をまともに受けた鬼は、その一撃で胴が両断された。鬼故に死にはしないのだが、再生が遅く下半身が思うように動かない。初めての感覚に混乱する鬼は、自らの頭部目掛けて突き出された刃に気がつくことなくその意識を手放した。

越津は、狼へと斬りかかりそうな自分を必死に押さえつけていた。鬼相手に攻めも守りも狼は優勢だった。あれほどまで自然に動く左腕が義手であり、そこから斧が飛びだしたときには驚きこそしたものの、その奇襲性と威力に隻腕ならではの仕込みであると感心すらしていた。

だが、その感情も狼が背の大太刀を抜いた瞬間に消え失せることとなる。刀身を覆う赤黒い瘴気を見た越津は、その色合いから鬼よりもよほど世の理に背く何かを感じ取った。水柱として活動してきた彼だが、これほどまでに嫌悪感を抱くことは初めての経験だ。

一太刀で鬼の胴を両断し頭部をその呪わしい刃で貫いた狼は、血払いを済ませると鬼に背を向けた。倒れ伏した鬼は、動き出す気配すらない。本来鬼の死で引き起こされるはずの肉体の崩壊が発生していないが、柱として鍛えてきた感覚が越津に1つの事実を伝えていた。あの鬼は、すでに死んでいる。

「……越津殿」

狼の呼びかけで、越津は我に返った。同時に、無意識のうちに抜刀の構えに入っていた体をほぐす。

「実力、確かに見せていただいた。鬼を相手にあれほどまで優位に立ち向かうもの、そう見るものではない。

時に狼殿、つかぬ事を窺うが、その大太刀はいったい？」

越津の問いに、狼は僅かに視線を下げた。僅かな沈黙の後、吟味するようにゆっくりと言葉が紡がれる。

「主の命で探し求め、寺の秘奥として納められていたものを管理者から譲り受けた。限

られた人間のみ扱いが許され、不死を殺す力があるという」
その力は確かなのだろう。現に鬼は死に、不可思議なことに肉体は残ったままだ。
「そう、か。
当方が感じるにその力、人が使うには過ぎたものであるように思える。扱うことに問題はないのか？」
「初めて手に取った際選別が行われ、再び抜けるものに害をなすものではないと伝え聞いている」
狼の言葉に嘘はなく、越津としてもこれ以上の追及ははばかられた。それほどまでに、産屋敷直々の勧誘は重い意味を持つ。
「ならば、よいのだがな。
ひとまず休むといたそう。明日の昼には狭霧山だ」
眼前の悩みをひとまず棚に上げ、越津は野営の準備に取り掛かった。扱う力こそ異端かもしれないが、少なくとも心根が悪い人間ではない。共に行動した時間こそ僅かだが、水柱は自らの感覚を信じることにしたのだ。
徐々に深くなる夜の闇の中で、どこかぎこちなく、しかし温かみのある男たちの声が遅くまで交わされていた。

狭霧山の育手

鬼殺隊の元水柱であり、今は育手をしている鱗滝左近次は、まさかの産屋敷家直々の手紙に困惑していた。はじめは隊士候補を1人たりとも合格させられない不出来さから、育手の地位を剥奪するものであると覚悟したのだが、手紙の内容は真逆のものだった。

すでに成人している人間へ、呼吸の技術と共に隊士の心構えの教育依頼。実力主義であり人員不足でもある鬼殺隊は、度々こういった引き抜き紛いの方法で隊士を増やすことがある。ゆえにこの知らせ自体は珍しいものではないのだが、それならば勧誘をした者が付近の育手に送り鍛えればすむ話だ。わざわざ鱗滝の元に送る必要性が見えない。さらに言えば、年齢も問題だった。引き入れてきた人員は、ほとんどの場合１５歳前後だったのだ。２０歳を超えて隊士になった人間は前例がない。はたしてその年から訓練をしたところで、全集中の呼吸が身につくかどうか。

とはいえ、かつての主からの手紙を無下にはできない。言われたからには自らの責務を全うするだけだと、鱗滝はいつものように隊士訓練の準備を始めた。手紙には、雑魚鬼ならば問題なく処理できるとあったため山の罠を気持ち厳しく設定し、木刀も鉄芯入

りのものを用意する。食材も買い込んだところで、予定の日がやってきた。
すっかり準備を終えた鱗滝だったが、内心では不安が渦巻いている。自分が鍛えた子供たちは、誰一人として隊士になることができずに命を落としているのだ。そんな自分が、はたしてお館様肝入りの男を隊士に相応しい人間に鍛えることができるのか。
その悩みは、漂ってきた匂いによって強制的に中断された。
「これ、は……」
鱗滝は、人一倍鼻が利く。人間の感情を表面上ながら読み取り、隠れ潜む鬼をかぎ分けることすらできるほどの鋭い嗅覚。それが、明らかな異臭を捉えたのだ。
かつて水柱として、数多の鬼を切った剣士としての感覚が警鐘を鳴らしている。これは、血の匂い。異常なまでに濃密な血の香りが、風に乗って流れてきている。しかも、徐々に香りは強くなっていく。
鱗滝は、無言で愛刀を手に取った。鬼は、人間を喰っただけ強くなる。その数に比例して、肉体から染み出す血の匂いも濃くなるのだ。かつて鱗滝が戦った鬼の中でも、これほどまでに濃密な血の匂いを振りまく鬼はいなかった。
「だが、どういうことだ?」
鱗滝は、窓から差し込む日光を見つめながら呟いた。鬼は、日の光の下では活動できないという絶対的な制約がある。日中に鬼の匂いがするなど、ありえてはならない異常

事態なのだ。とはいえ、鱗滝が居を構える狭霧山は名前の通り霧がよくかかる。霧によって直射日光が遮られれば、日中でもかろうじて活動できる鬼がいる可能性は否定できない。

引退したとはいえ、元鬼殺隊として鬼を見逃すなどあってはならない。いつものように天狗の面をつけてから日輪刀を腰に差し、できる限り静かに戸を開き外へと出た。鱗滝の予想に反し、日光が何かに遮られているということはなく、血の匂いに疑問が増すばかりだ。だが太陽の位置から、現水柱の越津が来るまでそう時間がない。一刻も早く鬼を切ると心に決め、匂いの強いほうへと走る。

走るうちに、さらなる違和感に気がつく。たしかに血の匂いではあるのだが、鬼の放つ腐ったような匂いではない。まるで鮮血を振りまいたような鮮やかな匂いなのだ。すでに犠牲者が出ているのかと焦る鱗滝の目に、2人の人影が写った。

「おお、鱗滝殿。わざわざ出迎えていただけたのか」

1人は、面識があり本日の来客予定であった越津だ。出迎えと勘違いし笑顔を浮かべている彼へ、鱗滝は視線を向ける余裕がなかった。血の匂いの元が、目の前にいるのだ。

「越津殿……そちらの、方は……？」

「ああ、手紙でも知らせが行っているとは思うがな。今回貴殿に指導を頼む運びとなった狼殿だ」

無言で一礼する狼を、鱗滝は隅々まで観察した。まず、日光の下平然としているという点から鬼ではないとわかる。服装は少々古めかしいが、使い込まれた良い品だ。背中の竹刀袋には刀があるのだろうが、それにもかかわらず体幹が安定していることから並みの腕前ではないのだろうとも予想がついた。鬼殺隊士の候補生として、なにもおかしなところはない。

ならば、この男から漂う血の香りと剣気はどう説明するというのか。鱗滝の記憶にある江戸から明治へと移る激動の時代。あの混沌とした時代ですら、この男ほどに血の香りを纏った剣客はいなかった。剣気にしても、かつての同僚に近いものを感じることができる。

修羅。鱗滝の脳内に、自然と1つの単語が浮かび上がった。

「鱗滝殿、いかがなされた？」

「……なんでもありません。狭苦しいですが、我が家にご案内します」

訝し気な越津の声で思考をいったん打ち切り、鱗滝は自宅へと先導を始めた。意識だけは、狼から一切逸らすことなく。

鱗滝の家で、新旧2人の水柱は向かい合って座っていた。鱗滝が淹れた茶を互いに一口飲み、一息ついた後に会話が始まった。

「狼殿には、どのような課題を?」
「儂が仕掛けた罠を避けつつ、山を下りるよう伝えました。この家に戻る時間によって、課題など決めようかと」
「なるほど。
　後で山の様子を見させていただくことは可能ですかな?」
「隠すものがあるわけでもないので、ご自由に。
　よろしければ、儂が案内しますが?」
「では、お頼み申す。知るものの案内があればよりわかりやすいでしょうからな」
　一見してただの世間話に見えるやりとりを済ませ、いよいよ2人は本題に入った。口火を切ったのは鱗滝だ。
「越津殿、あの男は何者ですかな?」
「何者、とは?」
「儂は鼻が利くことはご存じでしょう。あの男……狼からは、尋常ではない血の臭いがしました。かつて切った、十二鬼月にも匹敵するほどの」
　鱗滝の訴えに、越津は腕を組み目を閉じた。ゆっくりと息を吐き目を開く。
「実を言えば、当方も何者か詳しいわけではござらん。鬼に襲われた隊士を助けたこと、尋常ではない腕前の剣士であること、そして、お館様の遠縁に当たる家に仕えていたこ

としか聞いておらぬのでな」
「お館様の？」
「左様、お館様自身の口から話された。偽る理由も無し、鬼を切っている以上鬼舞辻に与するものとも考えにくい。今のところは、お館様預かりとして少しずつ探っているのが現状よ」
「お館様が鬼殺隊を害する選択をするはずも無し、か」
僅かな沈黙が、室内を支配する。越津は共に行動した経験から、少なくとも鬼殺隊に害なすものではないと判断している。しかし、それは彼の素性がおとなしいものであるという根拠にはならない。少なくとも敵ではないものの、得体のしれない人間を懐に入れるのは難しいものなのだ。
「当方は明日の昼にはこちらを発たねばならない。それまでに、彼の男を受け入れるか決めてくだされ。当方としては、冴える技をもって鬼殺隊に名を知られた鱗滝殿に受けていただきたい所存」
「……ひとまずは、あの男がいつ戻ってくるかですな。四半刻程度で戻ってくれば、多少の疑問には目を瞑って鬼殺隊に迎えることを考えましょう」
「ならば、狼殿の面倒は鱗滝殿に見てもらえますな」
安心したといわんばかりに越津は大きく息を吐き、残っていた茶をゆっくりと味わ

う。あまりにも迷いのない言葉に、鱗滝は天狗の面の下で眉を顰めた。
「それはどういうことでしょうかな？」
「言葉通りの意味よ。彼の男ならば、もう四半刻もかからずこの家に戻って来よう」
「それは流石に買いかぶりすぎなのでは？　ある程度の心得があると聞き、山の罠は相応のものに仕込んであります。四半刻と言ったのも、並の隊士ならばなんとか、という前提からですぞ？」
「ならば当方の予想にずれはないな。当方がもう一杯茶を飲み終わるまでには、彼の男は必ずやこの戸口をくぐるでしょうぞ。なにせ特殊な戦法とはいえ雑魚鬼を一蹴する男ですからな」
　鬼との戦闘は初耳であった鱗滝が越津に問いを投げようとしたところで、家の戸が静かに開かれた。驚きの感情を隠せない鱗滝とは対照的に、越津は静かに笑みを深くする。
「戻りました」
　鱗滝の予想よりもはるかに短い時間で山を走破した狼は、息を切らせることすらしていなかった。

　時は僅かに遡る。狼は鱗滝に連れられ、狭霧山の頂上付近で課題の説明を受けてい

た。晴天にもかかわらず、山の中腹からは深い霧に覆われている。
「ここから儂の家まで、できる限り早く降りてくること。手段は問わん。もちろん、その左腕の絡繰りを使うも自由だ。降りてくるまでの時間で、お前の素質を図る。この線香が消えたら始まりの合図だ。」
端的な説明の後に、鱗滝は慣れた手つきで線香に着火してから姿を消した。普通であれば、異常なまでの身のこなしに驚くだろう。だが、狼は別の部分に気を取られていた。
「天狗の面……偶然だろうか」
脳裏に浮かぶのは、天狗の面をかぶり手練れの忍びを一太刀の元斬り倒していた男の姿だ。葦名で最強と呼べる者として、一切の反論が出ないであろう古武者――葦名一心。狼はかの男を打倒してはいるものの、再び戦って勝てるかと問われれば否定を返すだろう。
「あの男、まさか一心殿と同程度の……？」
まさか天狗の面1つで、単身侵略の抑止力となった男と同一視されかけているとは鱗滝は思いもしないだろう。はたから見れば笑い話だろうが、狼は真剣に考えている。
ふと意識を戻すと、残り僅かとなった線香が目に入った。そして狼が見守る中、線香が燃え尽きる。
その瞬間、狼は弾かれたように走り出した。すでにある程度の木々には目をつけてお

り、忍義手から鍵縄が飛び手頃な枝に狼を引き寄せる。宙を舞う狼だったが、咄嗟に楔丸を抜いて飛来した石つぶてを弾き落した。

「なるほど、罠か」

踏ん張りの利かない空中で勢いのある石つぶてを弾き落したため、僅かに体勢を崩した狼はおとなしく地面に着地する。鱗滝は、現在までに少なくない数の子供たちを鍛え上げている。中には木々を利用して罠を回避する野生児もいたために、狭霧山の罠は地面だけでなく枝に関するものも多い。ふと違和感を覚え、目先の地面に石を投げつけると地面は大きく陥没した。巧妙に落とし穴が隠されていたのだ。

狼の脳裏に、かつての修行の日々が思い出された。丁度このような霧深い森の中で、かつての師に大いに鍛えられたものだ。当時の記憶と現在の自分を比較し、成長具合を確かめようと狼は地を蹴った。

山を疾走する狼を目撃した人間がいれば、まるで宙を舞っているように見えたことだろう。地面に触れる時間は最低限であり、鍵縄もあくまで姿勢補助として割り切っている。稀に反応する罠は、回避を重視し楔丸は最終手段だ。ほとんど足を止めずに罠も回避し続けているため、狼の移動速度は人間とは思えないほどにまで加速している。僅かな失敗で地面や木々に衝突するという状況下でも、狼の動きに一切の無駄はない。

このまま山を下りるのかと思えた狼だったが、突然その動きを変えた。枝や茂みを利

用して勢いを殺し、静かに山の斜面へと着地する。そして、周囲を警戒心のこもった目でゆっくりと見渡し始めた。彼の知覚に、人間らしき影が捉えられたのだ。

狼からすれば、ここで影を無視しても何の問題もない。だが、罠が大量に仕掛けられたこの山にただの人間が迷い込めばどうなるか。容易に想像できる結末を無視するほど、狼は冷酷ではない。人影が子供ほどの大きさともなれば、言わずもがなだ。狼が竜胤の御子に似た存在を見捨てるなど、絶対にありえない。

「誰か、いるのか」

霧深い山に、狼の低い誰何の声が響く。だが、それに応える声はない。狼は一切の行動をせずに周囲の音を探るが、野生動物の気配すらしない。しかし、狼の感覚は何かがいることを察知している。

「……幻影、か？」

狼は、葦名の底に広がる隠し森で数多く遭遇した幻の兵たちを思い出した。霧に紛れた姿は捉えにくく、動かなければ音を立てることすらしない。正面から戦えば御しやすい類のものではあるのだが、地理がわからない森の中で相手にしたいものではない。

ふと狼は懐を探り、小さな種を取り出した。種慣らし。その名の通り、指で押しつぶすと大きな音が鳴る緑色の種子だ。種を押しつぶした者が最も大きな音に晒されるため、気付けに使われることが多い。また、幻影を打ち消し霊を払うともいわれている。

実際に狼は幻や霊の前でこの種子を使い、効果を確認している。
ためらいなく、狼は右手で種を押しつぶした。涼やかな音が周囲に響き、狼が何となく感じ取っていた気配が消える。今のうちに距離を離そうと、狼は鍵縄を使って宙を舞った。道中の敵を倒す必要がない以上、無益な戦いは無駄に損耗するだけなのだから。
木々の間を飛び跳ねながら去っていく狼は、その背をキツネ面を付けた子供たちが見つめていることにはついぞ気がつかなかった。

かくして特筆する障害なく鱗滝の家まで戻った狼は、戸を開きひとまずの課題を達成したと宣言した。無言の鱗滝に、狼は出だしで罠にかかり、幻影の対処に悩んだことから少々遅れたのかと不安になる。
どこか気まずい沈黙を破ったのは、静かに茶を飲んでいた越津だった。呵々大笑しながら、得意満面の様子だ。
「見たな、鱗滝よ。これが狼という男の実力よ。お館様が引き入れることを希望するのにも得心が行くだろう？」
湯呑を突き付けながら笑う越津とは対照的に、鱗滝はどうにも現状を呑み込みきれていない。始まりの試金石として与えた課題だったが、予想をはるかに、しかも余力を残

して攻略されるとは思っていなかったのだ。
「いかが、なされたか？」
「気にするな狼殿。自分の想像を超えるものを見たとき、人はなかなか受け入れられんものよ！」
この状況がつぼに入ったらしく、越津は笑いが止まらない。
「さすがに笑いすぎというものだぞ越津殿。なにが面白いのかわからんが、そろそろ笑うのをやめていただきたい」
「いや失敬、妙に笑いが止まらなくなったものでな。
でだ鱗滝殿。自らの言葉を忘れたなどとは言わぬだろうな？」
涙目になりながらも笑いを止めた越津だったが、鱗滝に向けた視線は真剣なものだった。誤魔化しは許さないと、目だけで語っている。
鱗滝は、覚悟を決めた。自らの全てをかけて、この得体のしれない男へ知識と技術を教え込むと。
「狼殿、明日から訓練と座学に入る。食事を終えたら、すぐに休むとよかろう」
「わかりました」
鱗滝は普段よりも早めに、食事の準備に入った。太陽はゆっくりと傾いており、そう遠くない時間には山の向こうへと消えるだろう。夜が明ければ、いよいよ狼の訓練が始

まる。

鍛錬の日々

忍びとして竜胤の御子に仕えていた狼にとって、睡眠とはできる限り短く済ませるに越したことはない行為だ。年単位で固定化されたその考えは、たとえ狭霧山で鱗滝の指導の下訓練に励む今でも変わらない。当初はきちんと眠るよう言い聞かせていた鱗滝も、体質的に長時間眠れないとわかってからは睡眠の質を向上させることを取引条件に目こぼししている。

日が昇るよりも早く目覚める狼は、まず型の繰り返しから一日を始める。葦名の国で身に着けた多くの技は、伝書があるため忘れたとしても習得しなおすことはできる。しかし、付け焼刃の技よりもきちんと身に着けた技のほうが役立つのは明白だ。使えると使いこなせるの間には、越えがたい壁があるのだから。楔丸を抜き放ち、一つ一つの技をゆっくりと繰り返し振るう。より正確に、より無駄なく。

「今日も早いな」

狼が一連の動きを再確認していると、鱗滝がいつの間にか背後に立っていた。高い実力を持つ者特有の、一切音を立てない移動。とはいえこの2人にとって、行動の際に発生する音はあってもなくても違いはない。故に狼は特に驚いた様子もなく、楔丸を納刀

しながら振り返り一礼した。今は教えを請い、食事や寝床の提供を受けている身なのだ。鱗滝は使命である以上気にしておらず、狼も換金可能な道具などを渡すことで対価は払っているものの、礼儀を欠かす理由にはならない。

「はい。動かねば、それだけ鈍りますから」

「何度も言っているが、自己鍛錬も過ぎれば毒だ。ほどほどにな。

今日は朝食が終わり次第鍛錬内容を進める。心しておけ」

いつものやり取りを行い、鱗滝は朝食の準備に取り掛かった。鍛錬を終えた狼も手伝い手早く食事を済ませた2人は、鱗滝の先導で狭霧山中腹の開けた場所で向かい合う。

「朝も言ったように、本日から鍛錬の内容を進める。本来であれば体力づくりや反射神経の訓練に半年は費やすのだが、お前は既に体が出来上がっているからな。

まず儂が使う呼吸について話しておこう。全集中、水の呼吸は呼吸の中でも最も対応力がある。型の数が多く、どんな相手でも必ず適した戦法が取れる点が強みだ。

まずは正しく型を覚えることから始める。まず一通りの動きを見せるから、見ていなさい」

狼が観察の目になったことを確認し、鱗滝は自らが極めた剣技の型を、呼吸を使用せずにゆっくりと披露する。一つ一つが流麗な剣技で振るわれまるで舞うようにも見える動きは、鱗滝が戦線を離れて久しいとは思えない技の冴えを内包していた。まさしく

老練と呼べる鱗滝の一面に、狼は内心驚きつつもその動きを脳内に焼き付けていく。
動きを数度見せた後鱗滝の動きは加速し、実戦での動きを見せ始める。
「水の呼吸に属する型は一通り見せたが、何かわからない部分はあったか?」
加速後にも数度繰り返し型を舞った後、鱗滝は息を切らせた様子もなく狼に問いかけた。ひとまずの見取り稽古を終えた狼は、首を横に振る。
「いえ、技を振るうに問題はないかと」
狼は、覚書どころか掛け軸に書かれた伝承を元に技を再現するほど学習能力に優れている。修羅と呼ばれる一面の発露と呼べるかもしれないこの特異性を持つ狼が、眼前で数度、しかもわかりやすいよう見せられた技を再現できないはずがないのだ。後は訓練なり実戦なりで技を振るい、体に動きを覚えさせるだけだ。
「そうか。ならば本日からはこの場所で型を覚えることが鍛錬内容だ。空気が薄い故同時に肺活量も鍛えられるだろう。
自信がついたら、儂が技を見よう。きちんと習熟できていたら、次の段階に進む。わからないことがあれば聞きなさい」
そう言い残し、鱗滝は広場から去っていった。狼は黙って楔丸を抜き、脳に焼き付いた型を繰り返し振るう。動き自体はすぐに再現できたのだが、中々細部が乱れる。結果として満足のいく習熟ができないまま、初日は山を下りることになった。

朝目覚め、型を確認し、朝食をとり、水の剣技を振るい、寝る。そうした繰り返しを数日行い、なんとか技を人に見せられる程度にまで仕上げた狼は、薄々予測していた問題に直面した。

「……やはり、か」

水の型を振るう際、どうしても慣れ親しんだ技の動きが混ざってしまうのだ。技さえ出せればいいのではないかと考えてしまう者も多いだろうが、鱗滝はこの型を元にして次の段階へ進むと言っていた。他の技が混ざった型では、次の段階に適さない可能性が高い。

一度楔丸を鞘に納め、狼は眉間に皺をよせて悩み始めた。そんな忍びの背後から、聞きなれない声が話しかけてきた。

「ねえ、悩んでるの？」

狼は、即座に楔丸を抜刀しながら振り向いた。音も気配もまともにしなかった相手からの声に、警戒をするなという方が難しいだろう。

振り向いた狼の視界に、狐面をかぶった少年が映った。腰に木刀を下げ、鱗滝と似た格好をしている。

「おぬし……」

「鱗滝さんに水の呼吸を教えてもらってるんでしょ？　僕もそうだったから、手伝うよ」

狐面の少年は、臆することなく狼へと近づいた。腰の木刀を抜き、狼の隣へ立つ。
「僕が型を振るうから、それをゆっくりとなぞって。変な動きがあれば、僕が言うからさ」
訝しむ狼を警戒すらせず、狐面の少年はゆっくりと木刀を振り始めた。それは鱗滝ほどの流麗さはないものの、膨大な修練に裏打ちされた正確さで宙を薙ぐ。少なくとも今の狼よりは、水の呼吸の型に精通しているだろう。
子供に教えを乞うことを厭う者も多いが、あいにく狼にそのような機微は無かった。現状が行き詰っている以上、目の前の手がかりを無視して自らの考えのみを信仰するほど非効率極まりない行為もそうは無い。狼は眼前の少年を模し、ゆっくりと楔丸を振るった。

少年との訓練をはじめてから、日に日に狼の中で技と型の混同がなくなっていく。同時に、型そのものも洗練されていった。
「狼さん、僕が教えられることはもうなさそう。鱗滝さんに技を見てもらえば、次の段階に進めるはずだよ」
ある日突然、狐面の少年はそう言って木刀を腰に収めた。狼も自分の動きから粗が取れたことを自認していたため、そろそろかという予想が当たった形である。

「おぬし、何故ここまでした。同じ師を持つ者のよしみかとも考えたが、ここ数週間あまりにもこちらに都合がよすぎる」
　偽りは許さないといわんばかりの視線を受け、狐面の少年は頭を掻く。
「信じてはもらえないと思うけど、僕はあなたが強くなってくれることが望みだったんだよ。鱗滝さんのためになりたいと思っていたら、偶然あなたが目についたんだ。
　まあ、ただの気まぐれとでも思ってくれれば」
　少年の様子に、偽りを述べている様子はない。
「礼を言う。おぬしの助けがなければ、鱗滝殿の手を借りても未だ修練中だったろう。
　……最後に一つ、確認しておきたいことがある」
「なんですか？」
「おぬしのこと、鱗滝殿には」
　そこまでで、狼は言葉を区切った。狐面の少年が、手で狼を制したのだ。
「……いつから、気がついていたの？」
「最初からだ。音も気配もなく、しかし視線だけは同じだった」
「そっか。それでも僕のことを信じてくれたのは嬉しいよ。
　あなたが鬼殺隊の一員になれば、鱗滝さんはきっと自信を取り戻してくれる。その手伝いがしたかった。

じゃあ、さようなら、狼さん。あなたが強い剣士になること、願っています」
そう言い残し、狐面の少年は霧に紛れて姿を消した。狼は隠し持っていた種慣らしを懐にしまい、烏に鱗滝を呼ぶよう伝える。
やってきて鱗滝の前で技を振るうと鱗滝が僅かに動揺したが、狼はそれに気づかないふりをした。
「見事だ狼。次は呼吸の鍛錬に移る。ついてきなさい」
そう言って鱗滝が案内したのは、巨大な池だった。
「呼吸は大量の空気を肺に貯める必要がある。今のお主の肺がどれほど大きいか、ここで試す。
池に潜って、限界まで出てこないこと」
鱗滝は入水するよう促すが、狼は足が動かなかった。
「どうした、そう深い池ではない。泳げなくとも、足がつく場所で潜れば問題はないぞ」
不思議そうな鱗滝に、狼は自らが身に着けている呼吸について話し始めた。水生の呼吸術。水の中で呼吸を可能とする、にわかには信じがたい秘術だ。
当然鱗滝も何の冗談だと苛立ちを見せたが、目の前で線香が燃え尽きるまで池に潜り平然としていたことで証明ができた。しかしそれは同時に、水を使った鍛錬がほとんど意味を成さないということだ。

「まあ、水以外にも肺を鍛える方法はある。そう悲観することはない」
頭を悩ませる鱗滝に、狼は罪悪感を覚える。それだけに、鱗滝が考案した鍛錬を愚直なまでに実行した。息を止め、山を駆け巡り、呼吸を深くしてより多くの空気を取り込めるように。だが、どれだけ鍛錬しても狼の肺は中々大きくならなかった。
呼吸の訓練を続けること一月。どこか張り詰めた雰囲気の鱗滝に呼ばれ、狼は囲炉裏越しに師と向かい合っていた。

鱗滝は、眼前に座る狼を見て内心深いため息をついた。なぜ世の中はこう残酷な運命が多いのか。目の前の男は、鱗滝が教えてきた子供たちと比べても一段と熱心に鍛錬に取り組んできた。だというのに、この仕打ちはあんまりではないか。
「鱗滝殿」
黙り込んだままの鱗滝へ、狼が声をかける。心配が滲み出るような声音に、鱗滝は一層の悲しみを覚えた。これ以上引き延ばしても誰も幸せにならない。鱗滝は覚悟を決め、非常な事実を告げた。
「狼よ、酷なことを伝える。お主に、呼吸を修める才は無い」
「……それは、まことですか」
「ああ。本来半月もあれば、目に見えて鍛錬の結果は出る。それがお前には一切見られ

ないのだ。

全集中の呼吸は、稀に適性が無い者がいる。残念な話だが、お前はその稀な1人だ」

鬼を狩る手段として、全集中の呼吸は必須技能だ。人の身のまま鬼のような身体能力を手に入れる技術無しに、鬼狩りとして活動していくのは不可能と言っていいだろう。

「これ以上お主を鬼狩りとして鍛えることはできない。残念だが、鬼殺の剣士は諦めなさい。鬼殺隊に貢献したいというのならば、隠という後方支援の道もある。そちらを選んでも誰も文句を言う者はいない」

そう告げながら、鱗滝は自己嫌悪で身を焼かれる思いだった。他の育手ならば、もっと別の鍛え方があったのではないか。呼吸の才を拾い上げ、磨くことができたのではないかと考えてしまう。

自らを責める鱗滝に対し、狼の返答は簡素なものだった。

「では、最終選別とやらに向かう許可はいただけないと」

鱗滝は、狼の発言が理解できなかった。その内容を理解し、初老の育手は激昂する。

「鬼に対抗する技も持たずして、何故最終選別に向かえると判断した！　儂の話を聞いていなかったのか！」

「鬼に対抗する技ならば持っています。あなたが型を教えてくれた」

予想外の反論に、鱗滝は虚を突かれる。

「それは、あくまでも呼吸と組み合わせて使って初めて意味がある技だ。単体では鬼の首を断つことはできない。

越津殿から聞いてはいるが、いかに理外の方法で鬼を殺す手段を持っていようとも、強化された身体能力も無しに教え子を最終選別へ向かわせるわけにはいかん！」

「では相応の身体能力があり、鬼の首を断てると証明すれば最終選別へ向かう許可をいただけると」

鱗滝とは反対に、狼の声は凪いでいた。呼吸が使えぬ絶望も、自らを認めない鱗滝への恨みもない。そして瞳に宿る光に、諦める様子はなかった。このままでは未来ある男を死なせてしまうと考え、鱗滝は一案を講じた。

「わかった。ついてきなさい」

狼を先導しながら、鱗滝は内心でお館様への手紙の内容を考え始めた。主から説得されれば、狼も諦めるだろうとの考えだ。だがその考えは、正面から斬り伏せられることになる。

狭霧山の中腹。狼が修練を重ねた広場にほど近い場所で、鱗滝は立ち止った。

「この岩を斬れば、最終選別へ向かうことを許可する」

そう告げた鱗滝の前には、狼の肩ほどもある岩が鎮座していた。

「期限は」
「儂は定めないが、お館様に向けて文を出す予定だ。返事如何では、この鍛錬が中止となる可能性も十分にある」
「では、今日一日手紙を出すことを待っていただきたい」
「かまわんが、明日になれば鳥を飛ばす。何かあれば知らせなさい」
鱗滝はそう言い残し、下山した。残された狼は楔丸を抜くが、目の前の岩に攻めあぐねる。
当たり前だが、流石の狼も岩を斬ったことなどない。そもそも岩は斬れるのだろうかと悩む狼に、聞き覚えのある声が話しかけてきた。
「大変なことになったね」
「おぬしか」
狐面の少年は、当然のような顔で狼の背後に立っていた。
「一つ聞きたいことがある。岩を刀で斬ったものを知っているか」
「知っているどころか、結構な人数がいるよ。何を隠そう、そのうちの1人が僕だ」
狼が片眉を持ち上げると、狐面の少年は面白そうに笑い声を漏らした。
「これでも、鱗滝さんの元で一年ちょっと鍛えられたんだ。合格はもらっているよ。呼吸の訓練を受けていないあなたが半年ちょっとで最終段階へ進んでいるのを見る

と、自信を無くしそうだけどね」
「諦めさせるための手段だろう、比べるものではない」
狼の言葉に、狐面の少年は笑い声を漏らした。
「そう言ってもらえると、少し気が楽になる。
ところで、その岩を斬る算段は？」
「それならば、おぬしのおかげで何とかなりそうだ」
そう言いながら、狼は楔丸を大上段に構えた。脳内で思い描くのは、かつて葦名で身に着けた剣術。それと共に、狭霧山で学んだ型も同時に思考に乗せた。深い呼吸と共に、その二つの型を混ぜ合わせる。双方の技を別物であると認識し、個々に練り上げたからこそできる芸当。似た動きの型を練り合わせ、新しい一つの技として昇華し解き放った。
「滝一文字」
瀑布の勢いを切り取ったような一閃が、岩を一瞬で両断する。
「……すごい」
「ああ、おぬしと鱗滝殿のおかげだ」
見事に真っ二つとなった岩を見て、狐面の少年は嬉しそうに頷いた。
「これなら、鱗滝さんも納得してくれる。

じゃあ、今度こそさよならだね狼さん。あんな今生の別れみたいに言っておきながらこんなこと言うのは間が抜けてるけど、やっぱり気が向いたら狭霧山に来てね。鱗滝さんも喜ぶよ」

「ああ、暇を見つけて寄ろう。ここならば技の研鑽もしやすい」

そう言って、狼は鱗滝を呼びに山を下った。鱗滝と岩の前に戻ってきたとき、当然ながらすでに狐面の少年の姿は無かった。

鱗滝は真っ二つにされた岩を見て言葉を失っている。このままではいつまでたっても話が進まないと判断した狼は、自ら話を切り出した。

「鱗滝殿、これで最終選別へ向かう許可をいただけますな」

狼の言葉に、鱗滝は深いため息をついた。

「これを見せられれば、否とは言えんよ。

狼殿、おぬしは稀代の才能に恵まれているといえるな」

落ち込んだ様子の鱗滝に、狼は首を振る。

「鱗滝殿、あなたの教えがなければ岩は斬れなかった。この身が修めた技と、あなたが教えてくれた型を練り合わせた結果なのだから。

胸を張ってください。あなたの教えは、確かにこの身の力となっています」

「慰めか。わかっていても、言ってもらえれば嬉しいものだな。

狼殿、成果は確かに見せてもらった。最終選別へ向かうことを許可する」

両断された岩の前で、鱗滝は静かに狼の実力を認めた。

最終選別への挑戦

狭霧山の麓にある鱗滝の家で、狼は鱗滝と共に夕食を摂っていた。狼が鍛錬をこなした祝いとして、鱗滝が用意したものだ。狼は正規の手段で合格をもらったわけではないと辞退しようとしたのだが、鱗滝は自分の中での慣例だといって譲らず、狼が折れる形となったのだ。

戦国の人間である狼にとって、鱗滝が用意した食事は大名が食べるそれと比べても遜色ないものだった。

「本当に、これを」

「ああ。儂の慣習であり、どういった形であれ儂の課題をすべてこなした者への労いの意味もこもっている。遠慮なく食べなさい」

戸惑う狼へと箸を渡し、鱗滝が率先して食べ始めることで狼もゆっくりと口を動かし始めた。

しばらくの間黙って食事が進み、ふと鱗滝が口を開く。

「そのままでいいから聞きなさい。

次の最終選別は二週間後に行われる。明日の朝、日輪刀を渡す。二週間で、日輪刀を

馴染ませなさい」
「……自前の刀が、ありますが」
「本来鬼は、日輪刀で首を落とすか日光に晒さなければ殺せないものだ。それを日輪刀ではない刀で、しかも首を斬らずに殺しては、流石に悪目立ちが過ぎるだろう。普段の鬼狩りは日輪刀を使い、今持っている二本はいざという時まで抜かぬほうがいい。
異様なものは排除されることが常だ。できる限り、目立たぬようするに越したことはない」
鱗滝の主張は、忍びとして活動する狼にとって納得できる内容だ。それに、いざとなれば楔丸と不死切りを振るうといっても、日輪刀を使えるようにして不便が出るということはないだろう。
「わかりました。お借りした刀でも、岩を斬れるよう努力いたします」
「ああ、そうしなさい。
さあ、まだ食事は残っている。肉体をつくるためにも、どんどん食べなさい」
鱗滝の進めるままに食事は続き、満腹のまま狼は床についた。
その翌日、鱗滝は鞘に入ったままの刀を狼へと差し出した。
「儂が現役時代に使っていた刀の一本だ。少々古いが手入れはしてある。
そういえば、刀の手入れはできるのか？」

「不足なく。道具も常備しています」
狼が懐から手入れ道具を取り出し、鱗滝はそれを見て満足そうに頷いた。
「ならばいい。刀は我々にとっての生命線だ。乱暴に扱えば、いざという時に見放されるからな。
では、存分に馴染ませるといい」
鱗滝に見送られ、狼はすっかりと通いなれた山の中腹へと足を運んだ。楔丸で両断した岩の前で日輪刀を抜くと、青く染まった刀身が現れる。見方によっては芸術品にも思えるそれに狼は僅かに見惚れるが、気を取り直して正眼に構えた。
数度素振りを行い、型をなぞった狼は首を捻る。そして何を思ったのか、目を瞑ると日輪刀で岩を軽く叩いた。響く音を聞き、狼はゆっくりと目を開ける。
「……脆い」
鱗滝だけでなく、この日輪刀を打った鍛冶師が聞けば激怒する感想を狼は漏らした。
あえて弁護するのならば、これは今まで楔丸を振るってきた狼だからこそ抱いた感想だ。楔丸はただの刀ではなく、九朗が保護されていた平田家に伝わる宝刀なのだ。切れ味を代償に、尋常ならざる強度を誇る突き特化の武装と言っていい。
それに比べ、狼が貸し出された日輪刀は言い方は悪いが質のいい日本刀に過ぎない。確かに頑丈ではあるのだが、その強度はあくまでも常識の範囲内に留まっているのだ。

楔丸を扱う感覚で振り回せば、あっさりと折れてしまうだろう。
だがその代わり、楔丸にはない鋭い切れ味を持っている。
「鍛錬、あるのみ」
武装の差を意識しつつ、狼は日輪刀の素振りを続行した。

藤の花が狂い咲く山の広場で、狼は佇んでいた。まるで祭事のように縄と布で囲まれた広場には、狼と同じく帯刀した人間がたむろしている。その数二十人弱であり、ほとんどが年若い少年少女だった。当然、狼は最年長である。例外なくどこか暗い雰囲気を纏っており、過去にろくでもない事柄に巻き込まれたもの特有の、薄暗く澱んだ感情だ。
日輪刀の扱いを意識している間に、二週間はあっという間に過ぎ去った。鱗滝から簡易的な地図を渡された狼は、同時に小さな木彫りの飾りを手渡されていた。
鱗滝は、本来であれば門下生には木彫りの厄除の面を渡しているらしい。だが、彼からすれば基礎知識を教えただけの狼を門下生とは言いにくかったらしい。とはいえ、教えた相手に何も渡さず送り出すのは不義理であると考えた鱗滝は、厄除の面の代わりとして狼の顔を模した彫り物をつくり、お守りとして手渡したのだ。
時刻は夕方であり、太陽はゆっくりと高度を落としていく。日の光が山の向こうへと消えるころになると、1人の人物が現れた。この場に相応しくない、どこか透き通った

印象を受ける美しい女性だ。広場に集まった参加者の視線が集まったことを確認してか、女性が一礼した。

「皆さま、今宵は最終選別にお集まりくださってありがとうございます」

顔を上げた女性は、最終選別の内容について説明を始めた。選別内容はこの藤が咲き乱れる山、藤襲山で7日間生き残ること。中腹から頂上は藤が咲いておらず、藤を嫌う鬼は生け捕りにされて山に閉じ込められていること。

「7日目の朝、再びこの場でお会いできることを願っております。

それでは、行ってらっしゃいませ」

女性が再び深く礼をし、それを合図として広場に集まっていた者たちは一斉に藤の結界から鬼の蔓延る死地へと踏み込んだ。

狼も例に違わず、しかし他の者のように逸ることもせずほとんど最後尾で藤の結界を抜けた。領域が切り替わったことを、肌で感じ取ることができる。風が吹き降りているのか、藤の匂いすら消えた山の中で狼は1人ゆったりと歩いている。

一件無警戒な歩みに見えるが、日輪刀は抜き身で右腕に握っており、いつでもどの方向にでも斬りかかれるよう筋肉は緊張を続けている。

「っしゃあ久方ぶりの肉……」

その警戒は、すぐに役立つこととなった。木々を喧しくかき分けて狼へと襲い掛かっ

た鬼が、一太刀で首を落とされたのだ。
　水の呼吸壱ノ型、水面斬り。全集中の呼吸の肉体強化こそ使わなかったものの、手練れである狼が放った一太刀は岩とも例えられる鬼の首を容易く切り落とした。
　何が起きたのかもわからぬまま塵と還る鬼を、狼は見もせずに歩を進める。ひとまずは、鬼の首を落とすことができると確認が取れたのだ。次は、切り結び弾いても刀身が耐えられるかを知りたい。狼は、そう考えている。
　山に閉じ込められた鬼は飢えているようで、そう歩くことなく次の鬼が見つかった。
「喰わせろ、お前の肉を寄越せえええぇぇ!」
　理性も知性も感じさせない絶叫と共に、鬼はがむしゃらに狼へと爪を振るった。その連撃をいなし、弾き、狼は鬼の体勢を崩す。首を斬ろうと刀を振り上げた狼の背後から、もう一体の鬼が襲い掛かった。
「隙ありってなぁ!　この肉は俺のものだ!」
　眼前の敵に向かって刀を振るっている以上、背後の鬼には対処ができない。そのまま背を裂かれ、肉を喰われるだろう。普通の人間であるのならば。
　狼が宙で大きく体をねじり、旋風のように周囲の空間を一息に薙ぎ払った。何が起きたのかもわからず、狼を挟んでいた前後の鬼は同時に首が斬り飛ばされ、それだけではなく肉体すらもばらばらに切断されて消滅する。

ねじれ斬り。回転系二つの技を組み合わせた攻撃により、狼は全方位を切り払ったのだ。その儘何事もなかったかのように歩き出す狼だったが、彼の忍びとして鍛えられた耳が悲鳴を聞き取った。

最終選別の合格条件は生き残ることであり、共に挑んだ者を助ける必要は一切ない。すでに狼は鬼の首を落とせる確認と、日輪刀の強度確認の目標を達成しているのだ。これ以上の戦いは無意味でしかなく、忍びとして身につけた潜伏技術を使って7日間ひっそりと過ごすことが最適解だろう。

しかし、狼は刀を握って悲鳴の聞こえる方へと走り出した。手頃な木々を見つけ、忍義手の鍵縄も使い宙を滑るようにして悲鳴の発生源へと急行する。

助けを求める声を聞けば、動かずにはいられない。これは狼が持つ弱さであり、忍びとしては早々に切り捨てるべきものだ。しかしこの一点があったからこそ、狼は御子の忍びであり続けることができ、修羅に落ちずに済んだのだ。

忍びは人を殺すが定めなれど、一握の慈悲だけは、捨ててはならぬ…。楔丸の名に込められた願いは、狼の中へと確かに根付いていた。

朝日の下、悲鳴嶼行冥は音の反射を頼りに藤襲山を下っていた。盲目である彼は音の反射で周囲の環境を探っているため、昼間であろうが夜中であろうが変わることなく動

くことができる。これは、夜の闇に紛れた鬼と闘う際大きな助けとなっている。
悲鳴嶼は鬼が引き起こした虐殺事件の犯人として処刑寸前であるところを、現鬼殺隊の長である産屋敷耀哉に助けられた。その恩義と鬼への憎しみから鬼殺隊への入隊を決めた彼は、育手から聞いていた話とは大きく異なる現実に少し驚いていた。
「おかえりなさいませ。ご無事で何よりでございます。
最終選別突破、おめでとうございます」
耀哉の妻であるあまねの声が反射し、周囲の環境を立体的に悲鳴嶼へと届ける。選別参加者の内生き残ったのは、１０人弱。下手をすれば参加者全滅すらあり得ると聞いていた悲鳴嶼にとって、これは驚くべきことだった。
驚くべきと言えばもう1つ。てっきり自分が選別参加者の中でも最年長だと思っていた悲鳴嶼は、聴覚の集中を真の最年長へと向ける。
日輪刀以外に、二本の刀を持った男。聴覚で周囲を探知する悲鳴嶼でも、音の反射以外でこの男が発する音を聞き取ることが難しかった。音を殺していると錯覚するほどに無音であるこの男は、目立った怪我もなく7日間を過ごしたようだ。そして今も、ただ静かにあまねの話を聞いている。
合格者として細々とした作業を終え、疲労が残る体で藤襲山を後にする悲鳴嶼の耳に、同じ合格者の声が漏れ聞こえた。

「俺、隊士になるのは諦めるよ。鬼と対峙したとき、簡単に刀折られてさ。もうダメだってなったときに、あの刀三本持った人に助けられたんだ。ああいう人が万全で戦えるよう、隠って裏方の道もあるみたいだし。

呼吸が使えれば、裏方でも十分働けるだろ」

「お前もか。俺も鬼と闘ってるとき腕切られてさ。刀落として悲鳴上げてたら空からあの人が降ってきて、一太刀で鬼の首落としていったんだよ。

俺は隊士として頑張ってみるけど、お前の選択も間違ってないと思う。お互い頑張ろうな」

どうやら例にないほどの生存率は、あの男が関わっていたようだ。最終選別は本来初めての実戦ということもあり、周囲に気を使うことなどできない。例に漏れず、悲鳴嶼も自分が生き残ることで精いっぱいだった。

そんな中、他人を助ける余裕すらあった最年長の男。

「機会があれば、話してみたいものだ」

師の元へと帰路を歩みながら、真っ先に帰っていった男を考え悲鳴嶼は独りごちた。

藤襲山での7日間、狼は山中を文字通り跳びまわるようにして過ごしていた。悲鳴が聞こえ、間に合う範囲だと判断すればそちらへ向かって鬼を斬る。最低限の手当てを済

ませ、礼も聞かずにその場から去る。助けられた相手からすればまさに救い主だが、狼からすればできるからやったという程度の認識でしかない。

もちろん、人助けに全力を注いでいたわけではない。狼は悪人ではないが、目に見えるものすべてを救おうとするほど傲慢でもないのだから。悲鳴があまりにも遠ければ間に合わないと判断し行動は起こさなかったし、助けた相手に助言をするわけでもなければ共に行動し護っていたわけでもない。何もなければ手頃な薮に潜んで気配を殺し、鬼からも人からも探知されずに過ごしていた。

そうすることにより、彼からすれば最低限の損耗で最終選別を突破した狼は一路狭霧山へと向かっていた。食事も休息も最低限で済ませていただけあって、流石の狼も疲労の色が濃くなっている。本来であれば気にしないであろう烏程度の重量も煩わしかったため、狼につけられた鋏烏はゆっくりと頭上を旋回している。

「カアアァァァ！　モウ少シ体ヲ労ワレ！　マダ疲レハ抜ケテイナイゾ！」

主の体を心配して騒ぐ烏に、狼は見当違いの感想を漏らした。

「以前話した産屋敷の烏は、もっと人間に近い話し方をしていたようだったが」

「本部直属ノ烏ハ精鋭中ノ精鋭ダ！　我々トハ比ベ物ニナラナイホドノ訓練ヲウケ、知能モ優レタ烏ダケガ本部ニ送ラレル！　アレホドノ烏ガ一隊士ニ支給サレルナド思イ上ガルナ！　カアアァァァ！」

随分と興奮したように騒ぐ烏を、狼は手で制した。するとおとなしく口を紡ぐので、激昂しやすく冷めやすい性格らしい。

「先に狭霧山へと飛んで鱗滝殿に帰る旨を伝えてくれ。夕食の支度などもあるだろう」

「了解！　了解イィィィ！」

ふと鱗滝へ合格した旨の連絡をしていなかったことを思い出し、狼は烏を先行させた。連絡手段がなかったという理由があったが、今はこうした烏を先行させられる。鬼殺隊本部から連絡が行っている可能性があるうえ、今からでは狼が到着するまでそう差があるわけではない。しかし、師に成功を伝えるのならば早いほうがいいだろうとの判断だ。鬼殺隊にかかわる物事は教え込まれているためか、鎹烏は迷う様子もなく狭霧山の方面へと飛び去った。

鎹烏を送り出してから数刻たち、太陽が天頂から傾き始めたころに狼は鱗滝の小屋を視界に収めた。昼食の時分は過ぎたが何か残り物でもないかと考える狼の眼前で、小屋の扉が勢いよく開かれる。

身構える狼の眼前で、小屋の中から鱗滝がゆっくりと顔を出した。狼を見定めると、ふらふらと引き寄せられるように近づいてくる。

「……鱗滝殿？」

異様な雰囲気の鱗滝に狼は警戒心を抱くが、敵意を感じない。そうしているうちに鱗

滝は狼の目の前に立ち、両肩に手を置いた。
「よく、生きて戻った！」
鱗滝は、泣いていた。そこにいる狼が確かにそこにいることを確認するかのように強く肩を握り、面の裏から零れ落ちる涙を拭おうともせずにただ立ち尽くしている。
狼は、山で出会った狐面の少年が言った言葉を思い出した。鱗滝に自信を取り戻してほしい。そして眼前の光景から、自ずと何が起こっていたのかを察した。
「鱗滝殿。生きて帰ってくることができたのは、あなたが教えてくださった技がこの身を守ってくれたおかげです。
ありがとうございます」
狼が静かに語る間にも、鱗滝は絞り出すようにして泣き続けている。その涙が止まるまで、狼は黙って傍に立っていた。
森の中からこちらを窺う狐の面たちには、気がつかないふりをしながら。

合格者の通過儀礼

最終選別から2週間が経とうとする昼下がり、鱗滝の家に一人の来客があった。深い編み笠に風鈴を吊り下げた風変わりな男は、ちょうど素振りが終わり家へ入ろうとしていた狼を笠越しに見ると背負っていた風呂敷を外し胸の前で抱える。

「俺は鋼鐵塚という。狼という者の刀を打った刀鍛冶だ。

お前が狼だな」

「そうだ。中へ」

狼は鋼鐵塚と名乗った風変わりな格好の男へ室内へ入るよう促すが、鋼鐵塚は顔も見せずに荷を解き始めた。

「日輪刀は太陽に最も近く一年中陽の射すという陽光山、その山中から採掘される猩々緋砂鉄と猩々緋鉱石から打たれる。日の光を吸収し貯め込んだ鉄で打たれた刀だけが、鬼を殺しえる刃となるのだ」

「鱗滝殿から聞いたことがある。落ち着いて話すためにも、中へ入れ」

「これが俺が打った刀だ。最終選別での戦いを聞いて、お前の戦いに合うよう俺なりに考えてある」

言葉を無視して話を続ける鍛冶師に、狼は家へ招き入れることをあきらめた。この手合いは、満足するまで動かない。

呆れた目の狼へ、鋼塚はようやく顔を上げ視線を向ける。編み笠で見えなかった男の顔を、狼は至近距離で見ることになった。

「ひょっとこ……」

予想外の光景に唖然とする狼を、ひょっとこの面の下から鋼鐵塚はじっと観察し始めた。

「お前、妙な痣が顔にあるんだな。それに片腕は義手かぁ。

こりゃ面白い。珍しいもんが見られそうだぜぇ」

人によっては指摘された時点で怒り出しかねない特徴を述べる鋼鐵塚に、狼は呆れて物も言えない。何とも言えない空気が漂う中、いい加減しびれを切らしたらしい鱗滝が顔を出した。

「相変わらず人の話を聞かん男だな、お前は」

「おお鱗滝。お前、なかなか面白そうなやつを弟子にしたじゃねえか、ああ?」

「儂はこの男の師匠ではない。成長の手助けをしただけで、元々実力者だったからな」

鋼鐵塚と会話を成立させる鱗滝に、狼は尊敬の念を抱いた。そんなくだらない理由で尊敬されていると気付くはずもなく、鱗滝は鋼鐵塚と会話を重ねていく。

「儂の家に来たらまず上がれと言っただろうが。お前は気にしないのかもしれないが、風呂敷についた土が床に落ちるんだ。掃除をするのは儂なんだぞ」
「いちいち小さいことを気にする男だな鱗滝。どうせ几帳面なお前のことだから日に数回は箒をかけているんだろう。その回数が一度増えた程度でごちゃごちゃ言うな」
「まったく。言っても無駄とはわかっているが、言わずにはいられん。
ほら、早く上がって風呂敷を解け。狼がどうしていいかわからなくなっているだろう」
半分引き込むようにして、鋼鐵塚はやっと鱗滝の家に上がった。風呂敷から木箱を取り出し、狼の前で蓋を開く。中に収められた日輪刀は、鞘に入った状態でもわかるほどに分厚く頑丈な造りをしている。
「さあさあ早く抜いてみなぁ。聞いた話じゃ、お前さん鬼の攻撃を刀で弾き返すらしいじゃねえか。それなら岩の呼吸に適性があるかもしれんし、見事に灰色に染まった刀身を拝めるかもな。なあ鱗滝」
非常に嬉しそうな鋼鐵塚の一言に、鱗滝は肝心なことを彼に伝えていなかったことに気がついた。しかし今伝えても何の意味もないと思い返し、できるだけ早く行動できるよう僅かに腰を浮かせるにとどまる。
そんな鱗滝の臨戦態勢を疑問に思いながらも、狼はゆっくりと日輪刀を鞘から引き抜

いた。
「日輪刀は別名色変わりの刀と言ってな。持ち主によって色が変わるのさぁ。ほれ、すぐにでも変わり始めるぞ」
　手をうねらせながら変化を心待ちにする鋼鐵塚だったが、狼が握る日輪刀に変化は見られない。首を捻る鋼鐵塚に、鱗滝は言いにくそうに切り出した。
「鋼鐵塚。お前は知らないようだが、狼に呼吸の才は無い。持ち前の身体能力と卓越した剣術だけで鬼と渡り合うことができる稀有な存在だ。
　だからその、なんだ。恐らく日輪刀の色は」
「キーッ！」
　鱗滝の説明を聞いていた鋼鐵塚が、突如頭を押さえてのたうち回った。
「俺は澄んだ灰色の刀身が見られると思ったのにクソーッ！」
　興奮状態のまま、鋼鐵塚は狼へと掴みかかる。止めるべきかと鱗滝が動く前に、狼が鞘と刀を握り変え構える。そのまま掴みかかる鋼鐵塚の両腕を弾き、大きく開いた胸元に肩から突っ込み床に押し倒した。
　鍛えているとはいえ、鋼鐵塚はあくまでも刀鍛冶だ。戦闘職である狼の体当たりに抵抗できるはずがなく、あっという間に制圧された。
「……鱗滝殿」

沈黙が満ちる中、鋼鐵塚の首に鞘を突き付けたまま狼が口を開いた。
「……なんだ?」
「刀鍛冶を変えることは、可能でしょうか」
切実な心境が込められた問いに、鱗滝は大きくため息をつくことしかできなかった。
鬼殺隊史でも最短であろう、担当鍛冶師交代の瞬間である。
「鋼鐵塚、この男には呼吸の才がないのだ。示すものがなければ、日輪刀の色が変わることはない。
儂が伝え損ねていたのだ。すっかり話した気になっていた」
「じゃあ俺は期待のし損だってのか!? クソーッ!」
「静かにしろ」
尚も暴れる鋼鐵塚を叩き出すようにして追い返した狼は、静かになった室内で自らの刀をじっくりと見る。
鞘から抜いた今、鞘越しでもわかるほどの分厚さが目立つ。しかし、側面に掘られた溝により軽量化されているため見た目ほど重くはない。楔丸と軽く打ち合わせて音を聞くが、強度面でも不足はないようだ。
「あの刀鍛冶、腕は確かなようで」
「鋼鐵塚は腕の良さをあの性格で台無しにしている男だ。腕だけならば鍛冶師の中でも

上位なのだが、あの性格につき合える剣士は中々いない」
　ため息混じりの鱗滝に、狼は内心深く同意した。あれだけ我が強い男を受け入れるのは、並大抵の人間では不可能だろう。少なくとも、狼は共に仕事をする自信はなかった。
「ところで狼、先ほど鋼塚を押さえつける前に使っていた技は？」
「相手の攻撃をいなし、体幹を崩して隙を作る。弾きと呼ばれる技術だ」
「あれが強さの一端か。
　狼、あの技を儂に教えてくれないか。どことなく水の呼吸の技と相性が良さそうなあれを使いこなせれば、剣士の生存率が上がりそうだ」
「構いませんが、長々と教える時間は無いかと」
「儂とて剣士の端くれよ。一刻も打ち合えば盗み取ってみせるわ」
　元柱としての矜持か、鱗滝は不敵な声音で断言した。狼からすれば隠す技術でもないため、互いに鉄心入りの木刀を持って山の広場まで歩き始めた。

　狼が修行場として利用していた広場で、２人の達人が構え合っていた。鱗滝は攻めの姿勢、狼は守りの姿勢で向かい合っている。
「今更だが、その技を人に教えても良いのか？　おぬしの生命線だと思うのだが……」
　鱗滝が、おそるおそるといった様子で狼に問いかけた。軽く体をほぐし、いざ構えて

向かい合った段階で僅かに理性が働いたのだろう。
だが鱗滝の心配とは真逆に、狼の返答はあっさりとしたものだった。
「元いた場所では、戦うものは大なり小なりこの技術を会得していた。今更使う者が増えたところで、影響は無い」
「そうか。では胸を借りよう!」
宣言と同時に、鱗滝は狼めがけて木刀を振るった。全集中の呼吸により底上げされた身体能力は、老体とは思えない攻撃速度を生み出す。並大抵の相手、例え現役の鬼殺隊士であっても、この一撃を見切ることができものは少ないだろう。
しかし、狼は当然のように対応する。迫る鱗滝の木刀へ添えるように自らの木刀を動かし、ほとんど力を加えずして軌道を逸らした。意識した動きを意図的に乱された鱗滝は、自らの体幹に大きな負荷がかかったことを自覚する。
「これが体幹を崩されるということか。たしかに連続すれば大きな隙となるな」
はじめての感覚に戸惑う鱗滝だが、弾かれた衝撃を筋力でねじ伏せて木刀を振るい続ける。だが卓越した技術に裏打ちされた連撃も、狼の鉄壁の守りを貫くことができない。
そして数合後。
「ぬうっ!?」

鱗滝の体が大きく揺らぎ、致命的な隙をさらけ出した。それを見逃す狼ではなく、素早く突き出された切先は鱗滝の喉元直前で静止した。

「なるほど、確かにこの技ならば鬼といえども手玉に取れるだろう。ならば次は、技を使うぞ」

再び向かい合い、鱗滝は木刀を振るう。先ほどの焼き増しかと思われたその時、鱗滝の呼吸音が大きく響いた。全集中の呼吸を常に行う〝常中〟を身につけた鱗滝が、さらに多量の空気を吸うことで身体能力を並の鬼以上にまで引き上げる。腕を交差させた特徴的な構えから放たれた一撃は、流れる水を幻視するほどの流麗さで狼へと迫る。

だが、狼はその一撃を弾いた。水が岩にぶつかり砕ける光景が両者の脳内に浮かび、砕かれた鱗滝と砕いた狼は互いに距離を取った。

「儂の水面斬りをああもたやすく弾くか。流石だな狼よ」

「僅かに遅ければこの身は斬られていた。侮れん御仁だ」

互いを称える言葉の余韻が消えないうちに、鱗滝は深く踏み込みうねる水のように狼へと迫る。水の呼吸参ノ型、流流舞いは足運びを重視する歩法と剣技の複合技だ。付いて離れる鱗滝の動きを狼はしっかりと目で追うが、動いている間にも斬撃を繰り出すために隙が無い。

ここにきて、狼は脳裏に一人の侍を思い浮かべた。狼の腕の錆を落とすため、文字通

り切られ役として身を捧げてくれた男。蟲に憑かれ死なずと化した男の望むまま、狼はかの男の蟲を斬った。その男、半兵衛は鍛錬のたびに起き上がり狼のために立ち合いの相手をしてくれたのだ。

半兵衛と似た立場に自分がいる妙を感じ取り、思わず口元が緩む。様子が変わった狼を訝しみ、鱗滝の攻め手が緩んだ。

「狼……ﾊ!」

その隙を逃さず、狼は鱗滝へと斬りかかった。咄嗟に防いだ鱗滝と鍔迫り合いになり、動きが止まる。

「弾きの動きは見せた通り。こちらから参る故弾いて見せよ」

そう伝え、狼は忍義手の重みを利用して後方回転をしてのけた。鍔迫り合いの状態から一息で距離を取った狼に鱗滝は虚を突かれるが、義手の重さを利用し飛び込むような回転で斬りかかる狼の一撃を慌てて防ぐ。

寄せては引き、引いては寄せる剣技。鷹の名を冠する忍びが得意とした、寄鷹斬り、そして逆回しだ。

水の呼吸とは違う、まるで狩りをする猛禽のような動きに鱗滝は翻弄される。しかし、狼は技を連続して出すことはしなかった。

「狼よ、なんのつもりだ?」

「これは戦いではなく修練。ひとまずは弾きを感覚でつかまなければ技に対応するなど不可能」

僅かな苛立ちを含んだ鱗滝の問いに、狼は至極冷静なまま答えた。木刀同士とはいえ、久方ぶりの戦いに血が騒いでいたことを自覚し反省する鱗滝だったが、狼は気にすることなく斬りかかる。

謝罪も反省も求めず、ただ鍛錬を続ける姿勢に鱗滝は面の下で笑みを浮かべた。不器用な優しさに触れながら木刀を振るい、ついに狼の一撃を弾くことに成功する。

「これが、弾きか」

避けるでも防ぐでも、受け流すでもない独特な感覚に鱗滝は声を漏らす。

「今の感覚を忘れぬうちに、続けよう」

「ああ。頼むぞ狼よ」

そうして2人は再び木刀を打ち合わせた。鱗滝が身につけた弾きの精度は驚くべき速さで上昇し、いよいよ狼も技を使おうかと考えたところで鋏鳥による制止が入ってしまう。

「カアアァァァ！　任務地マデノ移動ヲ忘レルナ！　モウ動キ始メネバ今晩マデニ間ニ合ワナイゾ！

初任務ニ遅レルナド前代未聞ダ！　急ゲ、急ゲ！　カアアァァァ！」

ここまで急かされては、2人としても鍛錬を中止せざるをえない。
「口惜しいがここまでか。
狼よ、たまには狭霧山に来るといい。儂の鍛錬に付き合ってもらいたいしな」
「機会を見つけて、よりましょう。この霧深い山ならば、技の鍛錬ができそうです」
「そうか。儂の相手をするにしろおぬしの技を磨くにしろ、いつでも遠慮なく来るといい。連絡さえあれば、食事を用意して待っている。
狼よ」
鱗滝は言葉を切ると、面越しとはいえ狼を正面から見据えた。狼は構えを解き、その視線をまっすぐに受け止める。
「なんでしょうか」
「死ぬなよ」
その一言に、どれだけの気持ちが込められていたか。その思いをくみ取れないほど鈍感では、忍びなど務まらない。
「当然」
そう応えて、狼は烏と共に狭霧山を去った。胸元の守り袋に潜ませた、竜胤の御子から授かった欠片に触れながら。
これ以降狼は腕前を存分に振るい、鬼殺隊でも期待の新人として注目を集めていくこ

とになる。

夜の闇に覆われた産屋敷邸の一角が、蝋燭で照らされていた。その室内には鬼殺隊当主である産屋敷耀哉と、鬼殺隊最高戦力であり最高幹部である柱の面々が向かい合って座っている。半年に一度行われる鬼殺隊上層部の会議、柱合会議だ。

「以上でこの議題もおしまいだね。

最後に、鬼殺隊の内外で気になる噂など聞いてはいないかい？

では、槇寿郎から聞こうか」

耀哉の声とほぼ同時に柱が一斉に手を上げ、耀哉は嬉しそうに笑いながら筆頭である槇寿郎を指名した。

そうして順番に、自分が聞いた噂などを話していく。鬼の手がかりになりそうなものから隊士の規律の問題まで、様々な情報が手に入るのだから噂話は侮れない。

槇寿郎の後は端から順に話していくことになり、最後に残ったのは水柱の越津今座衛門だった。

「では当方が最後であるな。近年隊士の質が落ちているのは周知の事実だが、それでも逸材というものはいるところにはいるものだ」

実に嬉しそうに髭を撫でる水柱に、周囲の柱から視線が集まる。

「それは嬉しい話だね。では、詳細を話してくれるかい？」
「はい。
貴殿たちも噂は聞いたことがあると思うが、岩の呼吸を使う隊士と呼吸を使わない隊士の話よ。岩の隊士はなんでもその力から真っ当な刀を振るえば折ってしまうらしく、斧状の日輪刀を振るい盲目にもかかわらずすさまじい強さだとか。
呼吸を使わない隊士は、当方と炎柱は以前に会ったことがある。なんでもお館様の遠縁に仕えていた人材が、故あってお館様に仕える運びとなったとのこと。岩の隊士に負けず劣らずの実力であり、ほとんどの任務を傷1つなくこなすとか。
両者ともにお館様直々に勧誘したらしいとも聞いております。いや、流石はお館様の慧眼といったところですな」
楽しそうに締めくくった越津の話を聞いた柱は、興味深そうに騒めく。中でも柱内最高齢である影蔵伸三は、何かを思い出したようだった。
「そういえば、今回の議題にも挙がっていた隊士の負傷の減少に似たような報告がありましたな。見るところがある隊士が素早く鬼を斃すから結果として負傷が減るのかと考えておりましたが、たしか鬼の攻撃を受ける隊士に担当の隊士が庇われたという報告がいくつか烏から上がっておりました。
今回の2人と見ても、おかしなところはありませんな」

鬼殺隊は鎹烏という情報伝達手段があるため、非常に精度の高い情報が飛び交うこととなる。その中で複数上がった報告ともなれば、疑う余地はない。

「お館様、岩の隊士はあたしの継子としたく。許可をいただけませんか?」

紅一点、岩柱の畠山ヤエが耀哉に頭を下げる。同じ呼吸の使い手ということもあり、周囲の柱から反対の声は上がらない。

「それは本人に聞くといいだろう。私もその呼吸を使わない隊士には心当たりがあるし、じつはみんなに提案したいことがあったんだ。

たしか3日後ならみんな時間があったと思う。そこで件の隊士を呼び、臨時の柱合会議を行おうと思う。議題はヤエの継子問題と、私の提案だ。

なにか、問題があったら言ってくれ」

敬愛するお館様に問われれば、無理を押してでも彼ら彼女らに否は無い。

「御意」

代表として頭を下げた槇寿郎の返事こそ、柱たちの総意だった。

継子決定と長就任

狼が鬼殺隊士として初の任務を終えてから数ヶ月。かつての経験を活かしながら手際よく鬼を切り合同任務も問題なくこなすため、比較的高齢の入隊者との侮りも徐々に減少し反対に階級は順調に昇格していた。

彼からすれば与えられた責務をこなしているだけなのだが、初任務での戦死も珍しくはない鬼殺隊で、ほとんど傷も負わずに鬼を切り同僚すら護る余裕がある隊士は少ない。結果高い貢献度から信頼を勝ち取る狼なのだが、この日は珍しく任務以外の指令に従い隠の背で揺られていた。なぜか緊急の召集命令が届き、本部へ向かっているのだ。

両足を地につけ目隠しを解くと、以前と変わらない門構えが目に入った。

「庭へ向カエ！　オ館様ガイラッシャルマデ待機スルノダ！　カアアアアア！」

空からついてきていた狼の鎹烏が、騒がしく指示を飛ばした。狼が初めてこの屋敷に呼ばれたときも、会合は庭で行われた。今回もそうなのだろうと納得した狼が庭へと入ると、そこには先客がいた。見上げるような巨体に手で挟んだ数珠、そして白く濁った眼という特徴を持つ男に、狼は見覚えがある。

「悲鳴嶼か」

「その声は、狼か。先日の合同任務ぶりだな」
　同じ最終選別を突破した同期である悲鳴嶼行冥が、1人松の木の下で佇んでいた。どういう縁か、合同任務でも度々顔を合わせるため自然と会話が繋がる。
「あの時は狼が鬼の一撃を防いだおかげで楽に戦うことができた。私だけならばもっと時間がかかり、怪我も多く負っていただろう」
「できることをしたまでだ。礼には及ばん。おぬしの腕ならば、そう危険もなく相手にできたであろう」
　互いに手柄に執着する性格ではないことに加え、不思議と戦闘法が噛み合うのだ。同期ということも手伝い、この2人は一般的に友人と呼べる程度の交流を持っていた。
「何か失態を犯して呼ばれたのだとばかり思っていたのだが、私以外にも呼ばれたとなるとどうもそうではないようだ」
「心当たりはない。話があるまで待つしかないだろう」
　向かい合って首を捻る2人の背後で、足音が聞こえた。振り向いた狼の目に、見覚えのある顔が映る。
「おお狼！　息災か？」
「狼にそちらは悲鳴嶼か。どちらも活躍はきいているぞ」
「久しいです、越……水柱様に炎柱様」

狼の発言に、あくまでも一隊士でしかない悲鳴嶼は驚きを隠せなかった。
「柱の皆様に名を覚えていただけるとは。
名乗りが遅くなり、失礼いたしました。悲鳴嶼行冥と申します。このように盲目故、ご容赦願いたい」
「ああ、気にすることはないぞ悲鳴嶼隊士。突如湧いて出た相手にいちいち名乗るわけにはいくまい。盲目ならば、背格好から判別するわけにもいかぬであろうしな。
それに、今はまだあくまでも私的な交流と言えよう。当方もこの炎柱も、公の場でなければそこまで礼儀にうるさいわけではない」
「その通りだ。階級をかさに着て威張り散らすなど隊士の風上にも置けん行為。よほど目に余る態度でもない限り、いちいち口うるさく咎めるものは今の柱にはいない。安心するがいい、悲鳴嶼隊士」
「お心遣い痛み入ります」
よほど感動したのか、涙を滝のように流しながら悲鳴嶼が頭を下げる。幾度かの合同任務でこの涙脆さを知っていた狼はまたかと受け流していたが、初めて見る柱の2人は目を剥いて驚いている。
「ど、どうしたというのだ悲鳴嶼隊士!?」
「先日任務があったと聞いているが、受けた傷が痛むのか!?」

「ああ、柱ともなれば一隊士にここまで心を砕くことができるのか。なんと尊く有り難いことだ。南無阿弥陀仏」

悲鳴嶼の異変をなんとか止めようと慌てる柱の気遣いに、涙脆い悲鳴嶼は感動して更に涙を流し念仏まで唱え始める。事情を知る狼は止めても無駄だと知っているため傍観を貫き、場の混沌は深まるばかりだ。

「なんだいあんたら、なに一般隊士を泣かせてるんだい！」

混迷を極める場の空気を叱咤するように、女性の一喝が響き渡った。怒気を纏わせ歩み寄るのは、狼を超える身長を誇るまさに女傑と呼ぶにふさわしい人物だった。鬼殺隊士としては珍しく、日本刀ではなく薙刀を背負っている。

「おお畠山、お前も手伝ってくれ！　この隊士はいきなり泣き出して落ち着かんのだ！」

槇寿郎必死の訴えに、畠山はひとまず確認するつもりになったらしい。頭を掻きながら悲鳴嶼に近づくと、肩を叩いて存在を知らせる。

「おい、あたしは岩柱の畠山ヤエだ。なんでお前はそこまで泣いてるんだ？　冷静に考えれば、柱2人は隊士をいびるような性格じゃない。そっちで我関せずと突っ立ってるやつが原因なら、ごまかすために何かしらの行動はとるだろう」

「ああ、心遣いありがたい。これは柱の方々の心が素晴らしいと感じたために感動し流した涙。心配いただく必要はなく、無用の心遣いをさせてしまったことをお詫び申し上

げます」
予想外の回答に、畠山の思考が停止する。視線で柱の2人に真偽を問うが、真剣な表情で頷かれこの証言が真実であるという裏付けが返ってきただけだった。
「そ、そうかい、ならいいんだよ。無体を強いられたのかと思っただけだからね」
「ほう、これは珍しいものを見させてもらった。あの岩柱がこうも取り乱すとはな」
「豪快な部分しか見てなかったので、すごく新鮮です。あ、煉獄さんに越津さんこんにちは」
動揺を隠しきれない畠山が、突然聞こえてきた声の主へゆっくりと向き直った。初老といっていい老人と、今だ年若い少年が連れ立って歩いている。見ようによっては祖父と孫にも見える組み合わせだが、この2人もれっきとした鬼殺隊の柱だ。
「おお、影蔵に天水か。紹介しよう、岩の呼吸の隊士である悲鳴嶼と呼吸を使わない隊士である狼だ。2人とも、こちらは影柱である影蔵伸三と雨柱である天水清右エ門だ」
越津が呼び出された二人の紹介を始めてしまったため、気恥ずかしさから行動を起こそうとしていた畠山は出鼻をくじかれる形となってしまった。その場の感情で動くことができれば誤魔化しも効いただろうが、こうなってしまえば一度冷静になった頭で同じように行動することは難しい。
そうしている間に悲鳴嶼と狼が挨拶を始めてしまった。

「繰り返しとなりますが、悲鳴嶼行冥と申します。呼吸は岩を使い、丙の階級をいただいております」
「狼と申します。姓は無い故気にしないでいただきたい。呼吸が使えない故水の型とかつて修めた技を組み合わせて使っており、階級は同じく丙となります」
姓がないという狼に一同は僅かに眉を顰めるが、政府非公認の武装集団に過ぎない鬼殺隊には訳ありの者も多い。人の事情を掘り返す趣味を持つものはこの場にはおらず、またこの沈黙を狙っていたかのように屋敷から声がかけられた。
「皆様お揃いですね。
お館様の、お成りです」
静かな声であるはずのその一言は、不思議とよく響いた。屋敷に目を向ければ、最終選別を取り仕切っていた女性が襖の側に立っている。
宣言を聞いた柱たちは一斉に姿勢を正し、屋敷に向かい跪いて頭を下げる。柱たちほど馴れていない狼たちは一呼吸遅れて柱たちに倣った。目が見えないはずの悲鳴嶼も、場所と相手から同様の礼を尽くすことができたのは幸運と言えるだろう。
音もなく襖が開かれ、鬼殺隊の主である耀哉が静かに入室した。
「朝早くからよく集まってくれたね、私の可愛い剣士(こども)たち。
今回の柱合会議を一日延ばしてしまい、負担をかけてしまうね」

「お館様のお考えあってのこと、お気になさる必要などありませぬ。
遅ればせながら、お館様におかれましてもご壮健何よりです。益々のご多幸、切にお祈り申し上げます」
どこか芝居がかっているが真摯な感情が込められた影蔵の挨拶を聞き、耀哉はにっこりと笑った。
「ありがとう、影蔵。さて、昨日話したけれども今日の議題は2つだね。
行冥」
「は、はい」
突然名前を呼ばれ、悲鳴嶼は驚きの表情を浮かべたまま顔を上げる。
「きみには、岩柱である畠山ヤヱから継子にならないかとの打診が入っている。実力を伸ばす良い機会だと思うのだけれど、どうかな?」
穏やかな問いに、悲鳴嶼は内容を理解できていないようだ。
「同じ岩の呼吸を修めたヤヱなら、君をより強く導くことができると思うんだ」
「ああ、あたしが教えりゃすぐにでも甲になれるさ。まあ、岩柱の位はそう簡単に開け渡しゃしないがね!」
にっかりと笑う畠山の声を聞き、固まっていた悲鳴嶼は両の目から滝のように涙を流し始めた。

「身に余る光栄です。浅学非才の小人ではありますが、そのお話ありがたく受けさせていただきます」

泣きながらも笑みを浮かべる悲鳴嶼を見た畠山は、この涙脆さがあの誤解を生む光景を生んだのかと1人納得する。

「話が纏まったようでなにより。

それでは、もう一つの議題に移ろうか」

新しい師弟を微笑みと共に眺めていた耀哉の視線が、狼へと向けられた。

悲鳴嶼へ向けられていた視線が途切れ、その場の全員が耀哉へと向き直った音が響いた。すべての隊士にとって、継子は新たな強さへの入口であり憧れだ。盲目である身ながらもその栄光を掴んだ悲鳴嶼は喜びに震ながらも、次の議題に興味が沸き聴覚を集中させる。

「狼。君は呼吸を使うことができないらしいね。それにもかかわらず、隊士の盾となり無傷で任務を終えることができると聞いているよ。

この話に、間違いはないかい？」

「相違、ございませぬ」

悲鳴嶼も知る狼の異常性。呼吸による身体能力の強化は、鬼殺隊における必須技能

だ。鬼に迫る剛力を得てなお、鬼殺の隊士に怪我は絶えない。

その事実を知るものからすれば、呼吸の加護を持たずに一線で戦う狼は信じられない存在だ。あらぬ疑いをかけられる可能性すらあるが、耀哉の声にそのような響はない。ただの事実確認であり、狼の返答も気負いのないものだ。

「呼吸を使うことができない狼がこれを成すということは、その正体は技術ということだろう。これは確認なんだけれども、それは鍛えることができれば誰でも使うことができるものだ。違うかな?」

「素晴らしきご慧眼、事実に相違ありませぬ」

狼の返答に、さしもの柱たちもざわめいた。教えて身につく技能ということは、狼のように極端に負傷率が低い隊士を増やすことができるということだ。死傷率が高く、万年人手不足である鬼殺隊の内情を知るものとしては無視できない。

色めき立つ柱たちが一斉に動く気配は、しかし耀哉の無言の制止で表面化することはなかった。

「その返答のおかげで算段がついたよ。

狼。君がいいと言ってくれるなら、私は君にその技術を教えるための部隊を預けたいと思う」

耀哉の言葉に、会議場である庭は沈黙に包まれた。一隊士に部隊を預けるという前代

未聞の計画に、誰もが言葉を失ったのだ。
だからこそ言葉を発することができたのは、問いかけられた狼でしかなかったのはある種の必然だろう。
「お言葉ながら、それは避けるべきかと。
この身はあくまでも一隊士、位も高いとはいえ最高位ではありませぬ。お館様が引き入れたお気に入りだからこその特別扱いと、邪推する輩が出れば隊の規律にかかわりましょう。
それに試しとはいえ一部隊をいただけば、権限にもよりましょうが私兵を集めているのだと捉えかねられません。ご再考を」
間違いなく栄達の近道であろう提案を正面から蹴る狼に、一同は驚くと同時にどこか納得した。つきあいが長い者は、狼が主のために鬼殺隊で活動していると知っている。初対面の者も、纏う雰囲気から出世を望んでいないと察していたのだ。
「狼の考えもわかるのだけれど、その技術を広めないのは惜しい。
皆は、何か考えはないかな？」
耀哉が意見を求めるが、前例がない試みのため誰も悩むばかりで口を開かない。
「お館様、やはり」
狼が再考を促した直後槇寿郎が口を開いた。

「お館様、私は賛成いたします」
　この発言に、その場の全員が少なからず衝撃を受けた。隊士の前では常に微笑みを絶やさない耀哉ですら、驚きを隠すために笑みを深くしたほどだ。
「話してごらん、槇寿郎」
「はい。たしかに一隊士、しかも柱ではなく甲ですらない者に部隊を預ければ大きな反発が予測できます。しかし、それを差し引いてもこの男の技を広める価値はあるかと」
「驚いたな。おぬしは狼にあまり好意的ではなかったと思ったが」
「越津よ、私情と大局を分けられぬほど俺は幼くはないぞ。どう考えても、この男の技は鬼殺隊の大きな利となる」
　反対すると予想していた槇寿郎が賛成に回ったことにより、狼は旗色が悪くなったことを感じ取った。耀哉が発案しているため、柱は全員が消極的賛成派と見ていいだろう。つい先ほど継子となった悲鳴嶼にこの状況をひっくり返すほどの発言力があるはずがない。
「狼よ、一人では守れる範囲にも限界がある。私のためと思い、どうかその技の使い手を増やしてはくれないかな？」
　耀哉の一押しで、狼は折れた。無言で頷き、決意に満ちた表情を浮かべる。
「それでは、隠や下級階位の隊士と交流する時間をいただきたく。その中から、見込みが

ありそうなものたちを選別いたします」
「狼よ、それならばある程度実力がある隊士のほうがいいのではないか？」
「お館様はできうる限り早急な戦力の補強をお望みである様子。ならば元々戦える者を鍛えるよりも、戦えなかった者たちを実戦に出られるようにした方が効率が良いと考えまする」
「なるほど、一理あるのう」
決まるが否や、積極的な案を出し合う狼と柱の声を聴いた悲鳴嶼が、静かに拳を握り締めた。
「悔しいか？」
傍にいた畠山だけが、その様子に気がつき声をかける。
「はい。私は未だ一隊士としても未熟であり、実力もそう高くはありません。しかし、同期である狼はすでに柱と意見交換をし鬼殺隊の質向上にまで貢献しようとしている。この身も負けてはいられないと」
「腐らず超えようとする限り、人は強くなれる。あたしの師匠がよく言っていた。
同期と競い、力を伸ばしな。あたしの継子なんだからよ」
「はい。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします」
新たな柱候補の決意に、耀哉は眩しいものを見るように目を細めた。師と弟子の空間

に邪魔が入らないよう、狼を囲む柱たちへと声をかける。
「私は席を外すから、狼衆の骨子が纏まったら烏で報告をしておくれ」
「お館様、狼衆とは?」
「君が率いる部隊の名前だよ。こういったものは、わかりやすいほうがいい」
隊の名に自らの名を刻まれた狼が柱からからかわれている間に、耀哉とあまねは屋敷の奥へと下がっていく。
後に鬼殺隊の支柱として認知される部隊は、長である狼の意を介することなくその名が決定されたのだった。

刀鍛冶の里狂騒曲

小規模な宴会ができるほどの面積を持つ畳の部屋で、異様な光景が広がっていた。

「なあ、これだけの人がこれだけ頼んでるやないか。べつに害あるようなことをするわけでもないし、頷いてくれてもバチは当たらないと思うで？」

大勢のひょっとこ面を付けた男たちが、一斉に来客を伏し拝んでいるのだ。その先頭で誰よりも長く頭を下げ続けている小柄な老人の言葉に、来客である狼は唸りながら難色を示した。

なぜこのような事態となったのか。時は半日ほどさかのぼる。

狼衆の骨子を練り、ある程度の形に仕上げた狼は一つの問題に直面していた。弾きや葦名流といった技術を教える事に関しては、何も問題はない。最悪狼と打ち合い、否が応でも体に叩き込めばいい話なのだから。

問題は、忍び技を代表とした忍義手の装着を前提とした技だ。狼は失った左腕の代わりとして忍義手を使用しているが、当然五体満足の人間は義手をつけることができない。まさか義手をつけるためだけに左腕を切り落とすわけにはいかないうえ、そもそも

忍義手の予備は無いのだ。
どうせ指導するのならば自らの全てを教え込みたい狼としては、このままでは片手落ちの結果となってしまう。しばらく悩んだ末、狼は現状最も頼りになる相手へと相談を持ち掛けた。そう、今の主である産屋敷耀哉である。
一般の隊士からすればとんでもない発想だが、内定状態とはいえ一部隊を預かる長として不完全な判断をするわけにはいかない。ついでに自らが扱う忍具の複製ができないかという期待を込めた問いは、即日返事が返された。
曰く、鬼殺隊の装備を一手に引き受ける刀鍛冶の里があるとのこと。彼らの技術は非常に高度なものであり、独自に散弾銃を創り出し絡繰りを専門とする一族も所属しているらしい。そこならば義手の解析や、装備に関して何らかの案が得られるのではないかとのことだった。
願ってもない提案に、狼は次の休暇にでも里に向かうと返信し当日を待った。
そしてやってきた休日の朝、狼は指定された林で隠と落ち合い困惑していた。
「里までの地図を渡されると思ったのだが」
「刀鍛冶の里は、産屋敷邸ほどではないですが重要な拠点です。万が一にも漏れないよう、私たち担当の隠による乗り換え輸送で案内することになっています。
たとえ柱であろうとも従っていただいている規則ですので、ご了承を」

手間をかけさせることに遠慮していた狼だったが、こう言われてしまうと従わない方が迷惑なのだろうと諦めが出る。おとなしく目隠しと耳栓ををつけ隠の手により刀鍛冶の里へと輸送された狼は、到着すると顔合わせを兼ねて里長の元へと挨拶に向かったのだった。

「どうもコンニチハ。ワシこの里の長の鉄地河原鉄珍。

君が新しい援護部隊を任されたっていう狼か。お館様から話は聞いてるで。よろぴくな」

人の上に立つものとして、今まで見たことがない雰囲気の鉄地河原に狼は困惑する。彼が今まで出会ってきた指導者は、大なり小なり器に裏打ちされた口調と雰囲気を身に纏っていた。眼前の小柄な老人は相応の雰囲気はあっても、どこか好々爺のような柔らかなものであり口調も軽い。

印象と実態が噛み合わないために生まれる違和感を押さえつけ、狼は挨拶を返した。

「狼と申します。本日は装備品の相談に参りました」

相手の地位に応じ深々と頭を下げた狼が視線を上げると、ひょっとこの面越しに鉄地河原は興味深そうな目を狼の義手へと向けていた。

「へえ、ほんまに左腕は義手なんやな。しかも違和感なく動くうえに動作音すらほとんどない。

そういえば君、その義手についても相談があるらしいな。ここでの話が終わったら黒鉄車っちゅう絡繰師を紹介するわ。

代々絡繰りをいじってる一族で、絡繰り人形の整備もしてるから十分力になれると思うわ。最近ちょっと行き詰ってるらしいから、使用者の目から何か気づいたことがあれば言ってほしいし」

「使った感想程度でよいならば、喜んで」

狼からすれば、ただ使用具合を報告するだけで職人からの覚えがよくなるという断る必要がない提案だ。当然受けると鉄地河原は嬉しそうに頷いた。

「それはありがたい。黒鉄車も喜ぶわ。

で、あとはあんたが任された部隊の装備と消耗品の相談だったかな。本腰入れて話そうか」

鉄地河原が纏っていた好々爺然とした雰囲気が引き締まり、口調も硬いものへと変わった。さきほどまではあくまでも里のまとめ役であり相談相手としての姿であり、この古鉄のような雰囲気を纏った状態こそが、里でも最上位の技術を持つ長としての姿なのだろう。

「それでは、要望から」

狼も思考を戦闘時のそれに近いものへと切り替え、柱たちと相談し練り上げた骨子を

元にした装備案を提示していく。切れ味や攻撃範囲よりも、頑丈性や扱いやすさを重視した刀。咄嗟に使える装備を仕込む籠手。隊服に仕込む鉄の編服など、狼が使う道具類を参考とした装備は剣戟を重視する鬼殺隊からすれば異端ともいえる。

　それだけに新しい可能性を提示された鉄地河原は、話が進むにつれて瞳を輝かせ食い入るように資料を凝視し始めた。長の背後に控えていた側近たちも引き込まれたのか、長を窘めることも忘れて狼の説明を食い入るように聞いている。

「なるほど。さっき黒鉄車に使い手の目から話してやってくれと言ったが、まさか新しい剣士からの提案がこうも心躍らせるものになるとは思ってなかったわ。

　いままでの剣士たちとは違う考えもあって面白いし、使い方を考えれば一般隊士にも持たせられる道具が多いんやないか」

「長、これは狼殿の部隊だけで運用するにはもったいない。多くの隊士が持てるよう、こちらでも専門の集団で改良を続けるべきです」

「そうやな。さっそく人員の選別を始めようか」

「それはお待ちいただきたい」

　盛り上がる鉄地河原とそのおつきに待ったをかけたのは、ほかでもない狼だ。制止をかけられた鍛冶師たちは、資料を纏めて差し出す狼を怪訝そうに見る。

「なんで止める。君は手柄の独り占めや道具の独占を考えるような人ではないと見るか

ら、何かしらはっきりとした理由はあるのやろ。
君が持ち込んだ道具は、うまく扱えば鬼殺隊の助けになるのは間違いない。それを止めるのは相応の理由を言ってくれんと、こっちとしては納得できん」
「慣れぬ道具を急に広めてもいいことなどない。不用意に加えた鉄は刀の害になるように、慣れぬ道具が原因で鬼の前で戸惑いでもすればそれは十分死因となりえる」
狼の意見に、鍛冶師たちは自分が職人特有の盲点に陥っていたと気がついた。物を提供するだけではなく、その先にまで考えが行かなかったのだ。ただ、これは鍛冶師たちが悪いというわけではない。今まで彼らは、剣士に刀を打ち渡してきた。渡した武器や道具を相手が十全に扱えることが普通であり、新装備を支給する経験が無かったために今回狼が指摘した問題自体が発生しなかったのだから。
「それに、刀だけで戦える剣士に道具を渡すのは無駄だ。そなたらに作成を依頼する道具はお館様から命じられた部隊に持たせるもの。隊士を援護するための部隊が運用する道具を、主戦力であり援護対象である隊士が持っても意味がない。
先ほども言ったが、使いこなせない道具は害にしかならない。そなたたちの道具に対する技量や熱意は察して余りあるが、こちらも相応の理由あっての判断だ。わかっていただけるか」
狼の畳みかけるような説得に、長は僅かな沈黙の後に長いため息をついた。

「ワシも耄碌したかの。目先の技術に夢中になって、肝心の使い手のことを忘れるとは。ものをつくる人間としてやってはいかん思い込みをしてしもうた。

ありがとうな狼。今回の一件がなければ、この間違いに気がつかないまま独りよがりの刀を打ってたかもしれんわ」

心を込めた謝罪と共に頭を下げようとする長を、狼は手で制した。上に立つものが簡単に頭を下げるものではない。今の世では問題ないのかもしれないが、かつて狼が生きた戦国ではこのような行動に付け込まれて首を取られる人間が少なからずいたのだ。

そんな殺伐とした理由に気づくはずもなく、鉄地河原は自分の立場を考えての助言だと受け取った。予想していたよりも遥かに人のことを考えられる人物だったと狼への評価を大幅に上昇させ、ならばと彼なりの恩を返そうと考える。

「そうや、君は日輪刀以外にも刀を二本持ってるらしいな。この縁や、ワシが手入れをしようか？」

鉄地河原なりの誠意だったが、狼が差し出したのは彼専用に打たれた鋼鐵塚の日輪刀だけだった。残る二本は、左手側に揃っておかれている。

「遠慮しなくても。これでも里で一番の腕を持ってると自負しとる。せめて刀身だけでも見せてくれんか。君では気がつかない、職人だからこその何かが見つかるかもしれんで？」

鉄地河原の心遣いから来る言葉に、狼は無下にするものではないと楔丸を手繰り寄せた。刃を上に向け、ゆっくりと抜刀する。

それが、大きな失敗であるとは思いもせずに。

「……どうした」

なぜか固まった鉄地河原とその控えを見て、不審に思った狼が問いかける。

「お、狼。その刀をどこで……？」

「産屋敷家に仕える前の主より、授かった。それがどうかしたか」

絞り出すような鉄地河原の声に思わず答える狼だったが、続く刀鍛冶たちの行動に度肝を抜かれることとなる。

「た、頼む！　その刀、ワシに研がせてくれ！　いや、研がせてください！」

「お願いします！　それほどの刀、そう見られるものではありません！」

「これだけの刀を手入れするなど、一生に一度あるかどうか。長ならばあなたも満足できるだけの仕上がりになります！　どうか、どうかその刀の手入れを任せてください！」

縋り付かんばかりの勢いで足元に迫る三人の男たちに、狼は思わず不死切りを確保し後ずさった。このまま床においておけば、勢いのままに引き抜かれかねない。

なんとか三人を落ち着かせようと考えを巡らせる狼だったが、長たちの大声に反応し

てか護衛の鬼殺隊士たちが襖を開け放ってしまった。
「長！　いったい何が……狼さん⁉」
　床に転がった長たちを狼が刀を抜いて見下ろすという、誤解しか生まないであろう光景に隊士が思わず刀に手をかける。しかし、それよりも長の一言のほうが早かった。
「お前たち、手が空いている者を全員この部屋に集めろ！」
「え、いやしかし」
「早くせんかい！」
　あまりの迫力に、護衛のはずである隊士たちは蹴とばされるようにして部屋から駆け出していく。そして少しずつ集まってきた鍛冶師たちは、狼が持つ楔丸を見るや否や滑り込むようにして土下座の体勢に入る。
　こうして冒頭の光景は完成したのだが、鍛冶師の流入は止まらない。増え続けるひょっとこをつけて土下座する男たちは、ついに部屋をはみ出し廊下を埋め始めた。
「狼。一言いいと言ってくれれば、ワシは全身全霊を込めてその刀を手入れする。それを見れば、この男たちにも必ず勉強になる。
　それに今言っても引き渡そうとさせる嘘に聞こえるかもしれんが、その刀は素人手入れでは限界に近いほど疲労がたまってる。ここでしっかりと手を入れんと、折れはしないかもしれんが曲がりかねんで」

聞くものが聞けば刀を手入れしたいための方便とも思える説明だったが、鉄地河原の目は真剣そのものだった。瞳の輝きと鉄地河原の職人としての誇りを信じ、狼は楔丸を鞘に納めて差し出した。鉄地河原の言葉が本当ならば、彼の忠告を無視して楔丸を振るうことは九朗への裏切りに等しいと狼は考えたのだ。

「おぬしの腕と誇りを信じる。完璧な仕上がりにしてくだされ」

「おお……この鉄地河原鉄珍、一世一代の仕上がりにして見せますぞ。期待してくだされ」

差し出された楔丸を、鉄地河原は捧げるように受け取った。感動に震える声は、自分自身に誓う言葉だろう。

「里の者よ、鍛冶場に向かうぞ。そうは無い機会、見逃すなよ!」

尊敬する長の発破に、部屋に集合していた里の鍛冶師たちは屋敷が震えるほどの声量で返事を返した。

「……長殿、絡繰師の黒鉄車殿はどちらに?」

そのまま退室しようとした長の背に、狼の冷静な声が届いた。絡繰りの件をすっかり忘れていた鉄地河原の背が揺れ、手だけで傍に控えていた鬼殺隊士を呼び寄せる。

「君、黒鉄車のとこまで狼君をあんないしてあげて。彼なら作業場にいると思うから。この人が案内するから、狼君はついてって。ワシの名前出せば話は通ってるから」

そう言い残し、鉄地河原は大勢の鍛冶師たちをつれて部屋から足早に去っていった。残された隊士曰く、屋敷に造られている長専用の鍛冶場へと向かったようだ。

「それでは、こちらになります」

残された狼は隊士に先導され、里の外れに建つ家へと到着した。母屋に大きな作業場と、中々の設備を誇っている。作業場からは、何かを削るような作業音が響いていた。

「到着しました。では、私は警備がありますのでこれで」

案内を終えた隊士はそそくさと長の家へ戻っていった。狼は気にせず、物音が聞こえる作業場へと向かう。

「失礼。鉄地河原殿の紹介を受けた、狼と申す」

狼が作業場の外から声をかけると、作業音が止みすぐに一人の男性が顔を出した。

「おお、あなたが絡繰義手を使うという。

挨拶が遅れました、私は黒鉄車銅造と申します。里でも珍しい絡繰りを専門とする一族の当主です。

立ち話もなんですな。ささ、狭いですがお入りくだされ」

銅造に招き入れられた作業場は、少々小さいがよく手入れをされていた。なんともなしに小屋の中を見渡した狼は、壁に据え付けられたものに目を止める。

「これは」

「おお、それに目を付けられるとは流石ですな。
なんでも戦国時代の剣士を模して造られたという、絡繰人形です。我が一族は、この絡繰を手入れし保存することが目的の1つなのですよ」
「戦国の……」
男の説明に、狼は思わず左腕を伸ばし絡繰人形に触れようとした。その腕が、横から延びてきた腕に突然掴まれる。目をやれば、当然腕の持ち主は銅造だった。
「何を」
「素晴らしい……」
狼の抗議の声を遮るように、どこか蕩けた様な声を銅造が出した。背筋に得体のしれない寒気を感じ、思わず忍義手を引き寄せようとした狼だったが銅造が手を離さない。
「なんと精巧な絡繰りだ。人間の腕と相違ないほどの性能に、この内部構造は何かを組み入れるようになっているな。なんと無理な動作をしなければ駆動音すらしないとは、考えられない代物だ。
狼殿、これほどの義手を一体どこでお造りになられたのです⁉」
楔丸を見た長とよく似た雰囲気で詰め寄る銅造に、狼は里全体がこういった人間の集まりなのかと現実逃避気味な思考を巡らせることとなった。

職人の性

なんとか興奮が収まった黒鉄車は、狼から忍義手を受け取りその解析に挑んでいた。

「素晴らしい、それ以外に言葉が見つからないほどの逸品だ。あれほどなめらかに切断された腕の断面の筋肉が収縮する僅かな動きを感知して駆動するなど、目の前に現物があっても信じられない。人間の腕を最低限の部品で再現し、しかも切り替え式の仕込み武器を内蔵して展開できる。これほどの暗器を作ることが可能な職人がこの世界にいるとは。

わかる、わかるぞ。この義手は戦う人間の腕を徹底的に再現するために造られたものだ。改良も一度や二度ではない、何度も改造され最適を見つけるために組み上げられて来たに違いない。持てないがために武装を仕込み、新しい局面に対応するために新たな武装を仕込む余地まである。素晴らしい、この技を完全に会得できれば、我が一族の悲願を叶えるだけでなくその先までも……」

延々と独り言を呟きながら忍義手を観察する黒鉄車は、端から見れば何かに取り憑かれた職人そのものだ。これで落ち着いた方なのだから、どれだけ狂乱していたのか、そして落ち着かせた狼の苦労は察してあまりある。現に、普段表情を崩さない狼がどこと

なく疲れたような表情を浮かべている。
「複製は、できそうか」
狼の呟くような問い掛けに、黒鉄車は忍義手から目をそらさずに応える。
「職人として業腹ですが、とてもではないがこの義手は複製できません。そこそこの腕を持つ剣士の義手程度ならなんとかなりそうですが、柱のような熟練者の腕の代わりを務めるものは組み上げられません。まだね」
分解すれば再び戻せない恐れがあるため、組み上がった状態からなんとかして情報を引き出そうと四苦八苦しながらも黒鉄車の口もまた止まらない。
「ああ、まだだとも。いずれ必ず、そう、私ができなくとも我が一族が必ずやこの複製を仕上げるだろう。
いや、複製などと気弱なことは言わない。いずれこの義手を超える絡繰を生み出し発展させるのだ。我が血ならば必ず成し遂げる。成し遂げさせてみせるぞ……」
自分に言い聞かせるように執念を燃やす黒鉄車。だが、狼が聞きたいのはそこではなかった。
「義手ではなく、籠手のような形で道具を仕込む装備を作ることは可能か」
「うーむ……腕を覆うと、その分内部空間が無くなるために容量と拡張性が落ちる。この義手のように装備を付け替える細工も難しいな。

２つほど内蔵する装備を固定して、なんとか部分的に再現できるといったところです。悔しいですがね」

唸るように自らの技術の敗北を認める黒鉄車だが、その眼は爛々と輝いていた。

「まあ、見ていてください。今は最低限の再現しかできませんが、この義手を模倣することで戦闘に耐えうるだけの物は作ることができそうです。いずれそちらが求める水準を必ず満たすと約束しますよ」

「期待している。

試作品を作るまで、どれほどかかる」

見本という形で忍義手を貸し出すという話になったのだが、貸している間狼は鬼狩りの責務を果たすことができない。それゆえの問いだったが、できるだけ早く仕上げてもらいたい狼とは裏腹に黒鉄車の返事は芳しくなかった。

「申し訳ありませんが、この義手はかなり高度な技術が使われています。籠手に流用するため簡易的なものにするといっても、一朝一夕に済むものではありませんぞ。

未知の技を解明し改変しなければなりません。少なくとも半月は覚悟していただきたい。もちろん、私は寝る間も惜しんで取り掛かる所存です。鬼狩りの有力な戦力を長期間拘束するわけにはいきませんからな」

半月という時間に狼は鼻白んだが、自らが預かる予定の部隊に必要な装備だ。命を預

けるものである以上、中途半端なものを与えるわけにはいかない。
僅かな沈黙の後、狼は静かに頷いた。ここで急かしても利点はない。せいぜい粗雑な装備が作られるだけであり、粗雑品に命を預けるのならばそもそも無い方がましだろうとの判断だ。
「わかった。時間をかけるだけの価値があると期待させてもらう」
「それはお約束します。
ささ、今日はもう遅い。半月は降って沸いた休暇とでも考えて、ゆっくりと体を休めた方がいいでしょう。この里の温泉は傷や疲れによく効きます、里の者たちも、鍛冶仕事の後よく浸かって体を癒やすのです。きっと狼殿も気に入りますよ」
「では、いただこう」
黒鉄車から温泉の場所を聞いた狼は、里への長期滞在をどう耀哉へ伝えるか、文の内容を考えつつ黒鉄車の作業場を去った。
その後ろ姿を見送った黒鉄車は、小屋の中に入ると壁に背を預けてへたり込む。狼がたびたび漏らす圧に、精神が限界を迎えていたのだ。
「いやいや、流石は現鬼殺隊でも指折りの猛者だ。並の隊士など比較にならないなあれは」
自らを鼓舞するための軽口を叩きつつ、黒鉄車は作業台に安置された義手へと視線を

向ける。
「本当によく使い込まれている。」
　絡繰専門の職人である黒鉄車は、当然ながら狼よりも絡繰りについての造詣が深い。狼は自己整備機能の範囲内でしか忍義手を解体・整備することはできないのだが、黒鉄車の知識は戻すことができる範囲とはいえそれよりも一歩踏み込んだ解体・整備を可能としていた。
　故に、狼自身が気がつかない範囲の痕跡に気がつくことができる。木組みの部品に染み込み、縄の一部も染めている赤黒い何か。鍛冶仕事で生傷の絶えない環境にいる黒鉄車は、その正体へあっさりと辿り着いた。間違いなく、血の跡だ。
「鬼のものならば、日に晒せば灰になる。そもそも、首を切った時点で消えるだろう」
　赤く染まる陽光に血の跡を晒すが、一切の変化は見られない。つまり、この血の持ち主は鬼ではなく。
「だからどうした」
　黒鉄車の顔に、凄惨な笑みが浮かんだ。そう、かつて狼がどこで何をしていたかなど鬼殺隊には関係ない。今は多くの鬼を斬り、影ながら人々を護っているという事実こそが全てだ。
「お館様が鬼殺隊の不利益になることを放置するはずもない。無駄なことを考えるより

も、今はこの技術を少しでもものにしなければ」

組織の長への信頼を口にしながら、黒鉄車は一人忍義手の解析をするべく作業机へと向かった。

その様子を、一羽の烏が小屋近くの木からじっと見ていた。しばらくして黒鉄車が動かないことを確認してか、観察を終えた烏は音も立てずに刀鍛冶の里が誇る温泉方面へと飛び去った。

狼が忍義手を黒鉄車へ貸し出した翌日。彼の姿は長専用の鍛冶場前にあった。温泉を担当の鎹烏と堪能した後滞在期間が伸びたと長に伝えようとしたのだが、少なくとも日が昇るまでは楔丸の手入れを辞めないという長の主張のため連絡ができなかった。ならば日が昇った今ならば伝えられるだろうという考えから、案内を長の側付きに頼んだのだった。

近付けば、まだ日が昇ってそれほど経っていないにもかかわらず集合しているひょっとこ面の集団が見えた。大将首に群がる足軽のような光景に狼は僅かに気後れするも、案内人は異様な光景を気にもかけずに近づいていく。

「ああ、気になさることはありませんよ。昨日からこの様子なので、なれました。

ほら、楔丸の主から長に話があるそうです！」

案内人の一言に、ひょっとこたちは一斉に道を開いた。事前に練習をしていたような連携に、彼らがどれだけ楔丸を讃えているのかがわかる。

「さあ、行きましょうか」

面越しにもわかるほどの視線を注がれながら、狼は長がいる鍛治場の扉を開いた。数度扉を叩くが、返事がない。

「鉄地河原殿、失礼する」

念のため一声かけ、扉を開いた狼は視界に映った光景に言葉を失った。

「はあ……はあ……素晴らしい。なんと美しい刀や……」

荒い息を漏らしながら、探し人である鉄地河原が楔丸を至近距離で眺め刀身を撫でまわしていたのだ。利き腕らしい右手に握った木槌から手入れの途中であり、表面の微妙な変化を見定めるために刀身を撫でているというのは狼にもわかった。だが、あまりの衝撃に思わず扉を閉めてしまったことを責められる者はいないだろう。

「あの、どうかなさいましたか？」

案内人が、不思議そうに首を捻る。狼以外にも内部の光景は見えていたはずなのだが、その場の誰一人として取り乱す者がいない。

「長も昨日と比べてかなり落ち着いた様子。今なら言葉も通じると思いますが。

あまり長くかかるとこの者たちの忍耐が限界を迎えますので、お話をされるのならば

早いほうがいいかと」

案内人の視線を追って振り向くと、ひょっとこの群れは1人の例外もなく鍛冶場の扉を見つめていた。何かきっかけがあれば、鍛冶場になだれ込みかねないほどの圧力を感じる。

あれでおとなしくなったのならば昨夜はどのようなことが行われていたのか、楔丸を預けて本当に良かったのかと悩みながら、狼は扉をくぐった。

「鉄地河原殿、失礼いたす」

狼の改めての挨拶も、ひたすらに楔丸を撫でまわしながら時折木槌で表面の調整をする鉄地河原には聞こえていないようだ。

「なんと質の高い鉄。それだけやない、儂でも見たことがない金属がこんなにもぜいたくに使われとる。手入れも欠かされとらんな。愛されている良い刀や。

ああ、国宝や宝刀として博物館に飾られてもおかしくないような造りの刀が、実戦で振るわれてる。これほど贅沢なことが本当にあるとはなぁ。ええ、ええぞ。使われ直され手入れされてこそ、刀はその本質を全うし美しさを増すんや。

この楔丸を打った鍛冶師、これほどの人間がいるという事実が儂はまだ腕を上げられると教えてくれる。ええぞ、儂の腕できちんと手入れしたる。主を守り、またここに持って来たくなるようにな」

妄執と共に刀へと語りかける鉄地河原の姿に、狼はたしかに黒鉄車が所属する組織の頂点であると深く納得した。同時に今意識を自分へ向けさせることに強い危機感を抱くが、このまま時が過ぎれば廊下のひょっとこが部屋になだれ込んでくる危険性がある。

「仕方がない。失礼」

狼は覚悟を決め、ひたすらに楔丸を手入れする鉄地河原の右手を木槌ごと掴んだ。

「何をする……ああ、狼か」

一瞬凄まじい圧を放った鉄地河原だったが、狼の顔を見たとたんに圧は収まった。その機を逃す狼ではない。

「里の滞在期間について、お話が」

「なんや、楔丸の手入れはまだかかるで。狼は自分で手入れしてたみたいやけど、芯にかなりの疲労がたまってたわ。一日二日でなんとかなる内容やない」

中途半端な手入れでは手放せないと主張するように、鉄地河原は庇うように楔丸を背に回した。

「いや、義手の用事で時間がかかると言われた。半月は厄介になる」

「なんや、気にすることやないぞ。むしろこっちからお願いしたいくらいやからな。その半月を使って、しっかりと楔丸の手入れをしたる。またこの里で手入れしたいと思う

くらいにな」
「世話になる。では、これで」
「ああ、せっかくなんやからゆっくりと体休めとけ。休むのも鍛錬の内や」
楔丸と触れ合う時間が増え、目に見えて上機嫌となった鉄地河原へ一言告げて狼は退室した。廊下に居並ぶひょっとこの様子から、もう少し長居をしていれば彼らがなだれ込んできただろう。
「もうこんな時間か。おまえら、入ってきてええで」
許可の一言と共に部屋へと吸い込まれていく姿に、狼は自らの予想が間違っていなかったと確信を持った。

狼が去った鍛冶場で、大勢の刀鍛冶に囲まれながら鉄地河原は楔丸に想いを馳せる。手入れをしている間に感じ取った、この刀が持つ切れ味と強度の歪な関係に。
刀の完成度から量るに、この刀を打った刀鍛冶は間違いなくその地域最高の腕を持っていたはずだ。それほどの腕を持つ刀鍛冶が、研ぎ師としての腕を併せ持っていないはずがない。万が一研ぎ師として平凡だったとしても、鍛冶の腕に相応しい研ぎ師と?がりがあるはずなのだ。
そう、楔丸を打った刀鍛冶はあえて楔丸の切れ味を抑えたのだ。これほどの刀を相応

の腕で研げば、刀は僅かな耐久性と引き替えに絶対的な切れ味を与えられただろう。だが、それではだめなのだ。楔丸の名に込められた願い、一握の慈悲を捨ててはならぬ。この願いを叶えるには、ただ殺しに特化した刀では成し得ない何かが必要となる。

だからこそ、楔丸は殺すではなく主を守ることに特化した。斬り合いではなく受け護り続けるために身は堅く、刃は最低限にしかし刺突時に邪魔にならぬ程度には磨かれ、一息で貫けるよう先端は類を見ないほどに鋭い。

もちろん、相応の実力者が持てばそれなり以上の殺傷力を発揮するだろう。それでも、鍛冶師はこの小細工とも言える工夫を施さずにはいられなかったのだと鉄地河原には推測できた。

「その工夫を、儂の独断で崩すわけにはいかんわな」

鉄地河原の腕があれば、楔丸の強度を落とすことなく今よりも鋭い切れ味を与えることは可能だ。だが、それをしてしまえば楔丸を打った刀鍛冶だけでなく、その名に込められた想いまでもないがしろにすることになる。1人の鍛冶師として、それはしてはいけない禁忌だ。

「ほれ、今から楔丸を研ぐぞ。どういった輝きを持つのか、一瞬も目を逸らすな」

周囲の刀鍛冶たちへ注意を飛ばしつつ、鉄地河原は砥石へと向かった。これほどの日本刀を扱える幸運を、神に感謝しながら。

里への滞在期間は飛ぶように過ぎ去り、狼がついに里を去る日がやってきた。楔丸は新しく打ち直したかのような輝きで主を迎え、忍義手は細かい汚れを取り除かれ以前にもまして滑らかに駆動する。

「楔丸に忍義手、ともに素晴らしい手入れをしていただいた。感謝する」

狼の眼前には、ふらつきながらも満足げな雰囲気を放つ鉄地河原と黒鉄車が立っている。両者共に、ほとんど不眠不休で担当の道具にかかりきりだったのだ。むしろ今立っている方が不思議である。

「楔丸の汚れに歪みはとれたし、目釘に柄も手入れしておいた。何かあればすぐに来てや」

「義手内部の細かい汚れや摩耗した部品はできる限り対処しました。それと、これが例の品です」

黒鉄車が風呂敷包みを差し出す。狼が包みを解くと、いくつかの絡繰籠手が修められていた。

「今の私が持つすべての技術を詰め込みました。実際の使用感を言っていただければ、それだけ改良すると約束します」

誇らしげに胸を張る鉄地河原と黒鉄車へ、狼は深々と頭を下げた。

「次回も、よろしく頼む」
明日をも知れぬはずの剣士に、次を約束される。鬼殺隊の職人にとって、これほど嬉しいことはない。
「ああ、次は楔丸だけじゃなく日輪刀のほうも手入れしたる！」
「次はより発展した絡繰籠手をお見せしますよ。楽しみにしてくださいね！」
２人の職人の声を背に受け、狼は隠の背へと体を預ける。
突然の長期休暇が終わり、再び鬼狩りの日々が始まった。

大正コソコソ噂話集、壱

同期との鍛錬

鬼狩りをしながら新部隊の設立準備を行う狼にとって、時間は貴重品だ。数少ない空き時間も、そのほとんどが自己鍛錬に消えていく。

とはいえ、休みをまったく取ることができないわけではない。激務ではあるが、最低限の自由時間はあるのだ。

その少ない休みを使い、狼は岩柱邸を訪れていた。同期である悲鳴嶼と会うためであり、久しぶりに鍛錬をする約束をつけていたのだ。

「両者共に、構えな」

偶然休みが重なった岩柱、畠山が見守る中、現在の鬼殺隊でも指折りの猛者である狼と悲鳴嶼は向かい合い得物を構える。狼は刃を潰した刀だが、対する悲鳴嶼は斧と鉄球を鎖で繋いだ珍妙な武器を手にしていた。

「随分と、風変わりな得物だ」

「刀も薙刀もすぐに折れてしまうので斧を使っていたが、何分手数が足りない。鍛冶師に相談したところこれと同じものを渡されてな、使ってみれば存外手に馴染んだのだ。

鎖の反響音で周囲を探ることもできる」
悲鳴嶋の言葉に、狼は思わず口元を緩めた。同期でありある程度の交流があるだけに、彼が武装について悩んでいたことも知っていたのだ。
二人の会話が途切れ、緊張が場を支配する。
「はじめ！」
畠山の声に、最初に反応したのは悲鳴嶋だった。発条仕掛けのように腕が跳ね上がり、鉄球がすさまじい勢いで投擲される。間合いを完全に無視した一撃を、しかし狼は一切の動揺を浮かべずに弾き落した。地面にめり込んだ鉄球を踏み潰して固定しようと試みるも、一瞬早く悲鳴嶋により引き寄せられ回収される。
「参る」
次に動いたのは狼だった。独特な歩法であっという間に距離を詰め、刀を振り下ろす。
「岩の呼吸参ノ型、岩軀の膚」
ゴウゴウと特徴的な呼吸音と共に、悲鳴嶋は鎖を身に纏わせるように振り回すことで狼の一太刀を弾いた。同時に鎖の先端に取り付けられた斧と鉄球が狼を死角から襲うが、狼は冷静にその両方を弾き返した。
「これを凌ぐか」

「さらに、参るぞ」
決め手と考えていた一撃を凌がれた悲鳴嶼は僅かに集中を途切れさせてしまい、その隙を突いて狼は刀を鞘に納める。納刀音に眉をひそめる悲鳴嶼だったが、本能とでもいうべき予感に従い技を繰り出す。
「岩の呼吸参ノ型、岩軀の膚」
先ほどとは違い、反撃を考えない分厚みを増した鎖の壁。その壁を凄まじい衝撃が襲い、鎖の大半が弾き飛ばされた。
何が起こったのかわからない悲鳴嶼だったが、傍で見ていた畠山の目には一連の流れがはっきりと目に焼き付いていた。狼が納刀し、悲鳴嶼が身を護った次の瞬間。狼が居合から目にも留まらぬ二連撃を鎖の壁へと叩き込んだのだ。
葦名流奥義・葦名十文字。狼が技に慣れた結果、その軌跡は美しい十字を描き斬撃が重なった部位に大きな衝撃を与えた。もしも鎖の量が少なければ、この一撃で決着がついていただろうことは想像に難くない。狼としてもこの一撃で勝負をつけるつもりだったようで、珍しく驚きの表情を浮かべている。その精神的動揺を見逃す悲鳴嶼ではない。
「岩の呼吸壱ノ型、蛇紋岩・双極」
複雑な回転を伴って迫る手斧と鉄球に、狼は僅かに反応が遅れた。普段であれば容易

に弾き返す二連撃も、反応の遅れと不規則な回転が相まって先に到来した鉄球を弾くことが精いっぱいだった。次いで迫る手斧は刀で防いだが、体幹に無視できない負荷がかかってしまう。

狼が歯を食いしばる音で、悲鳴嶼はここが攻め時だと判断した。鎖を全力でたぐり寄せ、手斧と鉄球を構え狼めがけて走り出す。

対する狼も、迫る悲鳴嶼を見て刀を大上段に構えた。先ほど手斧を無理に防いだ際、刀から響いた異音を狼は聞き逃さなかったのだ。ここで攻めきらなければ、そう遠くないうちに模擬戦用の刀はその生涯を終えるだろう。

岩の呼吸特有の地鳴りのような音が大きく響き、対称的に狼の呼吸は小さいながらもその鋭さを増していく。

「岩の呼吸伍ノ型、瓦輪刑部」

未だ体幹が回復しきっていない狼に時間を与えるわけにはいかないと考えた、悲鳴嶼の強烈な先制攻撃だ。本来ならば広範囲を乱れ打つ型を、狼の周囲に密集して放つ。階級が高い隊士でも無事では済まない一手へ、狼は正面から立ち向かった。鬼であろうとも竦むであろう鉄の塊へ、大上段に構えた刀を力強く振り下ろす。

葦名一文字。優れた使い手ともなれば防いだ刀ごと人間の上半身を両断するほどの威力を持つ振り下ろしは、眼前に迫った鉄球を押し止め地面へと叩きつけた。同時にめ

り込まんばかりの踏み込みにより、狼の体幹は芯が通ったように安定する。

だが、悲鳴嶼の操る武器は未だ残っている。生きているかのような動きで鎖が宙をうねり、手斧が凄まじい勢いで狼へと迫る。刃を潰しているとはいえ、これが直撃すればただでは済まないだろう。

側面の手斧にどう対処するのか警戒する悲鳴嶼の前で、狼は信じられない行動に出た。迫る手斧を完全に無視し、悲鳴嶼へと大きく踏み込んだのだ。いつのまにか振り下ろしていたはずの刀は再び大上段に構えられ、いつでも振り下ろすことができる状態になっている。

葦名一文字、二連。常識では考えられないことだが、葦名流では全力の唐竹割りを連続で行うことが技として成立していたのだ。ただ武骨に、正面から叩き切る。反撃が来るならば、もう一度叩き割る。葦名の一文字は、二連で完全となるのだから。

踏み込みの勢いからは想像できない速度で、狼は間合いを詰める。悲鳴嶼が風切り音から狼の位置を把握したときには、すでに狼は悲鳴嶼を剣の間合いに捕らえて振り下ろしの体勢に入っていた。悲鳴嶼は咄嗟に鎖を手繰り寄せ、予測した軌跡を遮るように両手の間を通し踏ん張った。悪足掻きに近い稚拙な抵抗だったが、その行動は無駄にならなかった。

硬質で澄んだ音と共に、狼が握る刀が鎖に触れた途端折れたのだ。

「そこまで！」

武器が破損したため、これ以上の戦闘続行は不可能であると判断した畠山によって模擬戦は終了となった。張り詰めていた空気が霧散し、狼と悲鳴嶼は互いに一礼する。

「不甲斐ない」

折れた刀を見て、狼の口から自然と自らへの苦言が漏れた。刀の扱いがより巧みであれば、観の目がより鋭かったならば、体捌きがより鋭ければ。悲鳴嶼が扱う鎖斧とでも呼ぶべき得物は、斧と鉄球を繋ぐ鎖の長大さから懐がなによりの弱点だ。そこに潜り込めば悲鳴嶼とて苦戦は免れ得なかったのだろうが、狼はその挑戦の尽くを悲鳴嶼の技巧に阻まれたのだ。なによりも、得物が楔丸だったならばとまで考えそうになる自分を戒める。

声にこそ出さないが、悲鳴嶼も狼と同じように自らの不甲斐なさを嘆いていた。得物の間合いからして、悲鳴嶼が圧倒的に有利だったのだ。並の使い手であれば、悲鳴嶼が操る手斧と鉄球を捌ききることができずに被弾する。そうでなくとも、身を守るために刀で防ごうと試みてあっさりと獲物を折られるだろう。

不満を滲ませる両名を見て、立会人の畠山は笑みを溢さずにいられなかった。実力の釣り合った同期は、鬼殺隊においてこの上なく貴重だ。しかも互いを尊重し合い、互いの欠点を知る者同士が高め合えばどれほどの戦士にまで成長するのか。

「悲鳴嶼、興が乗ったから久しぶりに打ち合うよ！
狼も、遠慮しないでかかってきな。柱の実力、見せてやるさ！」
期待に胸を高鳴らせながら、疼きのままに畠山は得物である薙刀を引き寄せた。刃を潰した打ち合い用の武器なれど、放たれる気迫は実戦のそれとなんら変わりない。
それから日が暮れるまで、岩柱の屋敷では武器が打ち合う音が途切れることはなかった。

始動、狼衆

とある日の昼下がり、鬼殺隊の隊士たちが山を背負う屋敷の庭に集められていた。その場の誰一人としてなぜ自分が呼ばれたのかを把握する者はおらず、周囲をせわしなく探っている。
「剣士だけかと思ったけど、けっこう隠もいるな。合同訓練にしては人数が多いし、そもそも俺が呼ばれるはずがない」
「ああ。少しまわりと話してみたけど、集まった隊士で己(つちのと)よりも上の階級はいなかった。合同任務ならもっと上の隊士を集めるだろ。そもそも、隠がなんでこんなにいるんだ」
「最近隊士の質が落ちてるって話だし、改めて訓練でもするのか」
一部の隊士や隠が自分の予想を言い合う中、前触れ無く屋敷の襖が開かれた。その奥

から現れた人物に、集められた鬼殺隊隊士たちは驚愕した。
「皆さま、本日はお集まりくださりありがとうございます」
最終選別を取り仕切っていた、白い髪を持つ美しい女性。一部の隊士は鬼殺隊を纏める産屋敷家の奥方と知っているため、より困惑は大きい。
そんな場の混乱をよそに、産屋敷あまねは話を進める。
「この場に集められた皆さまはお館様直々の指示により新設される部隊である、狼衆への所属条件を満たしております。
狼衆は鬼を切る剣士を補助することを目的とする部隊であり、剣士よりも裏方寄りであり隠よりも前線に出る中間的な立ち位置となるでしょう。鬼の攻撃を受け、隙を生み出し、隊士が確実に鬼の首を落とすことができるようにすることが使命となります。今まで鬼を切っていた剣士の皆様からすれば、一線を外れるということになります。隠の皆様からすれば、前線に出ることになります。訓練も相応のものとなるので、環境そのものが大きく変わるでしょう。
それを厭う方を、無理に所属変更するつもりはありません。この場から去っていただければ所属は元のままであり、この申し出を断ったからといって後に鬼殺隊内部で不利になるようなこともありません。考えが変わって転属の申請があれば、狼衆への所属変更はいつでも受け付けます。しかし、狼衆となれば剣士や隠に戻ることはできません。

半刻後にこの場に残った方は、狼衆として訓練が始まります。それでは、よく考えたうえでの判断をお願いいたします」

演説を終えたあまねは、静かに屋敷の中へと消えていった。半刻経つまでは、もう出てくることはないだろう。残された隊士たちはどうすればいいのか判断に迷っているのか、ざわめきがやまない。

そんな中、一人の少年が屋敷の出口へ向けて歩き出した。

「おい、行くのかよ。もう少し考えてもいいんじゃないか？」

「考えるって何をだ。別に隠や裏方を軽く見るつもりじゃないが、せっかく呼吸の適性があって鬼を切ってるんだぜ？

悪いけど、通用する限りは剣士としていたい」

友人らしい剣士と僅かに言葉を交わしても考えは変わらなかったようで、振り返ることなく去っていった。鬼殺隊での立場が悪くなるわけではなく、後からでも受け入れるという言葉の後押しもあったのだろうその少年を皮切りに、半数ほどの剣士や隠が庭を去って行く。

しかし、もう半数は庭に残ることを選んだ。自分の実力に見切りをつけていた剣士や、鬼への憎しみが深くより鬼に近い場所で鬼殺隊に貢献したい隠たちだ。比率としては、隠の方が多いだろう。人数にして、約５０人。

そしてきっかり半刻後、あまねは背後に狼を伴って現れた。
「皆さま、決断をしていただき感謝いたします。こちらが皆さまの部隊を率いる長、狼です。
私はこれにて。では狼、後はお任せします」
「御意」
最低限の話を済ませ、あまねは狼に後を任せてこの場を去った。残された狼に怪訝な目線が集まるが、狼は意に介さず口を開く。
「部隊を任されることとなった狼だ。皆にはまずこれをつけてもらう」
そういって狼が箱を取り出す。蓋を開けると、中には何本もの赤い襟巻きが収められていた。頑丈な作りのそれを、狼は庭の隊士たちに配っていく。
「狼衆である印のようなものだ。
今は全員子犬も同然故赤の目立つ色となっているが、実力と適性に応じて組を分ける予定もある。その際はまた別の色だ。励め」
一人前にはほど遠いと言われ反発を覚えた者もいたが、それを表に出す者はいなかった。ここに残った剣士は大なり小なり自らの実力に思うところがあり、隠はそもそもの実力で剣士の最低水準に届いていない自覚があるのだ。
血とは違う暗い赤の襟巻きを全員が身につけたことを確認し、狼は新しい箱を取り出

した。

「これから、お前たちの刀は武器よりも防具としての面が強くなる。代わりにお前たちの牙となるものだ」

収められた絡繰籠手を全員に見せ、狼は箱の蓋を閉めた。ある程度の目標を見せることにより、訓練に身を入れやすくする。耀哉からの助言はある程度の効果を生むだろう。

「一定の実力を身につけた者から順に、この籠手を渡す。絡繰装備を二つ仕込むことができるから、好みの組み合わせを考えろ。

これからお前たちはこの屋敷で訓練をしながら過ごすことになる。重要拠点のように隠されているわけではないが、むやみに人を呼ばないように。

質問が無ければ、鍛錬に移る」

質問と言われても、現状未知のことが多いため何から聞いていいのかわかる者はいない。その沈黙を質問無しととらえた狼は、全員を先導して屋敷の裏山へと向かった。

狼は忍びとしての技を身につけるにあたり、そのすべてを実戦形式でその身に叩き込まれてきた。そしてせっかく訓練地が山ということもあり、鱗滝協力の下大量の罠が山のいたるところに張り巡らされている。

後に狼衆として活動する隊士は語る。訓練中、これは訓練をお題目とした体のいい隊

士の口減らしかと疑ったと。それほどの地獄が待ち受けるとは知らず、鬼殺隊の新しい力となる隊士たちは山中へと消えていった。

狼の帰郷

鬼殺隊や鬼が主に活動する関東から北の山奥で、狼は簡素な地図を片手に道なき道を進んでいた。非常に珍しいことに、この遠出は鬼殺隊とは何の関わりもないものだ。狼衆の訓練中に耀哉からもたらされた情報を聞くや否や、当面の間の訓練を自主訓練に切り替え自らも長期の休みを申請したのだ。

本来であればそのような長期の休みを鬼殺の隊士が許可されることなどまず無いのだが、事情を知る耀哉から秘密裏に1週間の休暇が狼へ与えられた。その書状が届いたその日に狼は屋敷兼訓練場を出立し、2日目の昼には現在の山中へ辿り着いていた。

常人の移動速度と比べれば、異常なまでの速度を維持する狼に疲労の色は見られない。元々の体力だけでなく、今は精神が肉体の疲労を無視するだけの活力を狼に与えているのだ。

そしてさらに半日ほど移動を続け、三日目の日の出と共に狼は目的の地へと到着した。

周囲を深い森に覆われながらも、かつて人の手が入ったその地は低木が散見される程

度に木が生える程度だった。建造物のほとんどは崩れ去りかつての面影はほとんど無いが、曲輪や石垣などは頑強に自然への抵抗を続け形を残している。

戦国の世に、葦名と呼ばれた国。その中枢である葦名城跡地を、狼は複雑な思いで眺めていた。石造りの部分がかろうじて形を留めているに過ぎない城下へ、狼は忍義手を使い軽やかに降り立つ。当時世話になった荒れ寺は、すでに竹と木々に呑まれ敷地の判別すらできない状態となっていたため立ち入りを諦めたのだ。

かつては葦名の雑兵が警戒し内府の兵が押し寄せた道も、獣道と判別がつかない状態にまで自然に飲まれている。かすかに残る痕跡を辿り、狼は葦名城の本丸まで辿り着いた。

大手門は朽ち果て、その奥に広がる本城も崩れ去っている。狼の心に、落胆は無かった。葦名と思わしき土地の情報が見つかったと聞いた時から、薄々こうなっているのだと予想はしていたのだ。狼は何かを見つけるために葦名の地へ訪れたわけではない。自分がたしかに元の時代とは異なる時代へと迷い込み、帰ることができないと確信を得るために足を運んだのだ。

忘れ去られた地で静かに朽ちるかつての戦場を眺め、狼はたしかに自分がこの時代で生きるほかないと心に刻みつけた。休暇は一週間だが、鬼狩りを再開するのは早いに越したことはない。最後に城の跡地を目に焼き付けようと見渡したところで、視界の端に

動くものを見つけた。
目を凝らすと、誰もいない空間に人間の姿が浮かび上がっていた。かつての葦名でも過去の出来事を幻影を通して見るという不思議な体験をしている狼は、興味本位でその人影に近づく。そしてその人物を判別し、驚きの声を上げた。
「エマ殿……」
一度ならず世話になった女傑の姿に、狼は思わず立ち尽くす。何かを手に持ったエマは、かつて一心の部屋が供えられた二の丸へと向かっているようだ。そのあとへ続こうとして、狼はエマの陰になっていたもう一人の幻影に気がついた。今度こそ、狼の動きが完全に止まる。
「御子……様……」
狼の記憶と寸分の狂いもない、主である九郎の姿がそこにはあった。エマと何か言葉を交わしながら、すでに失われた道を歩いている。二人の姿が木々の間に消えかけて、気を取り直した狼は急いでその後に続いた。かつての葦名では幻影と共に声も聞こえたのだが、あまりにも時が流れているためか声は聞こえない。だが、無二の主が動く姿を今一度見ることができただけでも狼にとって感無量だった。
目頭を押さえながら幻影の後を着いていくと、二の丸跡で幻影の足が止まった。いや、幻影からすれば今まさに二の丸の基礎前にいるのだろう。狼からは苔生した岩場に

しか見えない場所で、エマと九郎はなにやら作業をしている。手元を見るに何かを石の下に保存しているようだ。作業を終え立ち上がると、幻影は役割を終えたように消失した。

すぐそこに保存された何かがあるという状況で、それを見たいという誘惑に勝てる者がどれだけいるのだろうか。少なくとも、狼はその手の欲望に素直だった。幻影が立っていた場所に立ち、半分地面と同化している石を見る。仕込み斧を展開し、いくつかの石を叩き割ると石の下から朽ち果てた木箱が出てきた。

隠し場所としては単純かもしれないが、滅んだ国の崩れた石垣を掘り返す輩などそうはいない。結果として今まで残っていた箱の中身は、一冊の本だった。油紙と蜜蝋によって厳重に保護されていたため、目だった傷みは見当たらない。表紙を見れば、葦名流秘書の文字が。そして著者の名を見た狼は、目を見開くことになる。

「一心殿、か」

表紙をめくれば、どうやらかの剣聖が自分で見聞きし修め編み出した技を戯れに纏めたものらしい。これがあれば、狼に新たな牙が加わることだろう。今狼が持つ伝書を合わせて教えれば、狼衆にもこれらの技を身につける者が出るかもしれない。

僅かに踊る胸を押さえつつ、狼は書物が隠されていた場所に一礼した。僅かな時間感謝を捧げ、ほかにも何か発見があるのではと踵を返して城跡の散策を始める。

散策の途中に、狼はふと考えた。先人に習い、自らも修めた技を纏め書とするのも一興ではないかと。

大正コソコソ噂話集、弐

模擬戦闘

狼は、影柱である影蔵伸三からの手紙により影柱邸に呼び出されていた。どこからか狼と岩柱師弟が訓練を行ったことを知ったらしく、自分も独自の戦闘法をお館様に見込まれ、一部隊を任された隊士の力を見てみたいという欲求を抑えきれなくなったようだ。

狼にとって、教導は文字通り技術を体に叩き込むことに他ならない。自身の鍛錬に繋がる模擬戦の申し込みは渡りに船であり、ついでに見取り稽古になるだろうと狼衆の中でも見習い卒業程度の腕前の者たちを連れて行っても大丈夫かとの手紙を影蔵へ送った。

結果は快諾。隊士の戦力増強になるならとの返事に、狼は遠慮なく選抜した狼衆数人を連れて影柱邸の門を叩いたのだった。

「ようこそ我が屋敷へ。ふむ、そちらが見込みのある教え子か」

「狼、こんにちは」

手紙にあったとおり門をくぐり庭へ出ると、屋敷の主である影蔵と並んで何故か雨柱

である天水が手を振っていた。
「影蔵殿、何故天水殿がこの場に。模擬戦は一対一という話だったはず」
「そのつもりだったのだがな。どこからか聞きつけた天水が自分も仕合うと聞かないのだ。それが駄目ならば、せめて側で試合を見るとごねられてな。
元々次の休みにでも狼屋敷へ顔を出すつもりだったとのこと、手間が省けたと思って大目に見てやってくれんか」
申し訳なさそうな影蔵の後ろで、天水もばつが悪そうに目を逸らしている。来てしまったものは仕方が無いうえ、ただの見学ならば問題ないだろうという方向で話は纏まった。
見学者を一人増やし、模擬戦の準備が整う。
「さて狼殿、やろうか」
影蔵が構えるが、雰囲気は好々爺としか思えないほどに柔らかなままだ。だが、対面する狼に一切の油断はない。相手の一挙手一投足に気を配り、堅実な守りの姿勢を崩さない。
彼が駆け抜けた戦国の世と今の世とでは治安や生き方に大きな差が存在するが、こと鬼殺隊に関わる者においては戦国と共通の理が通用する。
年齢を重ねている者は、それだけの実力を持つのだ。

「油断せんか、嬉しいの。ほとんどの試合相手はこの身と対峙するにあたって、雰囲気と年齢から侮りを抱くのよ。おぬしにはそれがない。

さて、これ以上話しても時間の無駄よな。こちらから参るぞ」

普段通りの笑みを浮かべたまま、影蔵はゆっくりと訓練用の模造刀を抜いた。その刀身を見た狼は、眉を顰める。艶消しを施したように光を反射しない暗い灰色の刀身は、影蔵が身につけている羽織と同じ色だった。角度も計算しているのか、気を抜けば刀を見失いそうになる。

「面妖な」

「ほほ、卑怯と言う者もいる中でなかなか面白い評価をするな。とはいえ手加減はせんぞ。この刃、受けられるかな?」

自らの羽織を利用した疑似迷彩の元、影蔵は刃を振るった。日が出ているにもかかわらず目視が難しい斬撃は、もしもこれが夜であればほぼ不可視と呼べるほどの隠密性であることに疑いはない。風切り音と忍びの目、そして経験から斬撃を尽く読み切り弾き返す狼だったが、決して余裕があるわけではない。

「初めて打ち合った相手で、ここまで完璧にこの身の動きを見切ったものは狼が初よ。ならばこれは見切れるか?

影の呼吸壱ノ型、黄昏」

笑みを崩すことなく、影蔵は羽織を両手で跳ね上げた。大きく面積を広げた羽織は、太陽光を遮り不定期な影を生み出す。まるで溶け込むようにして、刀身は影の中へとその姿を消した。

僅かに目を見開いた狼目掛け、影蔵は連撃を叩き込む。並みの隊士、いや、鬼ですら対応できずに首を落とされかねないその攻撃を、狼は大きく後退することで避けた。無論ただ下がっただけでは追撃によって勝負はついていただろう。狼は影蔵の腕に注目し、その動きから斬撃の軌道を読みそのすべてを弾いたのだ。

ほとんど不可視であるはずの斬撃をすべて見切られた影蔵は悔しがる様子もなく、浮かべた笑みを崩さない。

「ほう、これを見切るか。新たな部隊を預かり鍛える者として、十分な技量を持っているか。流石はお館様のご慧眼、といったところだのう」

それどころか、賞賛の言葉を口に出す余裕すらある。

「……素晴らしき技。こちらも、お返しいたす」

距離を取り余裕を持った狼が、影蔵へと襲い掛かった。相手は柱でも上位となる力量の持ち主だけに、大技では隙を突かれる可能性が大いにありうる。それを理解し様子見と割り切ったのだろう狼の斬撃は、消極的な攻勢も相まって危なげなく影蔵に捌ききられた。

「ぬるい、が、牽制に様子見ならば十分か。なかなかどうして、堅実に攻めるなおぬし」
影蔵の軽口を、狼は黙殺した。そもそも口数が少ない狼にとって、戦闘中のお喋りなどよほどの理由がなければつきあうことはない。
「冷たいのう。話したくても話せなくなる前に、口は動かしたほうがいいぞ。
影の呼吸弐ノ型、影送り」
力を溜める僅かな沈黙の後、影蔵が今までに見ない動きで腕を振るった。間合いも離れており、普通であれば戸惑い動きを止めかねないだろう。
しかし、狼の目は異常を見逃しはしなかった。視界の端から影、いや、陰に溶け込んだ刀身が狼目掛けて襲い掛かってきていたのだ。冷静にその刃を弾くと、まるで宙を舞うようにして刀が影蔵の手へと戻る。
「惜しい惜しい。ほれ、次が行くぞ」
失敗した孫を元気つけるような雰囲気のまま、影蔵が腕を振る。陰に溶け込んだ長物が狼へと襲い掛かるが、それは刀の鞘だった。鞘へ僅かに気を取られた隙に、その反対から刀が迫る。
「ぬ、うっ」
狼の模擬刀が唸り、辛くも両の攻撃を弾き落す。そして先ほどの再現のように宙を舞う刀と鞘に、狼は種を見た。

「糸か」
「ほう、よくぞ見破った」
　影に溶け込む灰色の鋼糸が、柄頭と鯉口に繋がれていたのだ。そこまで細いものではないが、刀身や外套と同じ影に溶け込む色をしている。これを使い、遠心力を利用して間合いに囚われない斬撃を繰り出していたのだろう。
　細工は単純だが、その威力は侮れないものであると狼は読んでいた。弾いた際の手応えが、鬼の首を落としうる一撃となんら遜色なかったのだから。
「だが我が刃、避け続けることができるかな」
　朗らかな笑いと共に、遠近織り交ぜた乱撃が狼を襲った。本命である刀だけを振るっているわけではなく、囮としての鞘や引っかけるための空振りも仕込んでいる。
　狼からすれば、完全に相手の間合いで戦っている状況だ。自主的にとはいえ忍義手を使っていない以上、状況を打破するには乱撃をかいくぐり刀の間合いに影蔵を捕らえるしかない。
　狼が意を決して踏み込んだ。すでに影送りに対して目が慣れ始めているため、不意に放たれても弾く自信がある。それを悟ってか、影蔵は刀を鞘に収めた。
「そろそろだと思っていたよ。さて、次の手だ。
　影の呼吸参ノ型、鼻つまみ」

影蔵が放った呼吸で底上げされた居合は葦名道場師範、佐瀬甚助のそれに迫る速度を誇っていた。しかし、狼にとっては十分捉えられる範囲のもの。余裕をもって一撃を弾き、次いで襲い来る二本目の刃に驚愕する。狼からは見えないが、鞘の一部が展開し内部から仕込み刃を引き抜いたのだ。

真正面からの不意打ちに対しなんとかその一撃を防ぐが、狼は体勢を崩し呼吸も乱れる。その好機を逃すまいと、影蔵は一気呵成に挑みかかった。影の呼吸の型が織り交ぜられたことにより、間合いも目もほとんどが信じられない。幻を相手にしているような連撃を、しかし狼は負傷しながらもしのぎ切った。今までの切り結びで、影蔵の動きをある程度把握していたという点が大きいだろう。

「ふむ……真正面からの不意打ちを凌ぎ、我が影の呼吸を使った連撃すらもほとんどが届かぬか。

影の呼吸肆ノ型、羞明」

影蔵の呼吸音が、突然大きくその性質を変えた。環境音に掻き消されるほどに小さく静かだった呼吸から、派生元である炎の呼吸を思わせるほどに力強く猛々しいものへと。

「ゆくぞ」

そして放たれた唐竹割は、今までの搦め手を一切感じさせないものだった。変化球を

受け続けその動きに慣らされた狼に、突然放たれた剣術の基本に則った正直な剣戟はかえって受けることが難しくなってしまっている。

一度距離を取ろうと後退するも、影蔵はそれを許さず力強い踏み込みと共に追撃し間合いを開けない。影蔵が放つ袈裟懸け、逆胴、突き、右切り上げ。真っすぐな太刀筋の連撃を狼は回避する。

そして狼が逆袈裟に刀を合わせて弾いたとき、影蔵の動きが止まった。

「……いかがいたした」

不審に思った狼が問うと、影蔵が刀を鞘へ納め頭を下げる。

「我が影の呼吸は相手の不意を打ち、こちらの動きに慣れるまでに切り倒すが真髄。不意の搦め手に慣れた狼殿に正道の剣が受けられた以上、我が勝機は潰えた。その絡繰籠手を使うことなくここまで凌がれては、言い訳も効かん。

手前勝手な理由ですまないが、降参を受けてはくれないか。これ以上続けても、先ほどまでの焼き増しとなってしまう。狼殿が学び取るようなものを、これ以上は出せんのだ」

「そういうことならば、無理に続ける気はありませぬ」

あくまでも互いを高め合うための鍛錬。相手の死を目的にしていない以上、狼としてもこれ以上の試合続行を強行する理由は無かった。

２人が一礼すると、一連の手合わせを見ていた天水が駆け寄ってくる。
「影の呼吸に初めてであそこまで対応する人がいるなんて思いませんでした。機会があれば、僕とも手合わせ願います」
「時間が合えば、付き合おう」
興奮を隠しきれていない様子の天水に、狼は肯定を返した。柱との手合わせは狼も全力で挑む必要があり、その分学びも多いのだ。
「影柱の動きもだが、あの刃をすぐさま見切るとは」
「さすがは長だ。我らも見習わなくてはな」
「あの戦法を取り入れられるとは思わんか。帰ったら話し合ってみよう」
見学していた狼衆も、意見交換を始めている。自分だけでなく部隊にも良い影響があるのだから、狼としては自分から願い出たいほどであった。
この後の話し合いで、見学者を募った狼や柱同士の手合わせを定期的に開催することが決定した。報告を受けた耀哉が鬼殺隊全体にも影響があると判断し後押しした結果、この催しはある種の訓練試合として不定期ながらもなかなかの規模で開催され続けることとなる。

狼の手慰み

狼衆の訓練が終わった夜、狼は屋敷の庭を眺めていた。

先日葦名へ帰郷してからというもの、自らの拠点であるこの屋敷に言いようのない違和感を抱いていたのだ。庭を眺めながらその正体を考え、ついに答えに辿り着いた。

「鬼仏、か」

かつて葦名を駆け抜けた際、狼にとっての重要地点には必ず鬼仏が存在した。元々鬼という言葉が強さの象徴として好意的に受け止められていた葦名において、鬼仏は道祖神と同じような扱いで点在していたのだ。普段の生活でもよく目にするうえ何故か竜胤の復活地点として目覚めることが多かったため、狼にとっても馴染みの深い存在だった。

だがそれは葦名特有の風習だったらしく、狼は今の時代に目覚めてから一度も鬼仏を目にしていない。鬼という言葉を非常に忌避する鬼殺隊ではこの話題を口にすることも憚られたため、いつのまにか鬼仏についての違和感はゆっくりと摩耗していた。

そんな中、狼は葦名に帰郷し記憶の中に眠っていた鬼仏が強烈に主張を始めたのだ。一度忘れかけていた反動か、いざ思い返してしまうと見慣れたものが自分の日常に存在しないという違和感を拭うことができなくなってしまった。

本来ならば重要拠点であった荒れ寺の鬼仏を見て、あわよくば持って帰る狼の計画は寺の敷地が竹に呑まれ立ち入りすらできなかったことで頓挫。ならばと葦名中に散ら

ばっていた鬼仏を1つでいいので回収しようと葦名城散策後に時間の許す限り探し回ったのだが、内府侵攻の混乱で狼が知る鬼仏はそのすべてが破壊されてしまっていた。

ならばとる手段は1つと、在りし日の仏師に倣って鑿(のみ)と木材を用意したのだが、あいにく狼に彫りの知識はない。見よう見まねで彫ってもろくなものはできないと悩んだ末、狼は一人の男に連絡を取り、休みを利用し男の住居へと足を延ばした。

「よく来たな狼。しかし、突然彫りを教えてほしいとは何があったのだ」

「記憶にある仏像を扱う店が見当たらなく、自ら彫ろうかと」

早朝にもかかわらず快く出迎えてくれた鱗滝に簡潔に纏めた理由を話すと、天狗の面越しにでもわかるほどに呆れた様子を見せた。

「職人に発注を掛ければよいではないか。散財するような性格ではないし、給金も相応に出ているはずだぞ」

「珍しいだけでなく思い入れのあるものでして、どうせならば自らの手で仕上げたく」

「なるほどな。儂も面は手彫りだから気持ちはわかる。素人の手慰み程度の腕しかないが、それでもよいのであれば彫り方を教えよう。入りなさい」

「かたじけない」

鱗滝について家に入り、持ってきた鑿(のみ)を並べ木材と向かい合う。

「儂は面しか彫らんから、仏像の組み合わせなどはまるでわからん。そこは仏師にでも聞いてくれ。

まず出来上がりを強く想像し、木の上に筆で彫る目安を描くのだ。どうせ削ってしまうのだからと適当に描くと、後々苦労するぞ」

この一言から始まる鱗滝の彫物講座だったが、長年木を彫っているだけあって鱗滝の腕は玄人はだしだった。狼も物を覚えることは得意であるためみるみるうちに腕は向上し、日が落ちる前にはおおよそ考えた通りに木を彫ることができるようになっていた。

「ふむ、未だ粗はあるが自分で掘り出す分には十分であろう。明日も任務が入っているだろうし、そろそろ帰った方がいいぞ」

「はい。この度の指導、誠にありがとうございます。礼はまたいずれ」

「気にするなと言いたいが、お主はそのほうが気にするか。気が向いた時にでも茶を飲みに来い」

「お言葉に甘えて。この霧深い山ならではの鍛錬もできますので、教え子たちを連れて来るやもしれませぬ」

「人が多ければその分賑やかでいい。こちらも楽しみにしているぞ」

これからの予定を取り付け、狼は帰路へと足を向けた。専門の仏師に話を聞かなけれ

ばならない以上、今日明日で鬼仏が完成するわけではない。だが見慣れていたものが日常に帰ってくるという一点を支えに、狼は学びと実践を繰り返すのだ。

鬼仏が完成した未来。狼衆だけではなく屋敷を訪れた来客たち尽くに異形の仏像を気味悪がられて落ち込む狼の姿があるのだが、それはまた別のお話。

岩柱

柱との定期訓練が決定した手合わせから十数日後、狼の姿は鬼殺隊本部である産屋敷邸にあった。狼衆の訓練も軌道に乗り自室で実戦投入の日程に頭を悩ませていたところに、産屋敷邸直属の烏から緊急の招集があったのだ。訓練の合間に隠に同行させ実戦の空気を感じさせ、ついに鬼狩りに直接介入するという重要な案件だったのだが、緊急招集は鬼殺隊の今後に関わることがほとんどだ。優先度は言うまでもないだろう。

すぐさま準備を済ませ隠によって産屋敷邸へ辿り着いた狼だったが、上には上がいるものである。屋敷の庭にはすでに炎柱である煉獄槇寿郎と、影柱である影蔵伸三が雑談を交わしつつ待機していた。

「おお、狼殿か。先日の手合わせでは期待外れになってしまい申し訳ない。

ところで、何故産屋敷邸にいるのだ。これから緊急の柱合会議があるのだが」

「お館様から文が届きました。此度から、部隊の長として柱合会議に参加するようにと」

影蔵の疑念に狼が釈明を返すと、柱二人の表情が僅かに和らぐ。一般の隊士では開催すら知らされない会議の情報は、許された者以外に聞かれていいものではない。狼がその許された一人とわかり、警戒を解いたのだ。

「なるほど、たしかに立場としてはお館様直属となるのだ。柱合会議に参加してもおかしくはないか。

改めてだが、久しぶりだな狼。狼衆が実践投入の時期を図っていると聞いている。俺の任務でよければ同行させるか？」

両柱に会釈をしながら、狼は愼寿郎の申し出に内心首をかしげていた。初対面のころから、彼は狼に対して懐疑的だったのだ。もちろんそれが隊のため、謎の人物である狼を一人も警戒しないのは不用心であるとの考えからということは狼も察している。

それだけに、この提案が炎柱自らの口から出たことが意外だった。狼の沈黙から表面ながらその驚きを読み取ったらしく、愼寿郎が拗ねたように視線を逸らす。

「お前がどうであれ、お前の教えを受けた部隊はお館様肝入りであり鬼殺隊の一員だ。そもそも指導者を怪しんでいるからといって、一緒くたにその教えを受けた者たちを邪険に扱うほど狭量になった覚えはないぞ」

不器用ながら狼をそれほど嫌っていないという意思表明に、側にいた影蔵が大いに食いついた。

「素直に実力を認めていると言えば良いものを。

狼殿、こやつおぬしの活躍を聞き評価しているというのに、嫌われ役を買って出た手前今更素直に褒められずにこのようなことを言っておるのよ。

炎柱、照れ隠しに素直でないことを言うのはよいが、それに馴れんよう気をつけたほうがいい。おぬしかなり不器用な面があるから、何かでこじらせると心にも無いことしか言えなくなりそうでなぁ」

「うるさいぞ影蔵、お前は俺の爺さんか！」

「お館様が鬼殺隊の父であるように、この身は隊士皆にとって親戚の爺のような存在でありたいのでな。爺さんと呼んでもらえるならば、喜んでその呼び方を受け入れるぞ？」

飄々とした影蔵と直線的な愼寿郎とでは相性が悪いらしく、文句の尽くをいいようにあしらわれている。剣の実力ならば炎柱に軍配が上がるのだが、こと舌戦においては結果は逆転するようだ。

考えてみれば、狼衆設立の際は愼寿郎が賛成に回ったことで場の空気が大きく動いたことは確かだ。狼への悪感情もなくただ隊を考えて怪しんでいる以上、鬼殺隊のためとなる部隊がより早く稼働するよう協力しようとするのは自然だろう。

だが、現状の問題はからかう影蔵と照れ隠しに怒鳴る愼寿郎だ。このままでは、発案者本人の羞恥心からせっかくの実戦投入機会を失いかねない。内心慌てつつ、狼は言い争う2人の柱の間に割り込んだ。

「影柱様、戯れもほどほどにせねば不要な軋轢を生みますぞ。

炎柱様、ご提案ありがたく受けさせていただきます。後日お館様と協議し、日程などの目途が立ちましたら鎹烏にて連絡いたします」
「む、そこまで言われてはここまでにしておくか。鬱陶しがられるならばまだしも、嫌われてはたまらん」
「お館様の意向を曲げてまで俺の任務に同行させる必要はないぞ。まあ、そういった案もあった程度に考えておけ」
飛び込んだ狼に気勢が削がれたのか、柱たちは素直に言葉の矛を収めた。そこで、ふと両者共に違和感を覚える。
「そういえば、岩柱はどうした。普段であれば、ここまでになるまであの堅物が止めに入るだろう」
「言われてみれば、緊急招集であの畠山が遅くなるとは珍しいな。狼よ、たしかお前はあの継子……悲鳴嶋と同期である程度交流があるらしいな。師である畠山に何か急用があったなどは聞いてはいないか？」
慎寿郎の問いに、狼は黙って首を振った。たしかに、普段の柱合会議であれば岩柱師弟は二番目か三番手に産屋敷邸へと到着することが多い。三人で首を捻っていると、そこへ越津と天水が顔を出した。
「やあやあ遅くなり申し訳ない。畠山が最後とは珍しいな」

「遅くなりました。てっきり僕たちが最後かと思ってたんですけど」
意外そうな越津に首をかしげる天水も、何故畠山が遅れているのか知らないようだ。
「越津に天水。おまえたちも知らんのか」
最後のあてが外れ、眉を顰める愼寿郎の肩に影蔵は手を置いた。
「まあ、珍しいが今までなかったわけじゃない。任務が長引いているのだろう。そう心配せずとも、会議前には着くだろうさ」
「あいつが遅れるとは思わんが、どうにもな」
慰めるような影蔵も、自分の言葉を信じてはいないようだった。愼寿郎もひとまずは不安を隠すが、そわそわと落ち着きがない。
「雨柱様、いままで岩柱様が柱合会議に遅れたことは無かったのですか」
「僕が知る限り、ほとんど二番手か三番手には来ていたみたいですよ。まあ、僕は柱になってから一年少ししかたっていないし、あんまりあてにはならないですけどね。
柱最長の影蔵さんが不信がっていますし、今までなかったみたいです」
狼の疑問に答える天水も、どこか不安である様子を隠すことができていない。無言のままの越津は、眉間に深い皺を刻み込んでいる。
そしてその不安を肯定するかのように、産屋敷あまねが襖を開き姿を現した。普段のかっちりとした印象を与える着物ではなく、緩やかな服装をしている。かなり珍しいこ

となのだが、狼以外それに気がつく者はいなかった。
「皆様、急の呼び出しにもかかわらずよくぞお集まりいただきました」
「いえ、我らが敬愛するお館様からのお声なのです。逸る者こそあれ、疎む者などおりますまい」
静かに頭を下げるあまねに、一同を代表して愼寿郎が挨拶を返した。
「心遣い、ありがとうございます。
さて、皆様お揃いのようですね」
「あまね様、未だ岩柱である畠山ヤエがおりません。緊急の柱合会議に遅れるとは何か理由があるはず。もうしばらくお待ちいただけませぬか」
「その件につきましても、お館様からお話があります」
どこか感情を感じさせないまま、あまねは襖の横に控える。そして、現鬼殺隊当主である産屋敷耀哉が姿を現した。
「やあ、私のかわいい剣士(こども)たち。緊急の会議にもかかわらず、よくこれほどの早さで集まってくれたね」
「お館様におきましては、ご壮健なによりです。
失礼ながら、岩柱である畠山ヤエの不在についてお教え願えますでしょうか」
普段の愼寿郎であればまずあり得ない挨拶の省略に、柱全員が思わず愼寿郎を凝視し

た。しかし、それを咎める者はいない。皆が内心、不在の理由を察しつつもどうか否定して欲しいと願っているのだ。

「今から説明するから、落ち着いておくれ愼寿郎。

皆も薄々わかってはいるのだろうけれど、昨晩岩柱である畠山ヤヱが殉職した」

だが無情にも、彼らが抱えていた不安は敬愛する主人によって肯定されてしまった。

「それは、確かなのですか」

希望を捨てきれない天水が食い下がるが、耀哉は生半可な希望を持つことを許さない。

「残念ながら、事実だよ清右衛門。

任務先から彼女だけでなく柱付きの隠すら帰ってこなかったために新しく隠を派遣し、隠全員の遺体が確認された。ヤヱは、残念ながら腕の一部と薙刀の破片しか見つからなかったそうだよ。見つかった血の量からして、生きてはいないと」

天水の動きが止まり、うつむいた彼の足元にいくつかの染みが生まれた。

鬼殺隊は、若くして家族を殺され天涯孤独となったものが多い。そういった者たちが抱える心の傷を、畠山の面倒見の良さと優しさは癒していたのだ。彼女に母を見るものが多い中、天水は何を見ていたのだろうか。憧れか、思慕か。感情の向かう先を失った今となっては、未熟な思いがどのように花開いたのかを知る術はない。

「ヤヱの薙刀は、今の季節にもかかわらず凍りついていたとのことだよ。日の光に晒した途端、氷は最初から無かったかのように消滅したそうだ。まず間違いなく、血鬼術の類だろう。

柱を相手取りながらも隠の離脱を一人たりとも許さなかった状況から見て、ヤヱを殺したのは上弦の鬼と見て間違いないだろう。氷の血鬼術を扱う鬼と遭遇した場合、十分に警戒してほしい」

天水の様子に気がつかないふりをしつつ、耀哉は伝えるべき情報の共有を進めた。

鬼の中でもひときわ強力な１２の集団である十二鬼月。鬼の始祖たる鬼舞辻無惨に選ばれたそれらの中でも別格と呼べる６匹の鬼が、上弦と呼ばれる存在だ。

上弦については、１００年以上前に一度討伐されたきり一切の記録がない。鬼殺隊最高戦力である柱ですら、遭遇すれば命を落とし続けた結果だ。その謎の一端を解明できただけでも、畠山は柱に相応しい成果を上げたといえるだろう。

「にわかには信じがたいですが、少なくとも岩柱が不在となったことは事実。先に欠けた風柱の補充もままならないうちにもう一柱が折れ、残る柱は我ら四人のみとなってしまいました。

畠山を悼む気持ちがないわけではありませんが、早急に新たな柱を見出さねば鬼殺隊が傾きかねませんぞ」

激情を抑えるために拳を握りしめ、愼寿郎は主に進言した。たしかに、ここで故人を悼む間にさらなる痛手を受けてしまえば鬼殺隊はその勢力回復に大きな時間をかけることになるだろう。

進言を受けた耀哉は、静かな笑みと共に愼寿郎を見つめ返した。

「もっともな心配だね、愼寿郎。

でも安心して欲しい。ちょうど昨日、新しい柱となる条件を一人の隊士が満たしたんだ」

「それは良い知らせですな。ヤヱが逝った悲しみを埋めるものではないものの、慰めにはなりましょう。

して、その者は今どちらに?」

輝哉の情報に、影蔵は安心したような表情を浮かべた。柱最古参である彼は、鬼殺隊の盛衰を産屋敷家の次に肌で感じてきた男だ。彼が柱となってから、鬼殺隊は鬼に押されその力を徐々に失ってきた。先輩に当たる柱も次々に殺されてきた彼にとって、新しい柱はなによりも歓迎する事柄なのだ。

「今、襖の向こうに控えてもらっている。

入っていいよ、行冥」

「失礼いたします」

輝哉の呼び声に従い、一人の巨漢が入室した。盲いた目は白く濁り、南無阿弥陀仏が書かれた羽織を纏っている。身につけた隊服の釦の色は、柱を表す金色だ。

「前に紹介したことがあったね。昨日任務先で下弦の壱を討伐し条件を満たした、ヤヱの継子でもあった行冥だ」

狼の心に驚きはなく、ただそうかという納得が広がった。もともと実力的には柱と遜色なかっただけに、柱たちからも懸念の声は上がらない。

「このたび岩柱を拝命いたしました、悲鳴嶼行冥です。

何かと劣る身ではございますが、足手まといにはならぬよう精進いたします」

一礼し、輝哉に断ってから行冥は庭へ降り柱たちへ並んだ。居並ぶ鬼殺隊の最高戦力たちを見た輝哉は静かに微笑む。

「みんな、今は不安かもしれない。九人存在するはずの柱は五人しかおらず、継子を持つ者もいない。

でもね、私はそこまで不安というわけではないんだ。最近隊士の中から希有な才能を持った者が度々見つかるようになってきたし、鬼殺隊外から強い人間を数人引き入れることもできた。

それに、狼が育ててくれている狼衆もそろそろ動き出せるらしい。彼らが本格的に活用できれば、剣士の負担は減るだろう。

夜明け前が最も暗くなるというよ。必ず来る夜明けを目指して、私たちは歩き続けなければならない。みんな、期待しているよ」

「御意!」

輝哉の言葉に、居並ぶ一同は一斉に頭を下げた。演説としては静かな言葉は、しかし不思議と一同の心を奮い立たせている。

その後細々とした話し合いが少し挟まり、輝哉が去ると柱たちは一斉に悲鳴嶼を取り囲んだ。畠山を通じて最も交流があった、影蔵が代表して最初に声をかける。

「師である畠山の死を悼むべきか柱の就任を祝うべきか複雑だが、とにかく下弦の討伐おめでとう。いずれ柱に届く男だとは思っておったが、ここまで早いとはな。若人は儂のような老人の予想を常に超えてくれる」

感慨深げな影蔵の後ろから、愼寿郎が歩み出た。

「畠山は残念だった。よい腕の柱であり、鬼殺隊士によく気を配っていた。

そしてよくぞここまで上り詰めた。下弦の壱を昨晩切ったばかりだというのに、目立った傷はなく疲れた様子もない。

君もまた鬼殺隊になくてはならない存在になっていくだろう。俺は君のこれからを信じる」

「お二方とも、お言葉痛み入るとともに歓迎ありがとうございます。皆様からの評価を

過大なものとしないよう、これから益々の努力を重ねましょう」

そう言って、悲鳴嶼は未だ暗い顔の天水へと向き直った。

「我が師への涙、ありがとうございます。ですが、あの人は泣くよりも笑った方を好んでいました。あまり泣いていると、笑われてしまいます」

そう言いながら、悲鳴嶼は一筋だけ涙を流す。この場にいる者は、かつての柱合会議で彼の涙脆さを知っている。それだけに、流す涙が一筋ということはどれだけ悲鳴嶼が泣き出すことを堪えているのか、察することができた。

「継子に言われたら、泣いて落ち込んでるわけにも行かないですね。あの人に笑われるならまだしも、呆れられたら困る。

さて、柱就任おめでとう。もう僕より強いだろうけど、経験は負けてないから何かあったら聞いてくれると嬉しいです」

「我ら水の呼吸に類する者は新たな柱に協力を惜しまん。気軽に接してくれ」

外見上は取り繕った天水が、悲鳴嶼へと笑みを向けた。今は取り繕っているだけだろうが、そう遠くない内に立ち直ることができるだろう。精神的にも強くなければ、到底柱など務まらないのだ。それを支えるよう背後に建つ越津の支えがあれば、間違った形で強くなる心配はないだろう。

そして、悲鳴嶼は狼と向かい合った。同期としてよく関わっていた両者だったが、こ

れで共に鬼殺隊にとって替えが効かない存在となったのだ。
「柱合会議で狼殿が部隊を任されると聞いたとき、おいていかれたと感じました。やっと追いつくことができた」
「こうも早く柱になるとは、流石の腕だ。これからも、共に腕を振るおう」
簡単なやり取りだったが、そもそも口数が少ない狼からすれば十分に話した部類だ。悲鳴嶋も狼の性格は把握しており、これだけのやり取りでも十分に自分を考えてくれているとわかっているため嬉しそうに微笑んでいた。
「聞いていただきたい。私が岩柱となり屋敷をいただくことになったため、岩柱邸に残された我が師の遺品はすぐさま整理させることになります。そこで最後に師、畠山ヤヱを悼むために小規模ながら岩柱邸で食事をしようと思うのです。
参加していただければありがたいのですが、どうでしょうか」
悲鳴嶋が場の全員と言葉を交わしたのち、1つの提案を投げかけた。幸い柱合会議はあまり時間をかけずに終了したため、今から移動と食事をしても夕方には終わるだろう。そこから各任務に向かっても、計算上は十分に間に合う。
柱の中でも慕われていた畠山を偲ぶ催しに参加しない者がいるはずもなく、現役の柱が揃って移動する珍しい光景の後に鬼殺隊幹部のみ参加の非常に豪華な食事会が開催された。

追悼と歓迎を同時に行う食事会のため、賑やかなれどどこかしんみりとした雰囲気の中愼寿郎が狼へと話しかけた。最低限話はするが、どこか考え込んでいるように見えたのだ。

「狼、何をそんなに考えている？

まさかとは思うが、お前の部隊がもっと早く動き出していればなどと考えているのではあるまいな」

「いえ、そのようなことは」

当然、狼はそのような思い上がりをしてはいなかった。柱がいてなお隠まで全滅したのだ。狼が鍛えたとはいえ、援護する人間がそこに数人加わったところで結果は同じだったことだろう。

「ならば、何を考えておるのかな？

なに、この場ならばよほどの話でもない限り真に受ける者はいない。悩みがあれば、吐き出すことで多少楽にはなりましょうぞ」

影蔵の言葉に、狼は僅かな逡巡の後重い口を開いた。

「見るに、お館様の奥方は身篭もっておられた。あの場で何故お館様がそのことをお知らせにならなかったのかと」

狼の零した一言に、その場にいたほぼ全員の時が止まる。
「それならば、訃報の後に慶事を伝えても私たちが困るだろうからとおっしゃっていた。それと、気がついたときに驚かせたいともおっしゃっていたな」
一人だけ平然と茶碗を持っていた悲鳴嶼の返答を皮切りに、焦りからあまねの妊娠を見抜くことができなかった柱たちによる大騒ぎが始まった。

後日、柱たちによるあまね懐妊祝いの波状攻撃が産屋敷邸を襲うのだが、それはまた別のお話。

狭霧山の若い芽たち

悲鳴嶼の岩柱就任から数日後、狼は鱗滝からの文を受け取って狭霧山へと向かっていた。曰く、新しい弟子を鍛えているので狼にも見て欲しいとのこと。恩ある鱗滝の頼みである事に加え、狼衆の実戦投入について輝哉との協議が一段落した後で手が空いていたため狼は了承の手紙を返したのだ。

通い慣れたほどではないが、ある程度見慣れた道を歩く狼はふと狼衆の訓練を始めた当時を思い返した。訓練と鬼狩りで忙しくなる以上、狭霧山へ向かう頻度はかなり下がるだろうと当時の狼は予測していた。常に霧が立つあの地ならではの訓練もあり惜しいと考えていたのだが、蓋を開けてみれば用があったとはいえむしろ狭霧山へ訪れる頻度は上がっている。

何事もその時にならなければわからないものだと内心笑う狼の視界に、鱗滝の小屋が見えてきた。鋭烏から先に連絡を受け取ったらしく、鱗滝が出迎えに立っている。

「多忙の中、よくぞ来てくださった」

深く頭を下げる鱗滝は、狼がすでに鬼殺隊にとって柱にも匹敵する重要人物であることを知っている。元柱とはいえ、今は一線を引き裏方に回った者が礼節を尽くすのは当

然と鱗滝は考えた。

「鱗滝殿、この身からすれば師とも呼べる貴方にそのような物言いをされるのは心苦しいものがあります。どうか、元の通りに接してきただきたい」

十分な礼節を取るべきだと考えた鱗滝の態度だったが、狼にとっては不評だったようだ。どことなく不機嫌な狼の様子を見て、鱗滝は仮面の下で苦笑した。このどこか律儀で頑なな部分が無愛想でも好かれる要因なのかと思いつつ、鱗滝は深く頷く。

「わかった。不快に思わせたようで済まなかったな、狼よ。

さて、お主を呼んだのは手紙にも書いた通りだ。今儂が教えている少年たちを見てほしいと思ってな」

鱗滝の言葉に、狼は頷きながらも疑問を返した。

「理由はわかりましたが、鱗滝殿ほどの腕の持ち主が鍛えたのです。この身が口を出す余地があるとも思えませぬ。

それに、この身が修めた技は外法に近いもの。下手に教えれば、その者の太刀筋や技の精度にも影響が出ましょう。そのことは鱗滝殿もよくご存じのはず」

かつて水の呼吸を学ぶため狼が鱗滝の元で修行した際、水の呼吸の型と狼が身につけた技とで競合してしまい習得に苦労したことは鱗滝も知っているのだ。

そしてこれは鱗滝が知らないことではあるが、狼が修めた技はほぼ例外なく人間を殺

すための技だ。鬼殺に関わるとは言え、狼は前途ある若者にこの血生臭い技を教える気にはなれなかった。狼衆のように必要に駆られる以外、易々と広めてよい技ではない。

何故せっかく育てている若者に、邪魔になりかねない技を教えようとするのか。問い掛けるような狼の視線を受け、鱗滝は観念したように深く息を吐いた。

「この身の未熟を晒すことになるが、聞いてくれるか」

絞り出すような鱗滝の問いに、狼は黙って頷いた。狼の性格上、他人の恥を聞いて笑うことはないと予想がつく。更に僅かな逡巡の後、鱗滝は重い口を開いた。

「恥ずかしい話になるが、儂は自分だけの力で育てた剣士が最終選別を突破したことがないのだ」

「それは」

思わず声を上げた狼を手で制し、鱗滝は話を続ける。

「もう何人あの藤の山へと送り込んだのか。儂の見立てでは、あの山の鬼程度ならば後れをとらないだけの実力を身につけた子たちだったはずなのだ。

だが、ただの一人も帰ってこなかったのだ。狼よ、お前を除いてな。

儂は怖い。子供たちを、ただ死ぬために鍛えあの山へと送り込んでいるのではないかと思ってしまう。山の鬼に餌を投げ渡しているのではとな」

鱗滝の血を吐くような言葉を聞きながら、狼はどうしようもない違和感を拭い去るこ

とができなかった。元柱である鱗滝は確かな実力を持っており、その実力者の尺度で十分と判断された若者が力不足とは考えにくいのだ。

もちろん、実力を十全に発揮できないまま散る者もいるだろう。しかし挑んだ若者が例外なく戻ってこないとまでなれば、異常性を疑わざるを得ない。

短絡的に考えれば、藤襲山に隊士の卵では対応できないほどに強力な鬼が潜んでいると考えられるだろう。

だが狼は自らの考えに、内心で首を振った。鬼の性質上、それはあり得ないことだ。あの山に囚われた鬼は人間を1人か2人食ったか食わなかったか程度の鬼であり、空腹で共食いすらする状況に追い込まれている。そこで生き延びられるほどの鬼ならば、送り込まれた人間を全て喰らう程度の事件を起こすだろう。

数回にわたって選別突破者が存在しなければ、流石に不自然であるため鬼殺隊の上級隊士が数名送り込まれるだろう。そういった事態が発生していない以上、強力な鬼はいないと狼は内心で結論づけた。空腹状態の鬼が襲う対象を選別し、程々の被害で身を隠すなどあり得ないのだから。

「狼殿?」

考え込む狼を、鱗滝の声が引き戻した。心配そうな雰囲気の鱗滝へ身振りで大丈夫であると示し、狼は口を開いた。

「この身がどこまでお役に立つかはわかりませんが、教え子への教導、お引き受けしましょう」
狼の宣言に、鱗滝は安心したように大きな息を吐いた。
「ありがとう、世話をかける。
教え子は山の広場で体を温ませるよう言ってある。早速合流するとしよう」
緊張から解放された様子の鱗滝に先導され、狼は久方ぶりの狭霧山へと足を踏み入れた。

鬼殺隊に入隊するべく修行を積む少年にとって、鱗滝は剣士としての基礎を教える恩師というだけではなく生活の世話までしてくれる恩人でもあった。現在鱗滝の元で共に修行を重ねる錆兎と冨岡義勇も、口にこそ出さないものの同じ思いであることに違いはない。
ある日鱗滝から山の中腹で体を温めておくよう言われた2人の少年は、軽い打ち込み稽古をしながら言葉を交わし始めた。
「義勇、今日はどんな修行をすると思う?
鱗滝さんがわざわざ体を温めておけなんて、初めてだ」
「ひょっとしたら直接組み手をしてくれるのかも。鱗滝さん型は教えてくれるけど、太

刀筋なんかは個人の強みがあるってあんまり詳しく教えてくれないから。見てくれるなら嬉しいな」

「たしかに、木刀でも打ち合うならためになるだろう。早く来てくれないかな」

そう言い合いながらも、並の大人を越える剣戟を交わす少年たち。2人の打ち合いは、丁度山道を視界に入れていた義勇が山を登ってくる人影を発見したことで終わりを告げる。

「あっ、鱗滝さん」

「本当か。……誰だ、隣の人？」

喜びの表情を浮かべて振り返った錆兎は、恩師の隣に立つ見知らぬ人影を見てその表情を怪訝なものへと変えた。今までこの狭霧山で、鱗滝以外の大人を見てこなかっただけに仕方がない反応だろう。むしろ、相手に失礼かと考えてか表情の変化を最小限に抑えている分賞賛に値する。

「2人とも、十分に体を動かしたようだな」

僅かに汗を滲ませる2人を見て満足げに頷く鱗滝へ、未だ未っ子気質が抜けない義勇は素直に疑問を口に出してしまった。

「鱗滝さん、その人は？」

その眉は不安げに下がっている。狼は体躯こそ常人並みだが、硬い表情に尋常ならざ

る雰囲気を纏っているのだ。感受性の高い子供にとって、怖がるなというほうが無理があるだろう。そんな義勇の様子を見た狼は、視線を合わせるため片膝をついた。

「鱗滝殿から頼まれ、おぬしたちを鍛える狼だ。少しの間だが、よろしく頼む」

驚く義勇が反応する前に、狼は手早く自己紹介を行った。これにより鱗滝の弟子たちから見た狼は、得体の知れない恐ろしげな男から鱗滝が頼み事をするほどの強者へと変わる。

強いものが恐ろしげに見えることはよくあることであり、恐ろしく感じるのは彼我の実力差があまりにも大きいためだと納得した義勇。一方、錆兎は新しい稽古と聞いて瞳を輝かせていた。

「2人とも、納得できたようだな。この狼殿は、現鬼殺隊でも上位の実力者だ。彼から教わるものは、必ずお前たちの大きな力となるだろう。言うまでもないだろうが、真剣に臨むように。

では狼殿、あとは頼んだ」

伝えるべき事柄を簡単に纏め、鱗滝は踵を返した。

「鱗滝さんは見てくれないんですか?」

「人が指導している途中で、別の人間が口を出すべきではない。そもそも口を出す気などないが、儂が見ていては気が散るだろうと思ってな。

儂のことは気にせず、存分にもまれてこい」
錆兎の疑問に、鱗滝は理由を話す。教える側である狼も、直接の師である人間の目が合ってはやりにくいであろうとの考えもある。理由を話されては嫌とは言えず、錆兎はおとなしく引き下がった。
山を下っていく鱗滝を見送り、狼は改めて2人の少年と向かい合う。
「鱗滝殿から名は聞いている故、自己紹介は不要だ。
はじめに言っておくが、今回教えるのは呼吸でも型でもない」
錆兎の眉がつり上がった。隣に立つ義勇も、どこか不満げに表情を歪めている。
無理も無いだろう。2人からすれば、鬼殺の技とはすなわち呼吸と型だ。それ意外の技が完全に役立たずとまでは言わないが、それらを身につけたところで鬼殺に直接的に活用できるとは思えない。
年齢相応の反応を返す剣士の卵へ、狼は表情を変えず言葉を続ける。
「口で語るよりもやって見せた方が速いだろう。
2人とも、好きな水の呼吸の型で斬りかかってこい」
狼の宣言に、2人の少年は納得の表情を浮かべた。彼らの師である鱗滝も、体に動作を叩き込む指導を主としている。自分たちにとって馴染みのある方法を提示され、僅かながらではあるが緊張が緩和したようだ。

「合図はどうしますか?」
錆兎の質問に、狼は一言だけ返した。
「いつでもいい」
聞くが速いか、錆兎が地を蹴り跳びかかった。腕を交差させた彼の唇から、水の流れを連想させる静かで勢いのある呼吸音が漏れる。彼の体に刻み込まれた技の中で、基本であるが故に最も多く振るった動作。一番の得意技ではなく信を置ける技を放ったのは、少年なりに狼を強敵と認めたが故の選択だった。
そして同じ型を修めた身として、その予備動作から狼は技を見抜いた。
「水の呼吸壱ノ型、水面斬り!」
気合いの声と共に放たれた斬撃は、まさに水面のような歪みのない一撃だった。技の精度に感心しつつ、狼は危なげなくその一撃を躱す。
「義勇!」
錆兎の声に狼が視界を巡らせると、半歩退いたその先に義勇が迫っていた。気弱で引っ込み思案とて彼もまた鱗滝の教えを受けている以上、戦いに臆して動けなくなるなどといった醜態はさらさない。
「水の呼吸肆ノ型、打ち潮!」
よせては返す波のような連撃を、狼は全て手持ちの木刀で防いだ。

連携を凌がれた少年たちは、仕切り直しのため一旦距離をとる、狼の動きを脳内で再生し、付け入る隙を探しているのだろう。

「2人とも、鱗滝殿の教えをよく守っている。よい太刀筋だ」

突然褒められ、錆兎と義勇は視線を交差させる。その隙を突くことなく、狼は言葉を続けた。

「先ほどして見せたように、相手の出方を見るためにも防ぎ避ける技は重要だ。だが、それだけでは勝てない。

そこで、さらなる技を見せる。来い」

狼が、改めて構えをとった。同時に、錆兎と義勇がとっさに構えをとる。狼が身に纏う雰囲気が、先ほどまでとは明らかに変化したのだ。

「義勇、仕掛けるぞ」

「う、うん」

錆兎に続いて、義勇が飛び出した。再びの連携だが、先ほどとは選んだ型が異なった。

「水の呼吸捌ノ型、滝壷！」

錆兎は天高く跳躍し、落下の勢いを乗せて型を放った。ただでさえ水の呼吸の型の中では高い威力を持つ滝壷が、通常よりも勢いを増した状態で繰り出された。並の鬼ならば、技を受けたという自覚すらなく首が飛ぶまさに瀑布と呼べる一撃。水の呼吸を扱う

現役鬼殺隊士の中でも、これほどの威力で滝壷を放てるものは少ないだろう。
「なっ!?」
しかしその剣技は、滝の水が半ばから突き出た岩に砕かれるようにして狼に弾き返された。防がれるでも避けられるでもない未知の感覚に錆兎は驚愕し、同時に異常なまでに硬質な手応えと共に自らの体幹へ凄まじい負担がのしかかった事を感じ取る。
全集中の呼吸により身体能力を引き上げているとはいえ、錆兎は子供であり腕力も体重も相応のものでしかない。滝壷の威力を引き上げるために跳んだ宙では踏ん張りができず、剣士の卵は空中で大きく姿勢を崩すこととなる。
そんな格好の隙を見逃す狼ではない。反撃どころか姿勢制御すらままならなくなった錆兎の首へ、狼の木刀が軽く打ち込まれた。
「錆兎っ!?」
「義勇、いけ!」
思わず動揺する義勇だったが、錆兎の声に気を持ち直した。
現状で放つべき型は何か、義勇の脳内で刹那の間に膨大な取捨選択が行われる。強力な一撃も連撃も意味をなさなかった。ならば、水の呼吸最速の技で攻めるしかない。
「水の呼吸漆ノ型、雫波紋突き!」
義勇の放った最速の突きは、計算通り錆兎の影に隠れ奇襲の形をとった。狼が突きを

視認したのはすでに義勇が最後の踏切に入った段階であり、瞬く間もなくその切っ先は狼へと到達するだろう。

相手が、歴戦の忍びでなければの話だが。

「えっ!?」

通常自らに迫る刀の切っ先を見れば、避けるか防ぐかを選択するだろう。人によっては、驚愕のあまり対応できない可能性もある。

しかし、狼がとった行動はそのどれでもなかった。彼は自らに迫る木刀を視認したとたん、そちらへ向けへ大きく踏み込んだのだ。卓越した身体能力で木刀の軌道を見切った狼は、峰へと足を伸ばし木刀を思い切り踏みつぶす。

握った木刀にそんなことをされた義勇はたまったものではない。大きく体勢を崩した彼の首へ、狼の木刀が軽く当てられた。

「……すごい」

一連の流れを側で見ていた錆兎の口から、無意識に言葉が漏れた。初対面の相手の技を見切り、的確に防ぎ、見たことのない技術で反撃したのだ。並大抵の実力で成せることではない。

「これが今回教えることになる技術、弾きと見切りだ。

弾きは相手の体幹に強い負荷をかけ、見切りは突きに対して見ての通り大きな効果が

見込める。

当然、身につけるには並ではない鍛錬が必要となるが……」

意思を問おうとした狼の口は、自然と閉じられた。狼を見る少年たちの瞳が、一目でわかるほどに輝いていたからだ。錆兎はまだしも、大人しげな義勇までこれほどの意欲を見せるとは狼にとって予想外だった。

とはいえ、良い意味での予想外だ。教えられる側に意欲がある以上に、教える側としてやりやすいことはない。

「構えろ。まずは、弾きの動きを体に刻み込む」

指導に従い、錆兎と義勇は狼が持つ技の一端を手に入れるために動き始めた。鱗滝から最終選別への参加を認められるまでの約半年間、2人の少年は師匠の教えに加えて狼の鍛錬を受け隊士としては変わり種となる技術を身につけるだろう。

後日。狭霧山の地形や霧までも利用した狼衆の訓練を目にした2人の少年は狼へ向ける畏怖を一層深め、そのような人物と深い?がりがある鱗滝への畏敬の念を更に高めることとなる。

慶事の騒ぎ

陽光がさんさんと降りそそぐある日の午後に、似つかわしくない光景が広がっていた。厳重に締め切られた部屋の前で、数人の男たちが深刻な雰囲気を漂わせていたのだ。その数7人。内5人は鬼殺隊が誇る最高戦力、柱の面々である。

部屋の中からは時折苦しげな声が漏れ、そのたびに男たちは落ち着かない様子で体を揺らしている。中でも、産屋敷耀哉の様子は普段からは考えられないものだった。普段浮かべている落ち着いた微笑みは影を潜め、両の手は爪が食い込まんばかりに固く握られている。

「お館様……お気持ちは察するに余りありますが、どうか落ち着いていただきたい。確かに我々にできることなど何もありませぬが、ことが済んだのちにお館様がお体を傷つけたと知れれば皆が悲しみましょう」

見かねたのか、炎柱である煉獄槇寿郎が静かに進言した。既に数度目となる進言に、された側である耀哉が苦笑を漏らす。

「何度もすまないね、槇寿郎。以前から話は聞いていたし想定もしていたのだけれども、やはり想定と実体験とでは天と地の差があるようだ。

こんなところを見られてしまっては、皆の父親としても失格かもしれないね」
自嘲する耀哉へ、居並ぶ柱たちは慌てたように次々と声を上げる。
「そんなことはありません！　私がお館様の立場であれば、見苦しく取り乱したことでしょう！」
「儂もついぞ経験がありませんでしたが、お館様のように冷静にはいられなかったでしょうな」
「僕から見ても、お館様は十分落ち着いていらっしゃいます！」
「南無阿弥陀仏。お気になさることはありますまい。今のお館様を見苦しいなどと思う者は、人の心を持たぬのですから」
「皆、ありがとう。
でも、そろそろ静かにしようね。産婆さんに怒られてしまう」
耀哉の視線の先には、僅かに開いた襖の隙間から射殺さんばかりの目つきで男たちを睨む産婆の姿があった。男たちが身を縮こませ口を噤んだことを確認し、産婆は素早く襖を閉めて自らの仕事に戻った。
鬼気迫る様子を見た槇寿郎は、恐る恐る口を開く。
「瑠火の出産を頼んだ産婆だけかとも思っていたが、出産を前にした産婆はああも恐ろしくなるのだな」

「炎の、お主なにやらやらかしたのか？」
「初産のときに騒いでな……しこたま叱られ屋敷から叩き出された。下弦の鬼よりも恐ろしかったぞ」
苦虫を噛み潰したような槇寿郎の様子に、僅かに場の空気が緩んだ。それを感じ取り、先ほど唯一口を噤んだままだった狼が耀哉に向けて布包みを差し出した。
「狼、これは？」
「仏でございます。帰るためのものですが、気休めにはなるかと」
布の中から現れたのは、常に持ち歩かれているために角が取れ丸くなった木彫りの仏だった。それを見て、耀哉の頬が僅かに緩む。
「必ず帰る狼が持つ仏様だ、きっと御利益があるだろうね。
ありがとう、狼」
木彫りの仏を壊れ物を扱うかのように持った耀哉は、気のせいか先ほどよりも緊張が和らいだように見える。主を敬愛する柱たちは、狼へよくやったと声に出さず歓声を送った。幾人かは耀哉に見えないよう、狼へとこぶしを握って見せてまでいる。
断続的に聞こえてきていたあまねの声は聞こえなくなっている。産婆が落ち着かせたためだろうが、その静けさはかえって想像を掻き立ててしまうものだ。重苦しい空気を換えるため口を開いたのは、影柱である影蔵伸三だった。

「いやしかし、最終選別の挨拶を終えてすぐの夜明けに産気づくとは。あまね様は流石産屋敷のご家内といったところですな。この影蔵伸三、感服いたしました。我々柱一同が立ち会えるとは思っていませんでしたからな、日中であることに感謝いたしましょう」

年の功というべきか、おどけたような口調の影蔵は見事空気を換えることに成功した。

「とはいっても、最終選別の事後処理はまだ終わっていないのだけれどね。あまねに無理はさせられないから、みんなにも何か手伝ってもらうかもしれない。よろしく頼むよ」

「我ら一同、お館様の望みとあらば鬼だけでなく書類も撃滅してご覧にいれましょうぞ」

反射的に言ってのけた天水清右エ門だったが、年齢もあってか柱の中で彼が最も書類仕事を苦手としていることは言わぬが花だろう。盲目のため、書類仕事そのものができない悲鳴嶼行冥を除いての話ではあるが。

その悲鳴嶼は、先ほどからひたすらに数珠を鳴らして念仏を唱えている。小声でありあまねの無事を祈っての行為であるとわかっているためだれも止めないが、知らぬ者からすればとんだ恐怖体験となるだろう。

とはいえ、物事には限度というものがある。怒れる産婆が襲来する前に、とめておい

たほうが無難というものだ。
厳正なる視線による会話の結果、その役目は同期であり交流も多い狼のものとなった。
「悲鳴嶼、落ち着かぬのはわかるが程々にしておけ。度が過ぎあまね様に聞こえでもすれば、却って迷惑となる」
「むう……たしかに、褒められた行為ではなかった。できるだけ静かに過ごすとしよう」
自分の行為を顧み迷惑だったと素直に判断した悲鳴嶼は、数珠を懐にしまい無言で祈り始めた。口の動きを見るに、内心ではひたすらに念仏を唱えているのだろう。それを見た狼がならって祈り始め、自然とその場の全員が祈る流れとなった。出産に大きな危険が伴う時代、男ができることはその程度のことしかなかったのだ。
そうしてあまねの呻き声の中男連中が静かに祈り始めてからしばらく経ったとき、突然赤ん坊の産声が周囲に響き渡った。鍛え上げられた歴戦の剣士が相手であったにもかかわらず、真っ先に耀哉が反応したのは父の力といえるだろう。すぐさま襖の向こうへと駆け寄りたい体を意志の力で抑え込み、居並ぶ男たちをゆっくりと見渡す。
「どうやら、無事に生まれてくれたようだ。皆のおかげで私も取り乱すことなく……」
礼を言う耀哉の声を遮り、再び産声が響き渡る。最初はあっけに取られていた男たちだったが、それを理解すると浮かんでいた笑みが一層深くなる。

「お館様、どうやらお子様は双子である様子。これは一層の祝辞を……」
喜ぶ槇寿郎が発する興奮気味の声を押さえつけるようにして、みたび産声が響いた。その場の全員が思わず顔を見合わせるが、事態は待ってくれない。困惑する空間へ四度、そして五度目の産声が届いた。
「失礼いたします」
奇妙な沈黙が満ちる空間へ、襖をあけながら産婆が声をかけた。顔を出したということは、出産後の処置は無事に済んだということなのだろう。
「母子共に健康でございます。元気な赤子でございますよ」
「ありがとう、それはあなた方のおかげだ。
ところで、さきほど産声が数度聞こえたんだけれども私の子が息を詰まらせでもしたのかな?」
耀哉の推測は、常識的な観点から見れば至極当然のものだ。羊水が喉に詰まり、産声を上げられなくなる子供は多い。産婆の処置によりつまりが除かれれば、再び泣き出すために複数回の鳴き声が聞こえるのだ。
しかし、現実は時として予想もしない事実を突き付けてくるものだ。
「いえいえ、お子様方は皆元気で何の問題もなくお生まれになられました。
まあ、なんせ五つ子ですからね。聞き違いとお思いになるのも無理はないでしょう。

私も長らく産婆をしておりますが、五つ子をとりあげるのは初めてです。長生きはするものですねぇ。先生も驚いていましたよ」

産婆の言葉に、耀哉を筆頭とした男たちは思わず硬直した。常識的に考えれば、同時に生まれる子供は多くても双子までなのだ。三つ子ですら噂に聞く程度であり、子供の数が増えるほどに死産の可能性は上がる。五つ子でありながらも母子共に健康であるなど奇跡と言っていいのだ。

「ひとまず落ち着きました。さあ、お子様と奥方のところへ」

産後処置後の片付けを終えたらしく、医者が耀哉を室内へと招き入れた。当然ながら部外者である他の男たちに入室許可が出るはずがなく、耀哉は一人であまねと生まれたばかりの子供たちの顔を見に部屋へと入っていった。

「それでは、我々はこれで失礼いたします。

皆様、くれぐれも奥方と子供に無理をさせぬよう。まずありえない五つ子をお産みになられたのです、どのような影響が出るのがまるで予想がつきません。

当然、お館様へのお祝いもほどほどになさってください。あのお方もお疲れです、一人でゆっくりとお休みになる時間が必要になりますから」

それではと一礼し、藤の家に連なる医者と産婆は駆け寄ってきた隠に背負われ産屋敷邸を去っていった。

男たちはその背が見えなくなるまで静かに見送り、見えなくなった途端に影蔵が柱付きの隠を呼び寄せた。
「宴の用意だが、予定通り屋敷へ運び込むように」
「待たんか影蔵！」
「そこの隠、止まれ」
隠が走り去るよりも早く槇寿郎が影蔵を、影蔵付きの隠を越津が制止した。気づけば、隠の前ではいつの間にか移動した狼が進路を塞いでいる。瞬発力と反応速度において狼の右に出るものは、現鬼殺隊には存在しないのだ。
「隠は不問にするとして、問題はおまえだ影蔵。
先ほどの医者の話を聞いていないとは言わせない。にもかかわらず、何故お館様に負担がかかる宴をしようなどと考えた」
ふざけた回答は許さないと気迫で伝える槇寿郎に対して、影蔵は至極落ち着いた様子だ。
「あまり見くびらんでほしいな。そもそもあまね様の腹部の大きさから、かなりの難産になるだろうと予想はついていた。さすがに五つ子とまでは思わなかったがな」
「ならばなぜ！」
いきり立つ槇寿郎を手で制し、影蔵は調子を崩さずに続きを話す。

「故に宴といってもごく大人しいものを用意してある。事前にこの身の予想をお館様にもお伝えし、許可もいただいている。

酒は一人数杯、料理も胃腸に優しいもののみを集めた。おぬしらの心配する、お館様方に負担をかけるようなものではない。

冷める前に料理を用意させ、その間に説明しようと思っていたのだ。ちと考えが浅かったな、すまない」

深々と頭を下げる影蔵に、その場の全員がなんともいえない居心地の悪さを覚えた。

「いや、その……なんだ。

こっちこそすなまかった。はやとちりで言葉が荒くなってしまったな。」

「こちらの説明不足が原因だ。気にするな」

声に出して責め立てた槇寿郎が頭を下げ、影蔵が応じたことでひとまずこの場は収まった。

「では、早急に準備へと取りかかりましょう。幸い、今からならば日が沈む前に小規模宴会程度ならば開けそうですし」

天水の言葉をきっかけに、男たちは一斉に動き始めた。特に事実上妨害したことになる槇寿郎、越津、狼の動きはめざましくあっと合う間に宴会席が整えられる。ほどなくして疲れ切った隠たちから食事が届けられ、耀哉を呼びに向かった影蔵以外の男たちは

割り当てられた机で主の到着を待つ格好だ。
ほどなくして、影蔵に先導された耀哉が部屋へと足を踏み入れた。一斉に平伏した後、元々宴会の許可を得ていた影蔵が代表して口上を述べる。
「このたびは御子息御令嬢無事の出産、誠におめでとうございます。あまね様も健康であると聞き及んでおり、我ら一同胸をなで下ろしております」
「ありがとう、伸三。皆も、妻の出産に駆けつけてくれて嬉しく思うよ。
伸三が用意してくれた食事がある。私が言うのもおかしな話だけれど、皆食べておくれ。任務や稽古の合間に、これだけの時間を作るのは大変だっただろう。ここで英気を養い、また人々のために頑張ってくれると私は嬉しい。
では、乾杯」
「乾杯」
短い挨拶の後、耀哉に次いで各々が御猪口を掲げ軽く打ち合わせた。澄んだ音が響く中、御猪口に注がれていた湯割りは例外なく男たちの腹の中へと消えていく。
「いやあ、実にめでたいい」
明るい雰囲気の中、料理に手を伸ばしながら越津が上機嫌に宣う。酒に弱いため、御猪口一杯のお湯割りですでに酔いが回っているのだ。
「目下の懸念とも言えたお館様の御世継ぎがお生まれになったことに加ええ、あまね様

は五つ子を出産なされても疲労以外に異常が無いとのことではないかぁ。これもお館様の徳が呼んだ慶事と言えるだろうなぁ」
「さすがに酔いが早すぎるぞ。少し落ち着いて水でも飲め」
醜態が目に余ったため、槇寿郎が越津を取り押さえて無理やりに水を飲ませた。初めて見る水柱の姿に、耀哉以外は唖然としている。柱は多忙のため、互いに酒を飲み交わす機会などほとんどない。そのため越津の酒乱は、誰にも知られないままだったのだ。
「酒はああも人を狂わせるのか、気を付けます」
「そうしろ天水。お前は未だ若いからの、無理に飲むこともあるまい。
狼よ、どうだ一杯」
しみじみと語る天水に同意しながら、影蔵は狼へ酒を向ける。明らかに狼が酔った姿を見るためだろう。当の狼はそれを黙殺した。自分に控えろと言った矢先に他人へ酒を勧める影蔵の姿を、天水は白い目で見つめている。
「いや、これは違うぞ天水。儂は単に大人の付き合いとして勧めただけであってな」
「狼さん、酒は飲まないのですか？　皆程度は違えど、旨そうに飲んでいますが」
「おい聞け天水。無視をせんでくれ頼むから」
影蔵の訴えを受け流す天水へ、別段隠す理由でもないため狼は端的に答えた。
「万一のことがないよう、休日以外には酒精を入れぬようしているだけだ。呼吸で素早

く酒精を抜くことができぬ身故な」

語られた理由に、天水は狼が呼吸を使えないという事実を思い出した。呼吸の達人でなければ逆に不自然になるほどの実力と実績から、この事実は忘れられることが多い。

狼は酒が好きというわけではないため気にしていないが、葦名の酒豪たちが聞けば素早く酔いを覚ますことができる全集中の呼吸は垂涎の的だろう。

「仏の教えを受けた身として、私も酒精はとらない。共に他の物で喉を潤しつつ楽しもうではないか、狼よ」

酒を飲まない悲鳴嶼と狼の会話は静かではあったものの、両者共に十分楽しめる内容であったようだ。それを周囲で見ていた者たちは、狼の頬が僅かに緩んだ光景にどよめきを上げている。

そのまま宴は遅滞なく進み、各々の自制もあって醜態を曝したのは越津一人で済んだ。そして元々短い時間を予定していた宴会に、終わりの時間が訪れた。

「みんな。今日は私と妻、そして生まれてきた子供たちのためにこうして集まってくれてとても嬉しいよ。このような宴会も用意してもらえた私は果報者だ。

これからも、戦いと鍛錬の日々は続くだろう。先が見えない戦いに、疲れることもあるだろうね。でも、これだけは覚えておいてほしい。たとえ手ごたえがなくとも、何も変わっていないように感じようとも、必ず変わるものはある。

私たちは一歩一歩、鬼舞辻の首に近づいていることを忘れないでほしい。いつの日か必ず、鬼の首魁を滅ぼし心安らかな夜を手に入れることができると私は信じているよ。

みんな、その日までどうか頑張ってほしい」

休んでいるあまねを気遣い、一同が無言で礼をした。耀哉があまねの下へと向かい、それを待ってから男たちは静かに産屋敷邸から出立していく。

送り出される順番を待つ狼の下へ、一羽の烏が舞い降りた。狼にも見覚えがある、鱗滝の鋭烏だ。

「伝言、伝言。

狼、弟子ガ最終選別カラ戻ッタ。話シタイコトガアルタメ、近ク狭霧山ヘ来テクレ。

主人ハ落チ込ンデイタ。デキレバ早ク来テホシイ」

主に似て静かに伝言を残し、鋭烏は去っていった。内容を聞いた狼の眉間に、深い皺が刻まれる。

怯える隠を気にも留めず、狭霧山へ向かうための予定確認が狼の脳内で開始された。

藤襲山に潜む影

鱗滝からの呼び出しを受けた狼は、幸い緊急性の高い任務が無かったため翌々日には鱗滝の家へと向かうことができた。

狭霧山へと到着した狼を迎えた鱗滝は、普段の気丈さからは考えられないほどに憔悴していた。

「狼か。よく来てくれた」

声には張りがなく、つい先日までの活力すら失われている。

「鱗滝殿、いったい……」

「立ち話でする話ではない。そもそも、儂もすべてを聞いているわけではないのだ」

そう言いながら、鱗滝は狼を小屋へと先導した。入ってすぐ、狼も寝室として使用していた部屋に広がっていた光景に、思わず目を見開く。

「こ、れは」

そこには感情が抜け落ちた顔の義勇と、今にも死にそうなほどに思いつめた表情を浮かべた錆兎が布団で横になっていたのだ。

「見ての通りだ狼。儂とおぬしが共に教えた子供たちは選別から帰っては来られたのだ

が、無事とは言えん。話を聞いてやってはくれんか」
弱々しく告げる鱗滝は、自分がいては話しにくいだろうと小屋を離れた。鱗滝の気配が小屋から十分に遠ざかったことを確認した狼は、錆兎の前にしゃがみこむ。
「狼、さん」
「あの山でなにがあった」
弱々しい錆兎の声に重ねるようにして、狼は問いを投げた。
返答は沈黙。未熟ながらも確かな実力に裏打ちされた、どこか不敵な笑みを浮かべることすらしないままに錆兎は俯いたままだ。錆兎の心情の変化を敏感に感じ取り、すぐさま励ましていたはずの義勇も動く気配すらない。
「最後に見た時点で、２人の実力はあの山の鬼程度にどうこうされるものではなかった。実戦での恐れなど、たかがしれている。ならば考えられるのは、よほど想定外の何かがあの山でおきているのだろう。
もう一度聞く。あの山で、なにがあった。いや、なにが潜んでいる」
重ねて問いかける狼へ、錆兎は油の切れた人形のような動きで布団から起き上がり正面から向き合った。
「……この身の不甲斐なさを曝すことになります。言い訳にも聞こえますでしょうが、それでもよいのであれば話しましょう」

「かまわん、話せ」
一切の間を置かない返答に、錆兎は力なく微笑む。そして、最終選別で何が起こったのかを語り始めた。

藤の花が狂い咲く山の中腹に、錆兎と義勇を含めた隊士志望の若者たちが集まり女性の話を聞いていた。
「それでは、いってらっしゃいませ」
簡潔な説明を終えた女性が優雅にお辞儀をしたことを確認し、錆兎と義勇は山中へと駆け込む。藤の花が途切れるやいなや、数匹の鬼が我先にと肉を求め襲いかかってきた。並の人間ならば即座に肉塊と化す襲撃にも、鬼殺の隊士となるべく訓練を重ねた若者にとっては大した脅威とはなりえない。
「水の呼吸参ノ型、流流舞い」
「水の呼吸肆ノ型、打ち潮」
義勇の清流のような剣筋が、錆兎の荒々しい波のような斬撃が瞬時に鬼を解体し、急所である首を断たれた鬼たちは自身に何が起きたのかを把握する間もなく灰と化した。
一呼吸おいて刀を収めようとした錆兎の視界に、木陰から跳躍した鬼の姿が映った。狙いは無事襲撃を切り抜け気が緩んでいる義勇。獲物を狩った瞬間である、最も気が抜

ける瞬間をつかれたのだ。
　鬼の襲撃に対処したため義勇と錆兎の距離は離れており、庇うには遠すぎる。未だ刀を収めていない義勇に対し、錆兎は咄嗟に叫んだ。
「義勇、弾け！」
　錆兎と義勇が師と仰ぐ鱗滝が、ある日突然連れてきた鬼殺の隊士。無駄を嫌う鱗滝がわざわざ呼んだだけはあり、未熟な錆兎から見ても尋常ならざる実力を秘めた男に叩き込まれたその技は、期待通りの効果を発揮した。粗雑な鬼の一撃を、義勇は体に染みついた動きで弾き飛ばしたのだ。
「水の呼吸壱ノ型、水面斬り」
　予想外の反撃に大きく体勢を崩した鬼目掛け振るわれた錆兎の一刀は、一切の障害無しにその首を切り落とした。
「さ、びと、ありがとう」
「倒した後だからこそ気を抜くな。狼さんにも言われただろう」
　油断なく周囲を警戒しつつ、錆兎は義勇が立ち上がるのを待った。先ほどの戦闘音を聞きつけ、すぐにでも飢えた鬼が押し寄せてくるだろうことは想像に難くない。
　本来であれば避けるべきその状況は、錆兎と義勇にとってはむしろ願ってもいない機会だった。

「修行の成果がこれでわかるな。
義勇、遅れるなよ」
「錆兎、あまり無茶はしないように。怪我をすれば鱗滝さんが悲しむよ」
「それか怒って修行のやり直しかもな。
流石にそれは嫌だから、引き際は見極めるさ！」
好戦的な笑みと共に、錆兎は真っ先に飛び出してきた鬼の首を力強く切り落とした。
それをきっかけに、木々の間から溢れるようにして鬼が押し寄せてくる。
この状況を作り上げた錆兎がいまさら怯えるような胆力であるはずがなく、すでに引くことができない状態でなお弱音を吐くほど義勇は軟弱者ではない。
２人の剣士は互いに背を預け、闇から襲い来る人食い鬼へと刃を向けた。

異変が起きたのは、選別最後の夜だった。この７日間飛び回るようにして山を駆け巡り鬼を狩ってきた錆兎と義勇にとって、山に起きた異常事態を感じ取ることはあまりに容易く、だからこそ２人の体に緊張が奔る。
「さ、錆兎。今日の山は……」
「ああ、静かすぎる。鬼はまだしも、夜に動く獣の気配すら全くしないぞ。
義勇、警戒を切らせるなよ。何かが起きている」

この選別の最中途切れることのなかった夜の森のざわめきが、パタリと止んでいるのだ。

鬼が殺気を飛ばしても、それに反応した鳥や獣が周囲から逃げ去ることはあってもその範囲外ではたいした騒ぎにはならない。鬼が首を狩られれば、森の住人は何事もなかったかのように元の縄張りへ戻るのだ。

しかし、この夜は違った。黒く染まった山中は静まり返り、どれだけ歩いても虫の声すらしない。

「錆兎、いくらなんでもおかしいよ。これだけ動いても虫一匹出ないなんて。鬼に襲われているときならわかるけど、今俺たちは歩いているだけだよ？」

義勇の疑問を受けた錆兎は、突然立ち止まり顎に手を当てた。

「錆兎？」

相棒の行動に疑問を覚えた義勇が首をかしげるが、思考を走らせることを優先した友は答えない。

しばしの沈黙を挟み、錆兎はゆっくりと周囲を見渡した。

「そうだ、考えれば簡単なことだ。

義勇、俺たちが鬼と闘っていた時、周囲から獣や虫は逃げていたな？」

錆兎が発した突然の確認に、義勇は訝しみながら頷く。

「それで、戦いが終われば……つまり殺気の元が消えれば生き物は戻ってきていた」
「錆兎、さっきから何が言いたいの？」
「簡単な話だ。この夜の間、俺たちはずっと鬼の殺気に晒されていたんだ」
義勇の問いかけに簡潔に答えた錆兎は、刀を構えながら声を張り上げた。
「どこにいるのか知らないが、気づいた以上不意打ちが通じるとは思わないことだ！」
夜の闇に錆兎の声が吸い込まれる。わずかな沈黙の後、先ほどまでの静けさが嘘のように木々がざわめきはじめた。
「さ、錆兎？」
「義勇、構えろ。俺たちをつけ回していたやつが来るぞ」
慌てて日輪刀を構えた義勇の眼前で、一本の木があっさりとへし折られた。そうして生まれた隙間から、異形の鬼が姿を現す。
その身長は人を2人縦に重ねたよりもなお高く、3人の人間を超えるほどの体躯を誇る。そしてなによりも目につくのは、全身を覆うかのような無数の手だった。見方によっては手の鎧を身につけたような姿は、錆兎と義勇が今まで見てきた鬼の中で最も人から外れた姿だ。
「おい小僧、今は明治何年だ？」
突然、鬼が問いを投げかけてきた。しかし鬼の異様に怯んだ義勇は声を出せず、錆兎

はそもそも相手にせず一呼吸の内に斬りかかる。
完全な不意打ちだったそれは、しかし手の鎧を切り落としただけで躱されてしまった。錆兎は忌々しげに舌を打ち、手鬼はどこか愉快そうに目を細める。
「なんだ、ずいぶんと礼儀知らずなガキだなぁ。教え子に躾すらまともにできないありさまとは、鱗滝も耄碌したか？」
その一言に、錆兎と義勇の時間が止まる。
「貴様、なぜ鱗滝さんの名前を知っている！」
錆兎の詰問に、手鬼はクスクスと邪悪な笑みを溢しながら答えた。
「知っているに決まっているだろう。俺をこの藤の牢獄に閉じ込めたのはあいつなんだからな」
その一言に、錆兎と義勇は眉を顰めた。彼らが知る限り、鱗滝は何年も前に鬼殺隊の隊士を引退しているのだ。にもかかわらず、眼前の鬼は鱗滝がまるで現役のように話している。
「選別に使われる鬼は共食いと参加者の斬首で数年と生きられないはずだ。第一、おまえのような異形の鬼を捕らえるわけがない。
言え、どんな手を使ってこの選別会場に入り込んだ」
錆兎が刀を突きつけ問いただすが、手鬼は意に介さない。

「俺がここに閉じ込められたとき、まだ俺は鬼になりたてだったからな。この藤の牢獄で、俺は鱗滝への恨みを支えに生き延びてきたんだよ。

この長い間４０人は喰ったなぁガキ共を。で、お前たち２人で１２だ」

人を食い殺したという事実を平然と語る手鬼へ錆兎は怒りに刀を震わせ、義勇は恐怖から息を呑む。そんな２人へ、異形の鬼は見せつけるように指を差し出した。

「おまえたち鱗滝の弟子たちはちゃんと別に覚えてるからな。あいつは育てた子供たちが一人も帰ってこないのにまだ弟子を育て続けてる。

みんな俺が喰ってやるって決めているんだ。俺をこんなところに閉じこめたあいつにはふさわしいだろう。その狐面が俺に教えてくれるんだ、あの憎たらしい鱗滝の弟子だと」

手鬼の言葉を最後まで聞くことなく、錆兎は地を蹴って跳びだした。背後から聞こえる義勇の声を無視し、ただまっすぐに手鬼の首めがけて突き進む。

当然手鬼が黙って首を差し出すはずがなく、歪み膨れ上がった体のあちこちから腕を伸ばして錆兎を捕らえんとする。

「水の呼吸拾の型、生々流転！」

この状況下で錆兎が選択したのは、水の呼吸における奥の手とも呼べる型だった。まるで独楽のように体を回転させながら、若き剣士は迫る手を次々と切り落としていく。

そしてその斬撃は、回転を重ねるごとに鋭さと威力を増すのだ。

飛沫を上げ舞い踊る龍のような型に、流石の手鬼も気圧される。そしてそれを誤魔化すように手を増やすが、錆兎は一切の例外なくそれらを切り捨て手鬼本体へと肉薄した。

それは、並の隊士から見ても勝ちは揺るがないと確信する光景だったであろう。しかし、共に修練を積んだ義勇は錆兎めがけて弾かれたように走り出した。彼の目には、錆兎の生々流転がひどく歪んでいる様子がはっきりと捉えられていたのだ。

7日に及ぶ選別で、2人の剣士は毎日鬼を斬り続けた。日が昇るたびに刀の手入れを繰り返してはいたが、限られた道具しかない山中で素人が行う手入れにどれだけの効果が見込めるというのか。

そして生々流転は強力な型だが、威力に比例して刀にかかる負担も大きい。ただでさえ痛んだ刀身を、高威力の斬撃を連続した直後、しかも怒りのあまり乱れた太刀筋で岩とも例えられる鬼の首へと叩きつければどうなるか。答えは、とてもわかりやすい結末として訪れた。

「――えっ？」

必殺の意思と共に鬼の首へと叩きつけられた瞬間、澄んだ音と共に、錆兎の日輪刀はその生涯を終えたのだ。

眼前の光景を受け入れられずに硬直する錆兎。命を拾った手鬼は、その致命的な隙を逃さなかった。伸ばされきった利き腕ではなく、死角でありどうしても優先対象から外れてしまう錆兎の左腕を、手鬼の巨大な肉塊が包み込む。警戒の外から伸ばされた腕に、ただでさえ思考停止している錆兎は一切の反応ができなかった。

ぱきり、と、枯れ枝が折れるような音が響いた。

「あ、があああぁぁぁあっ！」

「ああ、いい声だ」

辺り一面に響き渡る錆兎の悲鳴に気を良くした手鬼は、左腕を包む肉塊にさらなる力を込める。同時に抵抗手段を奪うため残りの四肢へと手を伸ばすが、その目論見が達されることはなかった。

「水の呼吸肆ノ型、打ち潮！」

錆兎の腕を握りつぶしていた肉塊ごと、その身に迫る手が一息の内に切り落とされたのだ。驚きのあまり動きが乱れた手鬼から錆兎を助け出したのは、助けが間に合わなかった悔しさを滲ませた義勇だった。

出会ったときの怯えた様子から未熟者と侮り、彼を意識の外へと追いやっていた手鬼は、太刀筋と身のこなしから警戒を高め一度伸ばしていた手を戻した。

わずかな沈黙の後、手鬼が先手を取った。背後に怪我人を庇った状態では、どうして

も動きが限られる。下手に出を伺うよりも圧殺した方が手早いとの判断だったが、その判断が大きな失敗だった。

「な、にい!?」

義勇に襲いかかった手が、すべて弾き返されたのだ。はじめに襲いかかった腕が壁となり、後から襲う手が押し止められた。しかも手が重なり合ってしまい、手鬼の視界から義勇と錆兎が完全に覆い隠されてしまったのだ。

「水の呼吸陸ノ型、ねじれ渦!」

さらに義勇は重なり合った手を渦の動きで切り落とし、手鬼に操られないよう処理をした。手鬼からすれば、自らの肉を利用した塀が築かれたようなものだ。

このまま縮こまられていては余計な知恵を働かせられると考え、手鬼は単純な手段に訴えることに決めた。上へ伸ばされた一本の腕へ、次々と手が絡み合っていく。

「浅知恵だったなぁ。さあ、おまえたちも俺が喰ってやる!」

巨木と見まがうまでに太く膨れあがった手の集合塊を、手鬼は全力で振り下ろした。地面が揺れるほどの一撃に満足げな笑みを浮かべた手鬼だったが、すぐさま首をかしげることとなる。

血の匂いがしないのだ。ならば生きているのかと耳を澄ませると、鬼の聴覚は予想外の音を聞き取った。

「逃げた、だと？」

遠ざかる足音へと手鬼が視界を巡らせれば、木々の隙間に錆兎を背負って一心不乱に走り去る義勇の姿があった。

今まで、鱗滝の弟子達を話題にして激高しない子狐は1人としていなかった。誰もが我を忘れ、鍛えた技を乱すほどの怒りを滾らせて襲いかかってきたのだ。

その経験からすればありえない光景に、手鬼の思考が止まる。その間にも義勇の姿は遠ざかり続け、我に返ったときにはすでに手が届かない距離が互いの間を隔てていた。

「待て、戻ってこい！　狐ええええぇぇぇ！」

手鬼はその巨体から想像できるように、移動が苦手だ。接近戦から中距離戦ならば伸縮自在の手で対応できるものの、逃げる相手を仕留める手段は無数の手による投擲以外に持たない。それも、木々の間を縫うように逃げる義勇には意味を成さないだろう。いくら感情を爆発させ吠えようとも、手鬼は朝焼けが迫る森の中で地団駄を踏むことしかできなかった。

話の補足を義勇に求めながらの説明を終えた錆兎は、布団に隠れていた左腕を狼の眼前に曝け出した。手鬼に握り潰されたそれは、生々しい傷跡を表面に刻みながら酷く歪んでしまっている。

「日が昇るまで義勇に助けられ、集合場所で処置は受けました。しかし、今の医術ではこれが限界だと。剣士となるのは難しいと、告げられました。

義勇に助けられておきながら、情けない話です」

迅速な処置に加えて呼吸を修めた者特有の回復力が合わさった結果、肘関節を辛うじて動かすことができる程度にまで負傷の影響を押さえ込むことができたのだ。しかしその動作は非常に緩慢であり、関節の可動域もひどく狭まってしまっている。掴まれた部分が肘を中心としていたため、指の稼働にはそれほど大きな影響がない点が救いといえるだろう。

このありさまでは、錆兎が言うように剣士への復帰は絶望的と言える。

「……ごめん、錆兎。俺が、もっと早く鬼の腕を切り落とせていたら。鬼に怯えないで、錆兎と立ち向かっていけば！」

今まで沈黙を貫いていた義勇が、血を吐くような表情で感情を吐露した。

「義勇、それは違う。お前があの鬼の手を切ってくれたから、俺はこうしてここにいられるんだ。お前がいなければ、たぶんあの鬼に殺されてた。

ありがとう、義勇。あの鬼は俺たちよりも強かった。そんな相手に俺を助けるために立ち向かってくれたんだ。すごい男だよ、お前は」

錆兎の励ましにも、義勇は顔を上げない。重苦しい空気の中、錆兎は狼へと強い視線

を向けた。
「狼さん、お願いです。藤襲山に潜む、鱗滝さんの弟子を襲う鬼を切ってください。鬼殺隊のお館様直属の隊を率いるあなたなら、許可を得て山狩りができるはずです」
「錆兎、なにを言って！」
「義勇、聞いてくれ。あの鬼は選別に参加する隊士の卵がどうにかできる相手じゃない。本当なら俺たち鱗滝さんの門下生でどうにかしたいさ。でも、そんなこだわりに弟弟子をつき合わせるのか？
　そもそも、選別に存在してはいけない存在がいる時点で俺たちはそれを報告する必要がある。鬼殺の隊士なら、勝てない相手に背を向けてでも情報を持ち帰る義務があるだろう。これを報告すれば、選別に相応しくない鬼として遠くないうちにあの鬼は首を切られる。なら俺は、せめて鱗滝さんと縁の深い狼さんに切ってほしいと思う。
　狼さん。勝手なお願いですが、聞き入れていただけないでしょうか」
　動揺する義勇を一括し、錆兎は深々と頭を下げた。それを見た義勇も、慌てて頭を下げる。
　僅かな沈黙の後、狼が口を開いた。
「すぐにお館様に願い出てみよう。この身とて鱗滝殿に世話になった。それに、逆恨みから人を喰らう鬼を見逃す義理はない。狼衆の訓練と願えば、無下にはされないだろ

う。
今は傷を癒すことだ」
そう言い残し、狼は腰を上げ踵を返した。振り返る様子すら見せず、小屋の扉に手をかける。
「あの、ありがとうございます！」
「おこがましいですが、気をつけてください！」
錆兎と義勇の声を背に受け、狼は鱗滝の家を後にした。

山狩りと手鬼

錆兎と義勇が最終選別会場である藤襲山に潜む異形の鬼について話した翌日、狼の姿は鬼殺隊本部である産屋敷邸の広間にあった。

向かい合うのは、鬼殺隊最高責任者である産屋敷耀哉。報告書を受け取った彼は、その日のうちに狼へと招集をかけたのだ。

「それで、この報告書に間違いはないんだね？」

「はい。伝聞にはなりますが、聞き出したこと自体には相違ありませぬ。

また、あの場で斯様な偽りを述べる利は薄いかと」

狼からの報告を聞いた耀哉は、悲しそうに眉を顰めた。

「私たちの管理不足で、ずいぶんと子供たちになったかもしれない者を死なせてしまっていたようだね」

「これは山の管理をしていた担当者、ひいては鬼の執念を甘く見ていた我々皆の責。御館様に帰するものではありませぬ」

狼がとっさに声を挙げるが、耀哉は首を横に振った。

「いや、負担がかかるとはいえ藤襲山を定期的に一掃していればすんだ話だよ。特に弟

子を殺され続けた鱗滝へは償いのしようもないね」
「それは、此度を機にかの鬼を討滅することが最大の心遣いかと。
逆恨みによって弟子を殺され続けたなどと、残酷な真実を伝えることはありませぬ。かの御仁は、必ず自らを責めます故」
「それで、今回の嘆願なんだね」
耀哉はそう言いながら、手元にあった文を拾い上げる。
「訓練として、狼衆を使って山狩りをするか。
実践へと送り出す前に最後の確認をしたいとのことだね」
「はい。すでに錆兎と義勇によってほとんどの鬼が切られた今、藤襲山はほどよい危険地帯となっております。
潜む鬼を見つけ出し、それを伝達する訓練には丁度よいかと」
既に狼衆は十分な訓練を終えており、上澄みたちは実戦に耐えうる水準に達していると狼は判断していた。残る問題はどう実戦に関わらせるかだったのだが、そこでこの問題が発覚したことは僥倖であると言えるだろう。
狼にとっての恩人である鱗滝に加え、教え子になる義勇と錆兎に害を与えた存在を確実に仕留めたいという考えを心の底に隠して狼は主に決断を迫った。
「事は秘密裏に行い、なお心配ならばこの身単独で動きまする。

ご判断を」
わずかな沈黙の後、耀哉は確固たる意思を内包した声で厳かに告げた。
「狼及び狼衆に命じる。藤襲山に潜む異形の鬼を見つけ出し、討滅しなさい」
「御意」
主の命に、狼は深く頭を垂れた。

狼衆の訓練場である狼屋敷の庭に、赤襟巻きを身につけた若者たちが集合していた。全員が訓練で一定の評価を得た者たちであり、実戦に投入される時期も間近であると仲間内で噂されている精鋭たちだ。
頭目である狼からの招集により訓練場の庭へと集められた彼らは、集められた理由について各々の予想を語り合っていた。
「いよいよ実戦へ移るのではないか？
この面々ならば、剣士の補佐は十分に務まるだろう」
「いや、その前段階の訓練をはじめるんじゃないか？」
「初めて招集されたときに言っていた、組み分けの実施だと思っているのだが」
口々に自らの予想を語り合う狼衆だったが、突然一斉に口を閉じると一列に整列した。彼らの視線の先には、いつのまにか狼が立っていた。

一見柱合会議に似た光景だったが、誰も跪かず挨拶もしない。これは狼が徹底して言い聞かせたことであり、あくまでも部隊の長である狼へ必要以上の敬意は必要なく、頭を垂れ言葉を奏上するのは主である産屋敷家にのみするべきという考えからだった。

故に余計な前置きはなく、狼は今回招集をかけた理由について話し始めた。

「狼衆に対する最終試験が決定した。三日後、藤襲山に潜む異形の鬼を狩り出す」

その一言に集められた狼衆は、態度に出さずとも昂揚した。いよいよ、長く苦しい鍛錬の成果を見せるときが来たのだと。

「試験の結果により、実戦への投入も検討される。

よって、この場にいる者たちを中心とした組み分けを行う」

狼が背後においてあった箱から、色とりどりの襟巻きを取り出し一人一人に手渡した。

よく見ると、襟巻きの端に金の飾り模様が施されている。

「金飾りは、組の頭目である証だ。各々手裏剣打ち、体術、弾きにおいて一角の実力を持つことは把握している。

明日の朝までに、自らと同じ技を得意とする者を数名選びこの場に集まれ。

その場において組み分けを正式なものとし、藤襲山へ向かう」

そう言い残し、狼は屋敷の中へと去っていった。彼の姿が完全に見えなくなると、残

された若者……狼衆の精鋭たちは、自分の部下を集めるため足早に鍛錬場へと向かった。

夜の帳に覆われた藤襲山で、手鬼は憎しみを滾らせていた。怨敵である鱗滝門下生の鏖殺を己に誓ったにもかかわらず、2人も同時に取り逃がした自らへの苛立ちだ。

負の感情に支配されていた手鬼だったが、周囲への警戒を切らすことはなかった。この山では他の鬼に襲われることなど珍しくない。しかも今は、自分の存在が鬼殺隊に露呈しているのだ。いつ山狩りが行われてもおかしくない状況下で警戒を切らす愚行を犯すならば、この鬼は異形と化す前に他の鬼の腹の中だっただろう。

そんな手鬼の視界に、1つの違和感が出現した。最終選別が行われていないにもかかわらず、木々の隙間に人影が見えるのだ。

相手が鬼でないことは気配でわかるのだが、手鬼はそれが人間なのか判断ができなかった。闇の中で生きる鬼の目は、僅かな月明かりの元でも問題なく周囲を窺うことができる。しかし、問題の人影は気がついたときにはすでに手鬼の視界内に存在したのだ。

一切の接近を察知できなかった人影に対し、手鬼は警戒を強める。すると、人影は口元に手をやった。そして夜鷹にも似た音を立てる。鳥笛だ。

「貴様っ！」

咄嗟に手鬼は孤独に立つ影へと襲い掛かった。錆兎が大半を切ったとはいえ、未だこの山には多くの鬼が蔓延っている。その環境下で自然音に紛れるとはいえ音を立てる危険を冒す理由は1つ、何かしらの合図だ。

伸ばされた鬼の腕は、無数の手が絡み合い即座にその間合いを伸ばす。常人ならば反応する間もなく捕らわれるであろう魔手を、影はなんと宙へと舞い上がることでいとも容易く回避した。

「な……縄だと⁉」

見れば、影はいつのまにか上へと伸ばされた腕から縄を木々の枝へと引っ掛けていた。それを腕で手繰り、まるで宙を飛ぶように移動している。

予想外の行動に動揺した手鬼の耳に、夜鷹に似た笛の音が入り込んだ。眼前の影からではなく、山のどこかからだ。先ほど目の前の影が吹いていた物と同質の音色に、手鬼はいやでも状況を理解した。山に潜む影の仲間に、現在の居場所が発覚したのだ。

もはや一刻の猶予もない。宙でこちらを伺う影に背を向け、手鬼は躊躇うことなく逃走を選択した。この状況で集まってくる者が、隊士希望の若者よりも未熟であるはずがない。正規の隊士を数名相手にして生き残ることができると考えるほど、手鬼は自らを高く見積もってはいない。

手鬼は長く暮らしているだけあり、山中の洞窟や窪みは全て把握している。それらを利用した逃走経路を考える鬼の前に、突然新しい影が出現した。

「そこをどけ！」

逃走を現在の最優先に位置づけている手鬼は、眼前の影へ拳を繰り出した。殺すことができればそのまま走り去り、避けられても道は開ける。

そんな手鬼の算段は、叩きつけたはずの手が奇妙な手応えと共に逸らされたことで瓦解した。困惑の中で数度乱打するものの、そのすべてが逸らされる。

「なんだきさ――」

苛立ちのあまり集中が乱れた隙を突き、手鬼の両目めがけて飛来物が襲いかかった。手裏剣だ。時代遅れの遺物に対し、咄嗟に顔を動かし眼球への直撃を避ける。怒りのままに軌道の先を睨めば、樹上にまた新しい影が。

そこで手鬼は気がついた。焦りと怒りのあまり聞き落としていたが、自分を中心に無数の鳥笛が鳴り響いている。

ぴいぴい、ちちちち、ぴぴぴ、ちいちい、ぴい。

異質だ。この影たちはあまりにも異質だった。鬼殺の隊士であれば、もっと積極的に首めがけて斬りかかってくる。しかしこの影たちは、進路を塞ぐ以外に手鬼に近づこうとしない。ある影は鷹のように宙を舞い、進路先には鼠のように小柄な影が出現する。

少し離れた場所には、ぽつりぽつりと孤独な影が手鬼を包囲するように現れては消えを繰り返していた。

そしてそのすべてが、一切の音を立てない。

「なんだ、おまえたちはなんなんだ！」

手鬼は腕を天に掲げる。手が腕へと絡みつき巨大な肉柱へと育つ様を見ながらも、影たちは一切の妨害を仕掛けなかった。まるで手鬼がその場から動かなければいいとでも言うように。

「消え去れ！」

そして倒木のように成長した腕が、周囲一帯を剛力のままに薙ぎ払った。木々が、轟音と共にへし折られ、草花が風圧に煽られる。

破壊が過ぎ去った後に、しかし影らは変わらずそこにあった。単調な一撃で払われる影など無いと言うかのような佇まいに、手鬼は恐怖と苛立ちが限界に達する。

そして影らを睨みつけ、怒鳴り散らそうと口を開いた。

「貴様ら、あ？」

怒りに眩んだ視界いっぱいに、赤黒い刃が飛び込んできた。その切っ先は吸い込まれるように手鬼の眉間を貫き、後頭部までをあっさりと貫通する。

手鬼の体から急激に力が抜けていく。思考が散り散りになる中、その目は近くの草叢

から立ち上がる最後の影を捕らえた。
音も気配もなく潜む影。その正体を最後まで知らぬまま、手鬼の意識は永遠の闇へと沈んでいく。薄れゆく意識の中で何かを掴もうと必死に手を伸ばすが、その手は宙を掴むばかりだ。力が抜けた腕が地面に落ち、異形と成り果てた鬼は崩れ去らぬ死を迎えた。

手鬼が動かなくなったことを確認し、草叢に潜んでいた影……狼は不死切りを鞘に収めた。眉間を一突きされた手鬼の目を瞑らせ、鳥笛を鳴らす。
その音を合図に手鬼を包囲していた影……狼衆は狼の元へと音もなく集合する。
「藍は周囲の警戒、茶と黒は鬼の死骸を運搬せよ。
各組頭は此度の動きを思い返し、問題点を洗い出せ」
狼が襟巻きの色ごとに役割を伝えると、狼衆は無言で指示通り動き始めた。彼らの内心は、実戦の興奮と自らの頭に対する畏敬の念が渦巻いている。
訓練で狼の強さと技量は身に染みて知っていたものの、この場の誰もに察知されず鬼の眼前に忍び寄り一撃で絶命させたのだ。得物の異質さも相まって、ある種の畏れが生じたのは避けられない事柄だった。
異様な静けさが続き、しばらくして手鬼の死骸に対する運搬準備が終わった旨を伝え

る鳥笛が鳴った。狼は無言で踵を返し、狼衆もそれに続く。
藤襲山の山狩りは、ほとんど無音のままにその全行程が終了した。

狭霧山の麓にある鱗滝の小屋に狼が向かったのは、山狩りから数日が経ってからのことだった。藤襲山における行動内容の精査や狼衆の正式な任務への同行などを決める会議が重なった結果と考えれば、驚くべき速度だ。
山狩りが終わった日に鎹鴉を送ったため、結果自体は鱗滝門下生に伝わっている。にもかかわらず狼が多忙を押して足を向けているのは、２人の少年へと直接話すべきとの判断からだった。
通い慣れた道を抜けると、すでに鱗滝が小屋の前で待っていた。鳥は、問題なく伝言を伝えていたようだ。
「よく来たな、狼。２人は小屋の中だ。動ける程度には回復しているが、まだ無理はさせられない。
儂に聞かせにくい話もあるだろう。山の修練場にいるから、事が済めば鳥で知らせてくれ」
「度々かたじけない。できる限り早く収まるよう、手短に済ませます」
狼の礼を、鱗滝は手で制した。

「いや、教え子のためにわざわざ足を運んでくれたのだ。あの子たちはおぬしに懐いているようだし、ゆっくりと話してやってくれ」

鱗滝はどこか寂しそうな声音だ。

それも仕方のないことだろう。自らの弟子が、自分ではなく彼らの兄弟子に近しい存在を頼ったのだ。

この場で何かを伝えても逆効果だと悟った狼は、去っていく鱗滝の背に無言で一礼し小屋へと入った。

小屋の中では、幾分か顔色が良くなった2人の少年が布団の中から狼を見ていた。未だ回復しきっていない2人を心配した鱗滝に、無理矢理押し込まれたようだ。

「狼さん、その……」

「異形の鬼は討滅した。今後鱗滝門下生が選別に沿わない鬼に襲われることはない」

口を開いた錆兎を手で制し、狼は事実を端的に伝えた。その一言に、錆兎と義勇の顔色が目に見えて明るくなる。

「ありがとう、ございます……!」

錆兎が深々と頭を下げた。陰になった顔面からは、止めどなく涙の雫がこぼれ落ちていく。その横で、義勇は声もなく泣いていた。

「錆兎、腕がなくとも鬼にあらがう術はある。直に戦わずとも、戦うものを助ける道が。

義勇、悔いるのならば強くなれ。どれほど泣こうとも、過ぎたことは戻らない。鬼殺の剣士として、なすべき事を見据えろ」

そう言い残し、狼は静かに小屋を去った。

「強くなれるかな、狼さんみたいに」

その背を見送った義勇が溢した一言を、錆兎は聞き逃さなかった。

「なれるさ。おまえは俺よりも水の呼吸の型を正確に修めてたじゃないか。弾きも咄嗟にできるほどの観察眼もある。弛まず努力を続ければ、柱だって夢じゃない。

俺は隠になる。片腕でも人を運ぶくらいはできるから、怪我人を素早く医者のところへ連れて行けるようにな」

新たな目標を見据えた2人の少年は、互いに固い決意を秘め頷き合う。その様子を、窓から差し込む陽光が優しく照らしていた。

狼に弟子を任せ小屋を去った鱗滝は、狭霧山の修練場へと足を運んでいた。何をするでもなく霧のかかった木々の間を見る初老の男性の目には、光が無い。

「手鬼……厄除の面が、厄を呼んでいたとは」

錆兎と義勇は、1つの失態を犯していた。老いから人の顔がおぼつかない義勇の烏を、話し合いの間遠ざけなかったことだ。

入用中天狗の面を外した鱗滝を、義勇の鋭烏は主人と間違い話しかけた。鱗滝は悪いと思いつつも、弟子たちの尋常ではない落ち込みの原因を知るべく間違いにつけ込んだ。その結果真実を知ってしまったのだ。

「儂は、鬼に餌をくれてやっていたのか。未来ある若者を、儂への怨みを鎮めるための人柱としていたのか」

考えるほどに、思考は負の面へと傾いていく。聞こえないはずの、子供たちの怨嗟の声すら聞こえてくるようだった。

衝動的に、護身用の短刀を握りしめたときだった。その手を、背後から伸びた手が握り止めたのだ。

「……狼か、ずいぶんと早いな」

「鱗滝殿、今なにを?」

誤魔化すような鱗滝の一言に頓着せず、狼は珍しく強い口調で詰問した。

「なに、あまりの情けなさに思わず手が動いただけだ。この情けない身が首を差し出したところで、贄にされた子供たちは許してはくれない。

無意味に死んで楽になるなどという逃げは、儂には許されん」

「鱗滝殿、まさか」

「儂の予感は当たっていたわけだ。儂はあの藤の檻に入れた鬼に、餌を放ってやってい

た。他でもない、儂が捕らえた鬼にだ。聞けば、見分けがつきやすいよう面の目印まで付けてやっていたというではないか。

……狼よ、儂は怨まれているだろうな。鬼に喰われた子供たちは、みな才気ある若者だった。その芽を摘んだ儂を、今も怨み呪っているだろうな」

深く息を吐いた鱗滝へ、狼はかける言葉が見つからなかった。これは、ほとんど鱗滝から教えを受けていない狼には立ち入ることができない問題だ。

霧の中、狼は沈痛な趣で懐を弄った。

「狼？」

鱗滝の疑問に答えず狼は懐から2つの品を出した。1つは僅かな水が封ぜられた和紙の風船。もう1つは、鈴の細工が施されたクナイだ。

「鱗滝殿、この身は鱗滝殿の弟子を知りませぬ」

狼は風船を胸の前で構え、音を立てて割った。計算したのか、水は鱗滝の足下へ飛び散る。

しばらく祈るように両手を合わせると、狼はクナイを持って鱗滝の周囲を歩き始めた。

「狼、何をしている？」

鈴の音を聞き流しながら鱗滝は訝しむが、狼は足を止めない。

「故に、これはこの身が見せるものではなく、また鱗滝殿が生み出した都合のいいものでもありませぬ。
鱗滝殿、この者たちに心中をお話しくだされ」
狼が鱗滝の正面で立ち止まり、強く指を鳴らした。霧の中、硬質な音が緩やかに広がっていく。
そして、変化が訪れた
「これ……は……」
霧の中から、滲み出るように狐面の子供たちが現れたのだ。皆意匠の違う狐面を付けており、腰には日本刀を佩いている。
木々のざわめきが、風の音がまるで声のように響く。
鱗滝さん、僕たちは怨んでないよ。怒ってないよ。
僕たちはみんな鱗滝さんが大好きだから、謝りたかった。
帰ってこられなくて、悲しませてごめんなさい。
「おまえたち、そんな、儂がもっとおまえたちを鍛えられていれば……あの鬼を捕らえず切っておけば……！」
鱗滝は服が汚れることも忘れてか、両膝をつくようにして崩れ落ちた。仮面の下からは涙が溢れ落ち、霧の子供たちを抱きしめるように腕を広げている。

その様子を背後に、狼は静かに山を下りはじめた。背後から聞いたことがある少年の声が狼へと呼びかけたように感じるも、彼が振り返ることはなかった。

数日後。鱗滝とその弟子たちから手紙が届き、狼は珍しく笑みを溢すことになる。

炎柱と狼衆

狼衆の実戦投入が決定した翌日、狼屋敷に珍しい来客が訪れていた。燃える炎のような髪を持つ偉丈夫。鬼殺隊最高位の称号である、炎柱の地位を持つ男。煉獄槇寿郎だ。

事前に烏による知らせがあったため、狼からすればとくに驚くような訪問ではなかった。だが狼衆、特に赤の襟巻きを身につけた子犬組たちにとって、柱は雲の上の存在だ。目に見えて動揺が広がり、見かねた狼は槇寿郎を屋敷の奥へと案内した。

「見苦しいところをお見せした。

煉獄殿、ご用件は」

茶とおはぎを差し出しながら、狼は簡潔に問う。槇寿郎からすれば、狼から甘味を差し出されるという予想外の体験に動揺していた。敵視する形となっている相手から当たり前のようにもてなされ、いかに歴戦の炎柱といえども平静を保てなかったのだ。

「……煉獄殿？」

「あ、これは失礼。いただこう」

見かねた狼が再度問うと、槇寿郎はやっと我に返ったようだ。慌てて差し出された茶とおはぎに手をつける。

まずまろやかな甘みが口いっぱいに広がり、ついで心地よい苦みがその残滓を洗い流す。鬼殺隊の柱として、表の顔としての名家煉獄家の当主として相応のもてなしを受けたことがある槇寿郎の舌を、このおはぎと茶は十分に満足させるものだった。

「うまい、いやうまいな！

餡の甘さに粒の残し具合、甘みを引き立てる塩加減まで完璧だ！

緑茶もほどよい渋みで餡のしつこさを消し、何度でも新鮮な味を楽しめる！

狼殿、差し支えなければこのおはぎと茶の仕入れ先を……」

思わずといった様子で熱心に感想を語りはじめた槇寿郎だったが、呆れた目の狼に気がつき言葉を止めた。

しばしの気まずい沈黙の後、咳払いと共に再度話を切り出したのもまた槇寿郎だった。どうやら、先ほどの痴態は無かったことにするらしい。

「歓待感謝する。

今日の話は、狼衆の派遣を頼みに来たのだ」

「派遣……煉獄殿が、ということでしょうか」

「左様」

槇寿郎の肯定に、狼は僅かに面食らった。狼、そしてその配下とも言える狼衆に対して、槇寿郎は否定的な立場であったはずだ。それが意見の偏りを防ぐための表面的なも

のであっても、いや、だからこそその力を借りようとすることは考えにくい。
「説明を。狼衆に肩入れをしていると思われるのは、煉獄殿にとって本意では無いはず」
「俺はお前たちに批判的な立場をとっていた。いかに御館様のお考えでも、全く反対意見が出ない状態は不健全だとな。だが有用性が見込める集団を遊ばせておけるほど、鬼殺隊は余力があるわけではない。
ここで反対派だった俺が実戦で狼衆を直接評価し、利点難点を洗い出して報告をする。難点が大きければ実戦投入前に修正できるし、利点が勝てば反対派でも納得するほどの集団に育ったと太鼓判を押すことができる。
どちらにせよ、鬼殺隊に損は無い」
槇寿郎の説明は、狼にとって十分に納得のいくものだった。たしかに反対派の筆頭だった槇寿郎が有用性を認めるはこびになるならば、鬼殺隊内で発生するであろう狼衆への反発はある程度の軽減が見込める。認め難くとも、炎柱が利を認め意見を曲げたという事実はそれほどまでの価値を持つのだ。
「依頼の内容について、お話願いたい」
鬼殺隊、ひいては産屋敷に利があるのならば狼としては断る理由はない。備忘録のため筆と和紙を用意した狼を見てから、槇寿郎は事の詳細を話し始めた。
「先日、鬼殺隊の協力者から情報提供があった。なんでも、東京の八丈島に不可解な一族

がいるとな。

江戸の時代に島の治安維持機構として幕府から派遣され、今では名家として君臨しているらしい。すでに治安維持組織からは手を引いているにもかかわらず、家を支える経済基盤が見当たらない」

確かに不審な話ではあるが、ただの人間が不正を行っているだけという可能性は十分にある。鬼殺隊は正義の集団というわけではないのだ。究極的には復讐者の寄り合い所帯という表現が適切な暗い組織であり、目の前の犯罪を止めることはあっても俗世の犯罪を暴くために力を裂くことはない。

そのことを忘れたわけでもないだろうにと狼が眉を顰めるが、槇寿郎は意に介さず話を続ける。

「最後まで話を聞け、問題はここからだ。

なんでも、彼の島では定期的に神隠しの被害が出るらしい。江戸末期までは彼の名家が蛇神様のお召し上げと言ってろくに調査をしなかったらしいのだが、明治に入ってからは派遣された警官が調査をしようとするたびに失踪している。古くからと同じく、一切の痕跡無しでな。

それらを怪しんでいた協力者の元に、彼の名家に仕える使用人から助けを求める文が届いたらしい。行方不明者の死体を食う、半身蛇の怪物が屋敷にいたとな。

協力者は使用人の古馴染みと偽り連絡を取ったのだが、そんなものはいないと追い返されたとのことだ。その話を最後に、協力者との連絡は途切れている」

屋敷に潜むという半身蛇の怪物、そしてかつて名家が神隠しの実行者だと主張していた蛇神様。偶然だとするには出来過ぎた一致だ。

「話の裏は」

「まだだ。だからこそ、狼衆の力を借りたい。

隠でも調査はできるだろうが、危険が過ぎる。狼衆が噂通りの力を持っているならば、より早く安全に情報を集められるだろう」

今までの鬼殺隊では、こういった噂話は隠が裏取りをしてから剣士が動く流れが通例となっていた。最低限鬼が出る確証を得て、はじめて隊士が送り込まれるのだ。この原則により、柱をはじめとした鬼殺隊の貴重な戦力の無駄足を防いでいる。

しかしこの原則のせいで鬼の被害が拡大することは避けられない。また一定数の人間を喰った鬼にとって、隠や未熟な隊士は良い餌となってしまう。鬼の実力が判明するまでの間送り込まれることとなる隠や低階級の剣士は、生贄に等しい存在と言えるだろう。

そこで並の隊士よりも生き残りに長け、諜報もこなせるという触れ込みの狼衆はまさに画期的な存在なのだ。今回の任務で挙げる成果次第で、狼衆全体の今後が大きく左右

されるといっても過言ではない。
「お受けいたします。詳細な情報をいただきたく」
「そう言ってくれると信じていだぞ。これにまとめてある」
狼の答えに、槇寿郎は笑みと共に書簡を手渡した。広げれば怪しまれている屋敷だけでなく、島への定期便や大まかではあるものの地図も書かれている。
「明日にでも乱破組を向かわせましょう。煉獄殿が島へと向かう際には、お好きな組をつけまする」
「ではお言葉に甘えるとするか。実戦でどの程度動けるのか、目にしないとわからんからな」
そのまま連絡手段や行動予定の打ち合わせが行われ、諸々の準備が整ったために帰ろうと腰を上げた槇寿郎を狼が制した。
「いかがした。すでに今日話し合うことは全て済んだと思ったが？」
疑問を投げかける槇寿郎へ、狼は紙に何かを書き込みながら首を振った。
「いえ、未だ一つ要件が残っております。
こちらを」
差し出された紙を槇寿郎は訝し気に受け取り、そこに書かれた内容を見ると首を捻った。二軒分の店名と住所が書かれているのだ。

「狼よ、この店らがどうかしたのか？
　この屋敷から近いようだが」
　なんの店かわからないうえ、何故今店の紹介をするのか。首を捻る槇寿郎へ、狼は至極真面目な表情のまま口を開いた。
「お出しした茶葉とおはぎを取り扱っている店です。差し支えなければとのことでしたが、店を教えて問題があるわけではないので」
　僅かな沈黙の後、思わずといった様子で槇寿郎は噴き出してしまった。狼の真面目な表情と、紙に書かれた情報のずれに耐えきれなくなったのだ。
「狼、おぬしなかなか律儀な男だな！
　ありがたくこの紙頂戴する。おかげで家内と息子にいい土産を買える！」
　豪快に笑いながら、墨が乾ききっていない和紙を槇寿郎は慎重に懐へと収めた。間に薄紙を挟んだため、読めなくなるといった悲劇は起きないだろう。
「では、これにて失礼する！」
　上機嫌のまま、槇寿郎は狼屋敷を去った。狼はその背が見えなくなると、屋敷に戻り鎹烏を呼び寄せた。
「組頭を広間へ」
　頷いて飛び立った烏を見送り、狼は屋敷の中央に作られた広間へ向かう。ただ広間と

呼ばれるその部屋は、名前に相応しい広さを持つ多目的空間だ。普段は食堂として使用されているこの広間に呼び出されるということは、組頭たちにとって重要な意味を持つ。

狼は広間に入ると、備え付けの調理場へと向かいある壁の前で立ち止まった。日輪刀を鞘ごと引き抜き、突き刺すように床と壁の隙間へ切っ先を押し込む。音もなく壁が横にずれ、地下室への入り口が姿を現した。狼衆組頭たちにのみ知らされている、地下会合室だ。

蝋燭の明かりだけが照らす地下室で1人佇む狼だったが、程なくして組頭たちが姿を見せる。例により一切の前置きなく、狼の説明が始まった。

「炎柱から狼衆派遣の要請があった。詳細はこれだ。黒は先行し、現地及び屋敷の情報を集めろ。茶と藍は炎柱と共に出立する。

この件の成果次第で、狼衆の今後が決まるだろう。各自これはと見込んだ者を一名選び任に当たらせろ」

説明が終わり狼は沈黙を挟んだが、組頭たちから質問の声は挙がらなかった。皆が渡された資料へと目を通し、脳内で派遣すべき者の選別を開始している。

「人員の選別は、明日の昼までを期限とする」

そう言い残して狼は部屋を去り、残された組頭はしばらくの間地下室で頭を悩ませる

こととなった。

数週間後。狼衆が初投入された炎柱の任務は、無事成功と相成った。乱破組は事前潜入により精度の高い情報を手に入れ、炎柱に同行した孤影組と寄鷹組は、情報を精査し鬼の足止めと人命救助に活躍した。彼らの活躍がなければ被害は拡大し行動も遅くなっただろうと炎柱直々の評価により、狼衆へ次々に任務が持ち込まれている。

そんななか新部隊評価の原動力となった槇寿郎へ直々の礼を伝えるため、狼は任務に携わった狼衆たちを引き連れ烏に先導されながら煉獄家へ向かっていた。すでに槇寿郎から訪問許可は出ているため、手土産にも抜かりはない。

「ソノ角ヲ曲ガレバ炎柱ノオ屋敷ダ！　スグニ門ガ見エルゾ！　カアァァァァ！」

「わかった。

あまり町中で話すな。見られれば面倒なことになる」

興奮気味の烏を宥めつつ歩く狼の耳に、騒がしい声が届いた。興奮した女たちの声が主であり、何人もの声が混ざり合い内容を聞き取ることができない。狼の優れた聴覚は、その中から弱々しい男性の声を拾い上げることに成功した。

「……煉獄殿？」

常に自信に溢れた佇まいを崩さないはずの男の声とは思えないほどに弱々しい、しか

し確かに聞き覚えのある声に狼は走り出した。即座に曲がり角へとたどり着き、飛び出すように声の元を視界に収める。

そこには数人の女性が槇寿郎を取り囲むようにして喚き散らす、見苦しい光景があった。

その気になれば剣気も出さぬ威圧で、女たちは指一本も動かせぬようにできるだけの実力を槇寿郎は持っている。鬼殺隊士、それも最高位の柱としての矜持が、ただの女へと悪意を向けることを邪魔しているのだ。

「……御免」

状況を把握するため狼は横から声をあげた。突然横から口を挟んだ男に女たちが視線を向け、その背後に建つ男たちを見て硬直する。

「あ、あんたたち、あの夜の……！」

何のことだかわからない狼は困惑するも、女たちは露骨に狼の背後に立つ狼衆たちへ視線を飛ばしている。

「き、今日はここまでね。帰りますよ！」

そう言い残し去っていく女たち。首を捻る狼へ、狼衆の1人が囁きかけた。

「頭目、女たちの1人に見覚えが。件の屋敷で暮らしていた一族です」

その情報に、狼の疑念が深まった。報告には、狼衆が屋敷の異変を察知し急行。怒り

狂う異形の鬼を足止めし、少なくない屋敷の人間を救ったと記されていた。とどめを刺した槇寿郎共々、感謝こそすれ罵声を浴びせる理由がない。

悩む狼へ、槇寿郎が声をかけた。

「狼殿、助かったぞ」

普段の快活さは見る影もなく、普段を知る者からすればまるで別人に思えるほど憔悴している。

「煉獄殿、いったい何が?」

「道端で話すことではない。家へ入ってくれ」

促されるまま、狼と狼衆は煉獄邸へ足を踏み入れた。

玄関で靴を脱いでいると、廊下から1人の女性が姿を現した。涼やかな顔の奥に、確かな芯を感じ取ることができる。

「瑠火さん、客人が来た。茶と菓子を頼みます。狼殿、紹介は初めてだったな。妻の瑠火だ。

身ごもっている故十分な歓待ができんのだが、容赦してほしい」

「はじめまして、狼様。槇寿郎様からお話は常々伺っております。

手狭な家ですが、どうぞこちらへ」

瑠火の先導で通された客室に座ると、槇寿郎と狼に茶と茶請けが差し出された。瑠火

が一礼して退室したことを確認し、狼は話を切り出す。
「して煉獄殿、あの者たちは一体。命を救われた者の対応とは思えぬ物言いでしたが」
狼の質問に、槇寿郎は話しにくそうに口を開いた。
「なんでも、あの一族は鬼と契約を結び栄えてきたらしいのだ。
鬼に適当な人間を喰わせ、遺留品を我が物とする。そうやって生きる糧を手にしていたんだ。
あまりにも悍ましいが、彼女らにとってはそれが当たり前の生活だったのだな。生活の基盤を失い、どうしてくれるのかと連日詰めかけてきている」
呆れかえるほど身勝手な理由に、狼はしばし言葉を失った。
「煉獄殿、それならば何故に知らせてくださらなかった。
あの様子から、狼衆はあの者どもに酷く恐れられている様子。数度顔を出し親しい間柄であると示せば、そう遠くないうちに近寄りもしなくなりましょう」
狼の問いへ、槇寿郎は苦笑を返した。
「考えなかったわけではない。狼殿ならば、あの者たちを追い払うなど容易だろう。
だが、あの者たちもある意味では鬼の被害者だ。鬼により生き方を歪められた一族に、たまたま生まれてしまっただけなのだから。
それにだ。もしもあの者たちが鬼殺隊、ひいては産屋敷家に害をなすと判断すれば、

狼殿はあの者たちを消すだろう?」
さらりと紡がれた言葉に、狼はなんの反応も示さない。背後に控える狼衆たちは、どう反応をするべきか混乱を露わにしている。
「形だけでも否定しないか。狼殿は誤魔化しが効かんな。
その苛烈な気配からもしやかとは思っていたが、やはり狼殿はそういった手段に嫌悪はないか。
すまないが炎柱として人々を守ってきた一族としては、たとえあのような者でもそのような対処はできんのだ」
まっすぐな瞳の槇寿郎に、迷いの色は見られない。たとえ自らに不利益であろうとも、牙無き者のためにそれを飲み込む度量が見て取れた。
しかしそれは、あくまでも不利益がもたらす悪感情を堪え塞いでいるだけだ。狼の脳内に、僅かな危機意識が芽生える。
「今宵から、こちら方角に用がある狼衆を立ち寄らせましょう。手を出さずとも定期的に姿を見せ続ければ、繋がりが強いと感じ取りいずれ手を引くかと。
家を離れている間にかの者たちが来ても面倒でしょうから、任務に一人狼衆を同行させましょう」
「……そう言ってもらえるのはありがたい。狼衆には手間をかけさせるが、よろしくお

願いする」

ひとまず日常の負荷を僅かにでも軽減することが先決と考えた狼の提案を、その真意に気づいていない槇寿郎は申し訳なさそうに受け入れた。